

安芸地方における土師質土器坏・皿類の研究（下）

永田千織・藤野次史

安芸地方における土師質土器坏・皿類の研究（上）

1. はじめに
2. 広島大学東広島キャンパスの土師質土器坏・皿類と出土状況
 - I. 鏡西谷遺跡
 - II. 鏡東谷遺跡
 - III. 鏡千人塚遺跡
 - IV. その他の遺跡
3. 鏡遺跡群を中心とする土師質土器坏・皿類の形態および製作技術の特徴
 - 1) 側面形態（側面観）
 - 2) 色 調
 - 3) 法 量
 - 4) 調 整

（『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第5号、2014年）

4. 安芸地方における土師質土器坏・皿類出土遺跡の様相

1) 安芸地方の土師質土器研究の現状

広島県における土師質土器の研究は福山市草戸千軒町遺跡の調査により本格化した。草戸千軒町の調査は、同時に日本考古学における本格的な中世研究の始まりでもあり、草戸千軒町遺跡の調査研究の進展は中世研究に大きな影響を与えた。草戸千軒町遺跡は13世紀中頃～15世紀を中心とする鎌倉時代～室町時代の遺構が良好に残されており、土師質土器は遺構出土の一括資料をもとに編年され、共伴の陶磁器、瓦器により実年代が与えられていった。草戸千軒町遺跡における土師質土器の編年は志道直直によって体系的にまとめられ（志道1977）、その後、新たな調査成果を加えながら、鈴木康之によって整備された（鈴木2006）。14世紀後半～15世紀初頭の様相がほとんど不明であるなどの問題点が残されているものの、備後地方南部の土師質土器編年はほぼ確立しているといえよう。

一方、安芸地方（広島県西部）に目を転じると、開発に伴う遺跡調査が多く実施された広島湾岸、西条盆地を中心として、中世の資料蓄積が進展しているものの、土師質土器の研究は、十分進展している状況ではない。発掘調査の状況についてみると、広島湾岸では旧国府域の遺跡や山陽道沿いの公的性格の強い遺跡、寺院関連遺跡などを中心としている。西条盆地でも安芸国分寺跡やその周辺遺跡などを主体としており、溝口4号遺跡（吉野編 2010）など一部に荘園に関連する遺跡を含んでいる。これらの中には豊富な出土遺物をもつ消費地遺跡が含まれ、中世における商品流通解明や編年研究に重要な資料を提供している。しかし、流通拠点、中継地の性格をもつ遺跡の調査・解明は手つかずの状態であることや草戸千軒町遺跡のように長期にわたって遺構が形成され、一括資料を抽出することができる遺跡の調査例がないことなどが、本地方における土師質土器編年研究の進展を阻んでいる原因の一つである。

安芸地方における土師質土器杯・皿の研究について概観してみると、安芸地方全体を対象とした編年は吉野健志の研究（吉野 1998）を挙げるのができるのみである。吉野は、安芸地域では須恵器系供膳具が消滅する12世紀末～13世紀初頭の時期を古代的なものから中世的なものへと移行するもっとも重要な画期と捉え、輸入陶磁器が伴出する遺構から出土の土師質土器杯を概観し、輸入陶磁器の年代をもとに、安芸Ⅰ期～Ⅵ期の6時期を設定した。Ⅰ期は鏡西谷遺跡に代表され、浅形杯と瓦器を伴う時期、Ⅱ期は浅形杯と深形杯の2形態が存在する時期、Ⅲ期は浅形杯と深形杯がそれぞれの系統を引き継ぎつつも両形態の法量の差がなくなり、均質化していく時期、Ⅳ期は浅形杯と深形杯の区別がなくなり、杯というより皿化していく時期、Ⅴ期は、底径が口径の半分近くまで小さくなり、体部が直線的に広がる皿型に変化する時期である。Ⅵ期はⅤ期のような皿形杯にかわって、体部が内彎し器壁が厚く、器高が低い皿が出土するようになる段階である。吉野Ⅴ期にみられる皿形杯は、山口県山口市大内氏館跡を中心に出土する、A式土師器皿（在来系土師器皿）に類似するものである。この他に、土師質土器についての詳細な記述はないが、小都隆が城館遺跡の年代を決めるための指標の一つとして、14～16世紀の広島県出土土器を4期に分けて編年している（小都 2006）。土師質土器は杯、皿を中心とし、陶磁器類とともに編年図として提示している。

土師質土器杯・皿に関連する編年研究は発掘報告書を中心に行われており、奥田泰将（1986）、出野上靖（1988）、増田直人（2003）、などを挙げるができる。奥田は広島市池田城跡出土の土師質土器杯・皿類を皿として一括した上で、底部の製作技

法、法量を組み合わせることで A I～A III、B I～B III、C I・II の 8 類型に分類し、器壁の厚さや各部の形態などから各類型を細分した。類型の時間的位置づけは、池田城跡の出土遺物は 12～14 世紀前半の I 期、15～16 世紀前半の II 期の 2 時期に大別され、出土地点や共伴遺物から、A I'、A II'、A III は I 期、B I、B III' は II 期に位置づけられるとした。底部成形技法からみると、A のヘラ切り技法が先行し、遅れて B の糸切り技法が出現し、B 出現後も A が共存するとしている。出野上は尾道市俵崎城跡出土土師質土器の皿、坏、碗の組み合わせの変化を論じている。皿の底部切り離し技法により A 類（糸切り）と B 類（ヘラ切り）の 2 種類に分類し、A 類を口径を中心に 1～3 類に細分した（A-2 類は体部形態でさらに a・b 類に細分）。遺構の切り合い関係や周辺地域の遺跡との対比により、碗（14 世紀後半）→皿 A 1 類・A 2 b 類・A 3 類（15 世紀後半）→皿 A 2a 類・3 類、皿 B 類（16 世紀前半）→皿 B 類（16 世紀）の組み合わせで変化するとした。増田は東広島市鏡西谷遺跡出土の土師質土器坏・皿の法量、共伴遺物、出土状況、形態などを検討し、大きく 3 時期に編年した。第 1 期は 12 世紀代、第 2 期は 13 世紀前葉、第 3 期は 14 世紀以降に位置づけており、坏は、器高が高く口径の小さいものから器高が低いものへ、器壁は厚手のものから薄手のものへ、口縁部は外彎するものから直線的なものへ形態変化するとみている。

安芸地方の土師質土器坏・皿の特徴については、鈴木康之、吉野健志の考察がある。鈴木は安芸地方と備後地方の土師質土器（文中では土師器と表現）を比較し、備後地方では碗・坏・皿の 3 種が供膳形態として存在するが、安芸地方では碗が存在せず、坏・皿のみの組み合わせであること、備後地方では回転ヘラ切りが古代以降踏襲されているが、安芸地方では回転糸切りが採用されていることを指摘した（鈴木 1995）。広島大学東広島キャンパスの鏡西谷遺跡 C 地区 S B 01 出土遺物に碗が含まれていないことから、少なくとも 13 世紀前半には碗が消滅していたと考えている。

吉野は土師質土器に地域流通品と広域流通品があり、安芸地方においては、皿・坏・碗は前者に、鍋は後者にあたりと想定した（吉野 2012b）。地域流通品は庄郷単位で流通すると想定しており、具体的な例として、東広島市内における 13 世紀前半の浅型坏を取り上げて、西条盆地では「体部が内湾し、強いミズヒキ痕を見せるのに対し、高屋地域のもののは体部が直線的に広がる」という特徴の相違を指摘している。

2) 安芸地方出土の土師質土器坏・皿の概要

土師質土器は中世遺跡における出土遺物の中核をなすもので、量的多寡を捨象すればいずれの遺跡でも基本的に認めることができる。安芸地方南部を中心に発掘調査が

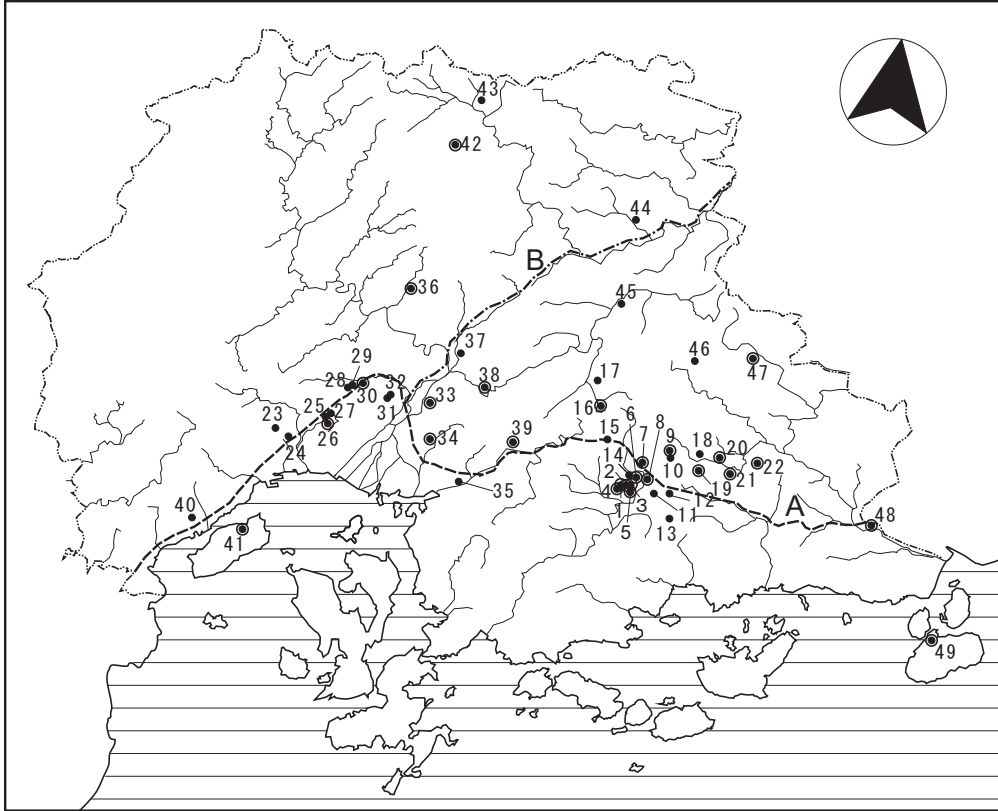
行われており、西条盆地およびその周辺（以下、西条盆地）、広島湾岸において多くの遺跡を確認することができる。また、安芸地方南東端部に位置する沼田川下流域とその周辺（以下、沼田川下流域）、安芸地方北部（以下、芸北地域）の北広島町や安芸高田市などでも重要な調査が実施されている。ここでは、西条盆地、広島湾岸、沼田川下流域、芸北地域の4地域に分けて、遺構一括の資料や時期的なまとまりが窺える資料を取り上げて、土師質土器杯・皿の様相を概観してみたい。

なお、皿と杯の区分であるが、時期や地域、遺跡単位を捨象すると、法量の上では両者の変化は連続的であり、一部重複している。形態、法量のみで厳密に区分することは困難な状況と言える。また、安芸地方において中世後期に杯の器高が縮小し、皿化していくことはすでに指摘されているところであり（鈴木1995）、変化の要因として、食器に盛る料理の内容、食文化、儀礼の内容など多様な背景があったものと想定される。器種の形態変化、組成と機能の問題は不可分の関係にあり、用途を十分に検討した上で区分すべき問題であるが、現状では考古学的、文献史的に機能の問題に迫ることができる状況にはない。本稿では、器種の形態的变化の検討も編年の重要な指標としているので、杯形、皿形の器種の通時的な変化を追及するため、鏡西谷遺跡の様相をもとに、便宜的に口径10.1cm以上、器高2.1cm以上を杯、口径10.1cm未満、器高2.1cm未満を皿として区分する。また、口径10.1cm以上の杯のうち、口径に対して器高の比率（器高比）が0.2以下のものは皿として分類する。

西条盆地 西条盆地とその周辺部を含む地域を包括している。西条盆地は東広島市のほぼ中央部に位置しており、安芸国分寺跡が位置する西条盆地北部、鏡山周辺を中心とする西条盆地中央部の各所で発掘調査が実施されている。また、西条盆地に隣接する白市盆地、志和盆地、東広島市豊栄町などにも多くの中世遺跡が分布する。

①石佛遺跡（東広島市西条町大字吉行字石佛）

山陽自動車道建設に伴って1986・87年に調査され、中世古墓53基、土師質土器焼成窯跡1基などが検出された（佐伯1990）。土師質土器焼成窯跡内の最終焼成面からは土師質土器杯・高台付皿（第2図1～4）が伏せた状態で出土し、奥壁寄りからは瓦器碗（第2図5）が出土した。杯は器高が低い皿状の形態で、底部～口縁部まで緩やかに内彎するもの（1）、体部上半～口縁部の傾斜が急で、口縁部は直立気味のもの（2）、口縁部が直線的なもの（3）が認められる。口径は14.0～15.0cmである。皿（4）は体部～口縁部がわずかに内彎するが、直線的に大きく開いている。杯・皿とも底部は回転ヘラ切り調整である。土師質土器はいずれも二次焼成を受けており、外面には



第1図 安芸地方における土師質土器出土主要遺跡分布図

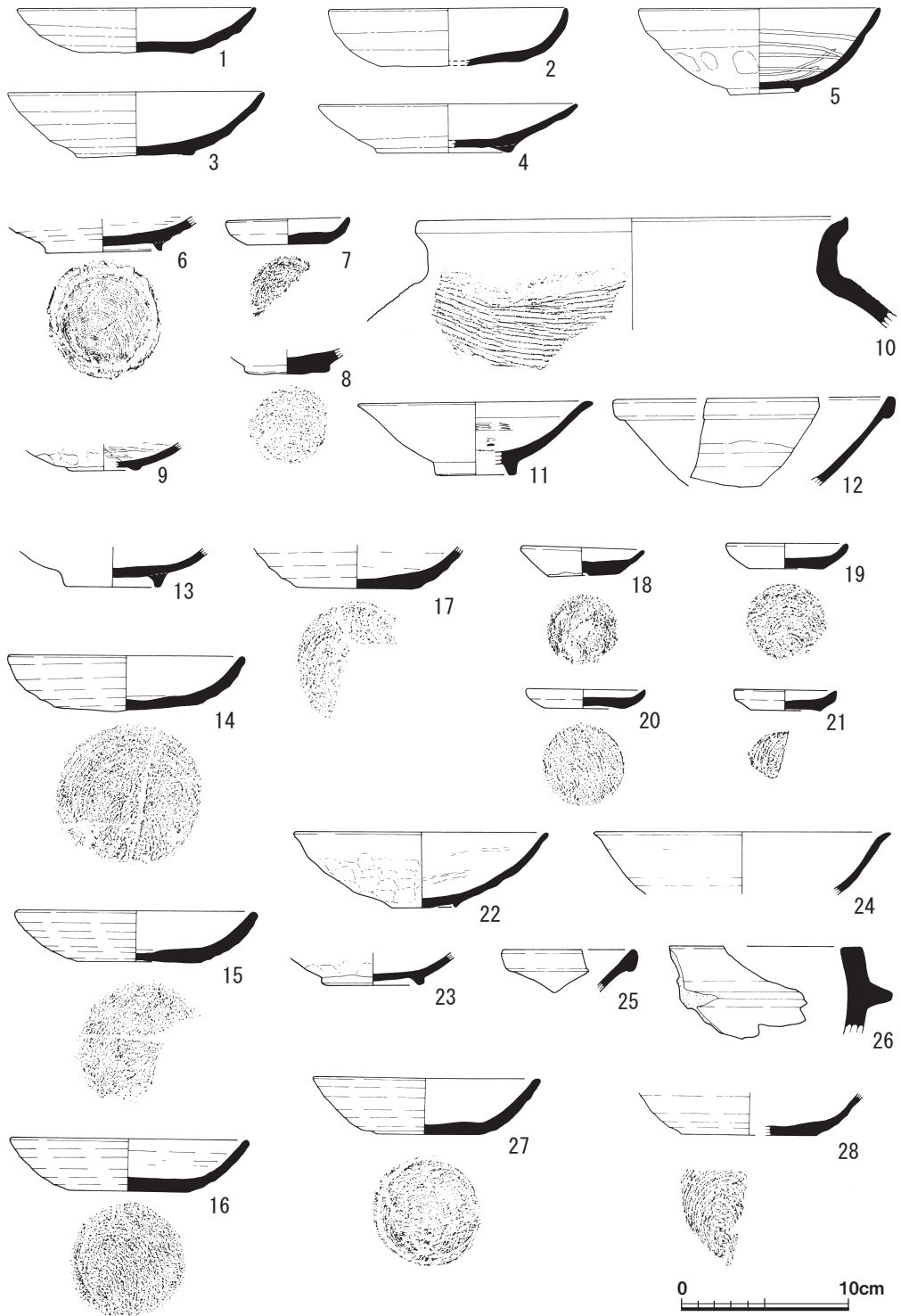
(二重丸印は本稿で取り上げて分析した遺跡である。破線および一点鎖線は街道で、Aは推定中世山陽道、Bは推定中世出雲街道である。)

1. 鏡西谷遺跡 2. 鏡東谷遺跡 3. 鏡千人塚遺跡 4. 山中池南遺跡群 5. 清水奥山遺跡 6. 狐が城跡 7. 山崎1号遺跡 8. 道照遺跡 9. 浄福寺遺跡群 10. 古慈喜城跡 11. 五反田遺跡 12. 上泓遺跡・荒谷土居屋敷遺跡 13. 福成寺旧境内 14. 助平古墳 15. 土居遺跡 16. 時宗遺跡 17. 今田遺跡 18. 東田遺跡 19. 溝口4号遺跡 20. 御土居遺跡 21. 上条遺跡 22. 薬師城跡 23. 月見城遺跡 24. 池田城跡 25. 下沖2号遺跡 26. 有井城跡 27. 串山城遺跡 28. 伴城跡 29. 伴東城跡 30. 国重城跡 31. 尾首城跡 32. 今市城跡 33. 幾志山城跡 34. 北谷山城跡 35. 畝観音免古墳群 36. 恵下城跡 37. 寺山城跡 38. 横山城跡 39. 三ツ城跡 40. 門山城跡 41. 菩提院遺跡 42. 吉川元春館跡 43. 小倉山城跡 44. 耳塚古墳 45. 上滝川1号遺跡 46. 福原城跡 47. 中屋遺跡B地点 48. 三太刀遺跡 49. 俵崎城跡

顕著な火はね痕が認められた。出土の状態から窯廃絶に関連する祭祀等の行為と思われる。土師質土器は内部に炭、焼土が詰まっていたが、瓦器は空洞の状態であり、二次焼成痕は観察されないことから、厳密な意味での同時存在ではないと判断される。

②道照遺跡（東広島市西条町大字御菌宇）

1982年に広島県教育委員会（鍛冶編1982）、1991年に東広島市が調査を行っている（藤岡1993）。いずれの調査区も中世前期の遺構を主体としているが、出土陶磁器



第2図 石佛遺跡、道照遺跡（東広島市調査地区）出土の土師質土器坏・皿類と共伴遺物
 (1～5. 石佛遺跡、6～28. 道照遺跡)

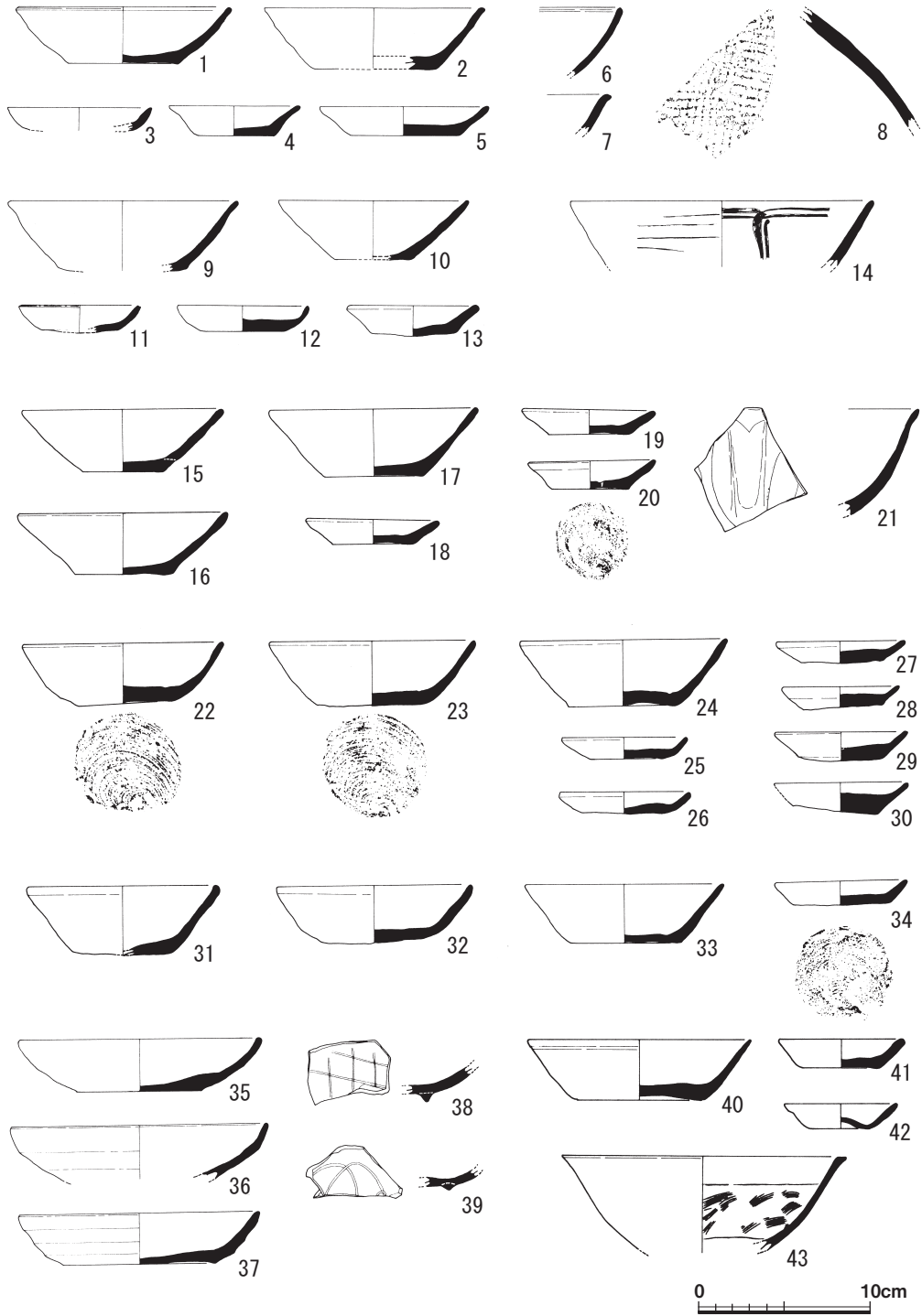
の様相からみると両調査区では主体となる遺構形成時期に差が認められる。

東広島市調査区では、溝状遺構 3、土坑 6 が検出されている。S D 002 では土師質土器とともに、瓦器、中国産白磁などが出土した(第 2 図 6～12)。土師質土器は、埴、坏、皿が確認できるが、形態のわかるものはわずかである。埴(6)は底部のみで、断面三角形の高台を貼り付けている。他の土師質土器とは胎土が異なり、黄白色でやや硬質である。坏は底部のみの破片である。皿(7)は口径 7.0cm 程度の小型品で、体部は内彎する⁽¹⁾。また、粘土板貼り付けによる底部成形の小型品(8)があり、皿と思われる。埴と同様の胎土を有する。土師質土器はいずれも底部回転糸切りである。土師質土器とともに出土した遺物は瓦器埴(9)、東播系須恵器甕(10)、白磁碗(11・12)である。S D 003 では土師質土器とともに、瓦器、中国産白磁などが出土した(第 2 図 13～26)。土師質土器は埴・坏・皿が認められる。埴(13)は底部～体部最下部の破片で、体部は丸みを持っている。S D 002 出土品とほぼ同様の特徴をもつが、底径約 5cm の小型品である。坏(14～17)は口径 14.0cm 程度、器高 3.0cm 程度で、口径に比較して器高が浅い形態である。口縁部～体部が緩やかに内彎する形態(14・15)を基本とし、厚手である。口縁部が直線的なもの(16)は体部から口縁部がやや薄手である。外面は顕著な回転ナデ調整を残し、凹凸が著しい。皿(18～21)は口径 6.0～7.0cm の小型品で、器高は 1.5cm 前後と低い。直線的で底部と口縁部の厚さが極端に異なるもの(18)、内彎するもの(19・20)、口縁端部に面取りを行うもの(21)がある。土師質土器とともに出土した遺物は瓦器埴(22・23)、白磁碗(24・25)、石鍋(26)である。S K 006 は S D 001 埋土上面から掘りこまれた土坑で、土師質土器とともに、瓦器埴が出土している。土師質土器は、坏、皿が認められる。坏は全体の形状がわかるもの(第 2 図 27・28)はわずかである。27 は口径 13.3cm、器高 3.4cm で、口径が小さい分、やや深い印象を受ける。28 は口縁部付近を欠くが、復元底径は 27 より一回り大きい。27 に比べてやや薄手で、底部端は比較的鋭利に屈曲して底面に移行している。その他は底部のみで、全体の形状は不明であるが、底部は丸みを有している。皿は底部のみである。坏、皿ともに底部は回転糸切り調整である。

S D 001・002 は溝状遺構であり、ある程度の時期幅を想定する必要があるが、土師質土器に伴って出土した土器類は一定の時間幅の中におさまっており、S D 001・002 については 12 世紀代を中心とする資料と考えられる。S K 006 の坏は口径がやや縮小しており、鏡西谷遺跡 C 地区 S B 01 出土資料に対比できるかもしれない。出土の瓦器の型式とも矛盾はない。

広島県調査区では、掘立柱建物跡 12、鍛冶場跡 2、井戸 5、濠 1、柱穴多数が検出されている。一括性の高い状態で出土している資料として、掘立柱建物跡の S B 10・18 出土遺物がある。また、土器溜り状遺構の S X 23・24・25 はほぼ同時期の土器類を廃棄したと考えられる。中でも、S X 24 は浅い土坑状の窪みから出土しており、一括遺物と報告されている。S B 10 では、土師質土器とともに瓦器埴、中国産白磁碗、亀山焼甕が出土した（第 3 図 1～8）。土師質土器は、坏、皿のほか、鍋が確認できる。坏（1・2）は口径 12.5cm 前後、器高 3.2～3.5cm である。体部がゆるやかに内彎し口縁部がわずかに外彎するもの（1）、体部が直線的で口縁部がわずかに外彎するもの（2）がある。皿（3～5）は口径 8.0cm 前後であるが、5 は口径が約 10cm でやや大型である。内彎するもの（3）、外彎するもの（4）、口縁部が緩やかに内彎、底部がわずかに外彎するもの（5）がある。共伴遺物は、瓦器埴（6）、白磁碗（7）、亀山焼甕（8）である。S B 18 では土師質土器とともに、中国産青磁碗が出土した（第 3 図 9～14）。土師質土器は坏、皿が確認できる。坏（9・10）は口径は 11.0～13.0cm 程度、器高 4.0cm 前後である。口縁部が内彎、体部が緩やかに外彎するもの（9）と口縁部から底部まで直線的なもの（10）がある。皿（11～13）は口径 7.0cm 前後、器高 1.5cm 前後である。内彎するもの（11・12）、外彎するもの（13）が出土している。

S X 23 では土師質土器とともに青磁碗が出土した（第 3 図 15～21）。坏（15～17）は口径 11.4～11.8cm、器高 3.6～3.9cm である。いずれも体部、口縁部ともに直線的で、口縁部下半がナデによって薄くなっている。皿（18～20）は口径 7.2cm 前後、器高 1.2cm 前後である。おおむね外彎する形態である。青磁碗（21）は横田・森田分類 I - 5 類（鎬蓮弁文）である。S X 24・25 は土師質土器のみで構成され、坏、皿が確認できる（第 3 図 22～34）。S X 24 の坏（22～24）は口径は 11.7cm 前後、器高 3.6cm 前後である。口縁部～体部上半は直線的に開いており、体部が内彎するもの（22）と体部全体が直線的なもの（23・24）がある。皿（25～30）は口径 7.0cm 前後、器高 1.2cm 程度のものが多い。内彎するもの（25・26）、直線的なもの（27～30）があり、底部と口縁部の厚みが極端に異なるもの（29・30）がみられる。S X 25 の坏（31～33）は口径は 11.0cm 前後、器高 3.3～4.0cm である。口縁部～体部は直線的に開き、口縁部がわずかに内彎するもの（31・32）、口縁部が直線的に開くもの（33）がある。また、32 は体部下半～底部が内彎している。皿（34）は口径 7.3cm、器高 1.3cm で、直線的に開いている（34）。S X 23～25 の土師質土器坏・皿は細かな部分では違いを指摘できるものの、体部が直線的に開く形態で、法量もほぼ共通している。



第3図 道照遺跡（広島県調査地区）出土の土師質土器坏・皿類と共伴遺物
 (1~8 SB 10, 9~14. SB 18, 15~21. SX 23, 22~30. SX 24, 31~34. SX 25, 35~39. SE 4, 40~43. SE 35)

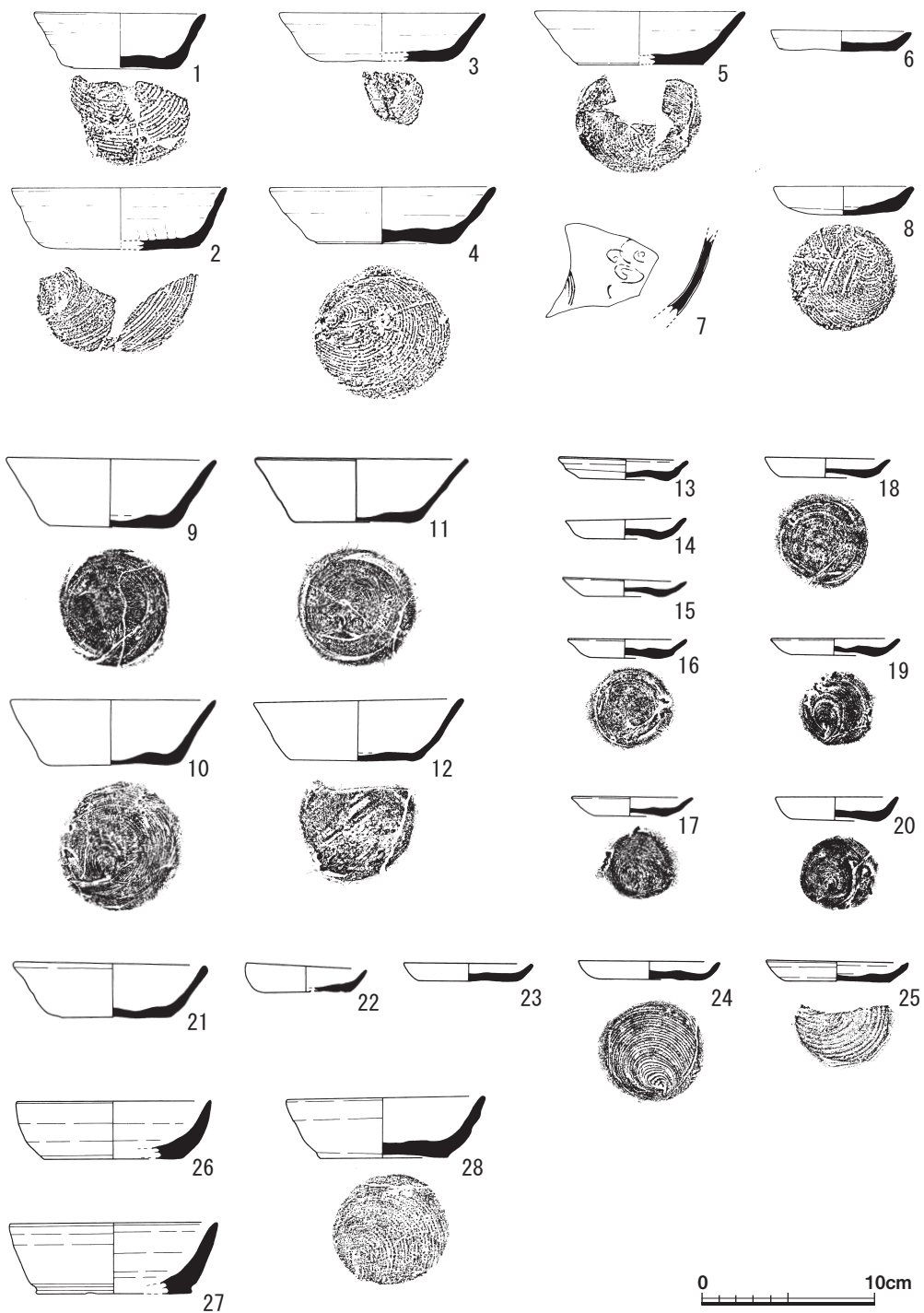
この他に、井戸の S E 04・35 で土師質土器とともに瓦器埴、中国産磁器などが出土している（第 3 図 35～43）が、S E 04 では古代の須恵器坏身、S E 35 では弥生土器が出土している。いずれも出土状況の記載がなく、一括性を検討できないが、土師質土器の年代を考える上で参考となるものであることから、概要を紹介する。S E 04 では土師質土器とともに瓦器埴（38・39）が出土している。土師質土器は坏、皿が確認できる。坏（35～37）はやや厚手で、口径 14.0cm 前後、器高 3.0cm 程度である。口縁部・体部ともに内彎するもの（32）、口縁部が立ち上がり、体部との境で屈曲するもの（31）、底部がやや内彎し、口縁部が直線的なもの（30）がある。S E 35 では土師質土器とともに京都系土師器へそ皿（42）、中国産青磁（41）が出土した。土師質土器は坏、皿を確認することができる。坏（40）は口縁部～底部が直線的に開き、口縁部は先細りの形態である。口径 12.9cm である。皿（41）も直線的に開く形態である。

③浄福寺 3 号遺跡（東広島市高屋町高屋堀）

1989 年に道路改良工事に伴って発掘調査が行われ、古墳時代住居跡、中世の掘立柱建物跡や柱穴群などが検出された（青山編 1990）。遺構に伴う土師質土器の出土例は S B 3 および S B 6 出土資料がある。S B 3 では土師質土器とともに青磁碗が出土した（第 4 図 1～7）。土師質土器は、坏、皿、鍋を確認することができ、坏・皿はいずれも底部回転糸切りである。坏（1～5）は体部～口縁部に向かって直線的に開く形態のものである。直立気味のもの（1・2）と開き気味のもの（3～5）がある。前者は法量的に口径 10.0cm 程度の小型（1）と口径 12.0cm 程度のやや大型（2）の 2 者が認められる。いずれも器高は 3.0cm 前後で、口径の小さいものは深い印象を与えている。皿（6）は直線的に開く形態である。共伴の陶磁器は青磁が碗（7）である。S B 6 では土師質土器皿と東播系須恵器捏鉢、白磁壺が出土した。土師質土器は形態が明らかなのは皿 1 点（第 4 図 8）のみである。内彎する形態であり、S B 3 の皿とは異なっている。

④溝口 4 号遺跡（東広島市高屋町溝口）

東広島県道路インターチェンジ建設に伴って 2007・08 年に発掘調査された（吉野編 2010）。鎌倉～室町時代の遺跡であり、前半期（13 世紀後半～14 世紀前半）と後半期（14 世紀後半～15 世紀半ば）の大きく 2 時期の遺構群が検出された。前半期の遺構群は調査区中央部～南半を中心营まれている。No. 1001 溝状遺構（堀）によって囲まれた区画内に、南北に貫く道路跡を中心として、掘立柱建物跡、屋敷地区画溝、



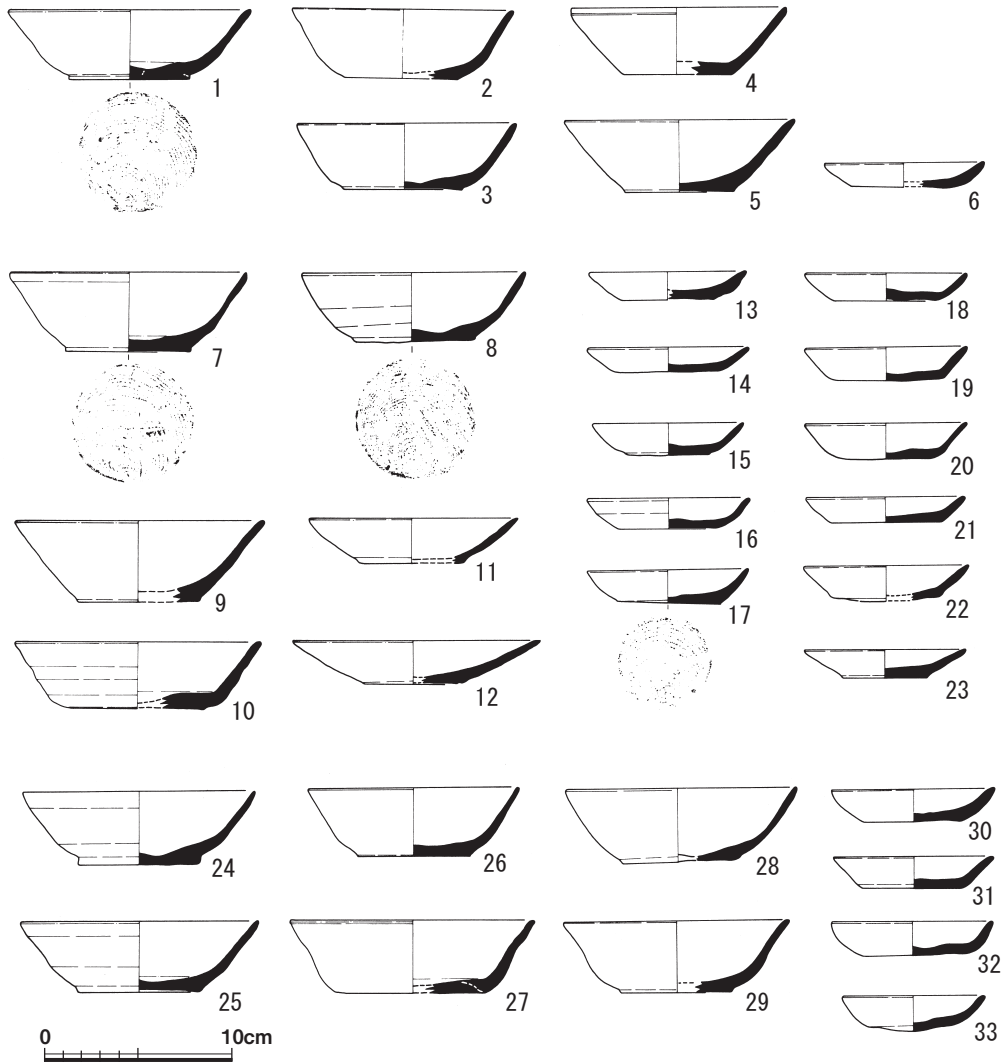
第4図 浄福寺3号遺跡、溝口4号遺跡出土の土師質土器杯・皿類と共伴遺物
 (1～8.浄福寺3号遺跡、9～28.溝口4号遺跡)

水路などが整然と配置されて検出された。No. 1001 溝状遺構は幅7～10 m、深さ2～3 mの規模で、遺跡全体を方形に囲む堀と想定されている。No. 1001 溝状遺構が土石流で埋没した後、調査区北部の低地部を中心に後半期の集落が形成されており、屋敷跡、庭園と思われる池跡などが検出されている。

土師質土器に関連して一括資料が検出されているのはNo. 1127 土坑、No. 1024 古墓である。No. 1127 土坑は後半期の遺構が集中する調査区北部に位置し、長径46cm、深さ約10cmの小土坑である。土師質土器坏5、皿20、鍋1が一括廃棄された状態で検出された(第4図9～20)。坏・皿はいずれも底部回転糸切りである。坏は口径12.0cm前後、器高3.7cm前後で、ほぼ同じ法量である。器形も共通しており、底部～口縁部に向かって直線的に開く形態である。12は器高が少し低く、底部付近がやや内彎し、底面に板目が施されている。皿(13～20)は口径7.0cm前後、器高1.1cm前後で、法量的によく揃っている。内彎する形態を主体とし、多くの個体は底面が窪んで上げ底気味である。また、20は器形は器高1.4cmとやや深く、他の個体と異なり器壁が直立気味である。No. 1024 古墓はNo. 1001 溝状遺構で囲まれた区画の北部で検出された。上部を大きく削平されており、墓壇底面近くから副葬された土師質土器、鉄刀子が出土した。土師質土器は、坏1、皿4であり(第4図21～25)、いずれも底部回転糸切りである。坏(21)は底部付近が丸みを帯びるが、体部～口縁部は直線的に開く形態である。やや厚手で、口縁端部は丸みを帯びている。皿(22～25)はわずかに内彎するものである。器高がやや高く器壁が直立気味のもの(20)、口径がやや広く回転ナデ調整がやや顕著なもの(13)など個体差が大きい。

No. 1001 溝状遺構、No. 1047 池跡でも多くの土師質土器坏・皿が出土している。No. 1001 溝状遺構では弥生土器を含む複数時期の遺物が混在している。中世の遺物では、瓦器、東播系須恵器鉢、亀山焼甕、備前焼大甕、中国産青磁などが出土しており、13～14世紀を中心に15世紀代まで一部機能していたものと考えられる。土師質土器坏・皿が多数出土しているが、多様な形態を認めることができ、複数時期の資料が混在しているものと想定される。No. 1047 池跡でも多くの遺物が出土したが、大半は小破片であったとされている。年代を推定できる資料は出土していないが、「魚溜まり」と推定されている土坑周辺から出土した土師質土器坏(第4図26～28)は口径11.5cm前後、器高3.5cm前後の法量で、共通した形態を有している。底部は丸みを持つが、体部～口縁部は直立気味で、厚手の底部と先細りの口縁部である。

⑤狐が城跡(東広島市西条中央)



第5図 狐が城跡出土の土師質土器坏・皿類

(1～6. 狐が城跡S K 12、7～23. 狐が城跡第1郭2の段、24～33. 狐が城跡第2郭)

西条第一土地区画事業に伴って1981・82年に広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センターによって調査された(植田1983)。中世山城跡で、郭5、堀切2などが検出されている。一括遺物は第1郭S K 12のみであるが、第1郭2の段、第2郭出土の土師質土器はそれぞれ類似する形態が多く、底部切り離しは回転糸切りである。S K 12は第1郭2の段北部に位置する土坑であり、土師質土器坏・皿(第5図1～6)が出土した。坏は口径12.0cm程度、器高3.6cm前後を主体とするが、口径11.4cmのやや小型(4)、口径12.9cmのやや大型(1)がある。底部～体部下半が

内彎し、体部～口縁部が直線的に開くもの（1～3）と底部～口縁部が直線的に開くもの（4・5）がある。前者は体部が少しくぼみ、口縁部にかけてわずかに外彎気味である。皿（6）は口径 8.5cm でやや大型である。第 1 郭 2 の段では土師質土器坏・皿（第 5 図 7～23）がまとまった点数出土している。坏（7～10）は S K 12 と基本的に同じ組み合わせであるが、器高がやや低くて底径が大きく、器壁の傾斜が急な形態（10）が認められる。また、器高が低く、底径の小さい皿形の形態（11・12）がある。皿（13～23）はわずかに内彎する形態が多いが、内面の底部と体部の境が不明瞭なもの（13～17）と境が明瞭なもの（17～23）に大きく分けられる。後者は直線的に開く器形が多い。また、底部から体部がわずかに外彎しながら開く器形（23）が少量みられる。第 2 郭の土師質土器坏・皿（第 5 図 24～33）は S K 12 の坏の組成、第 1 郭 2 の段の組成（外反する器形を除く）と基本的に共通しているが、坏（24～29）では口縁部が外彎する形態（29）、皿（30～33）では底面が丸味を持つもの（33）が認められる。

第 1 郭 S K 12、第 1 郭 2 の段、第 2 郭出土の土師質土器坏・皿は形態および胎土などから大きく 2 種類に分けることができる。坏の第 1 形態は口径 12.0cm 前後、器高は 3.5～4.0cm 程度で、体部～口縁部が比較的急傾斜で開くもので、底部は内彎する形態が多い（1～3・7～9 ほか）。また、板状の粘土の上に体部を成形しているものが多くみられ、底部がくの字状に屈曲している。遺構群の主体を占める形態である。坏の第 2 形態は器高が低く、体部～口縁部が直線的に開くもので、薄手である（11）。両者は胎土も異なっている。皿の第 1 形態はわずかに内彎するか直線的に開く器形で（13～22 など）、器高をもとにいくつかに分けられるが、大きくは同じ製作技術である。皿の第 2 形態は外彎する器形で（23）、やはり薄手である。坏・皿とも第 1 形態が主体であるが、第 2 形態は第 1 郭 3 の段、第 5 郭などでも出土しており、量的には少ないが、城跡全体に分布するようである。両者は基本的に別時期の所産と想定される。本遺跡では、中国産青磁・白磁、常滑焼甕が第 1 郭（2 の段ほか）で出土している。青磁は碗口縁部の小破片で横田・森田分類（横田・森田 1978）I 類、白磁は森田分類（森田 1982）E 群皿である。常滑焼甕は口縁部の破片で、口縁端部を欠いているが、中野編年（中野 1995）6b 型式～7 式と思われる。陶磁器からすると、14 世紀前半と 16 世紀代の 2 時期の土師質土器が存在する可能性が指摘でき、坏・皿第 1 形態は前者、坏・皿第 2 形態は後者の時期に位置づけておきたい。

⑥時宗遺跡（東広島市志和町志和東）

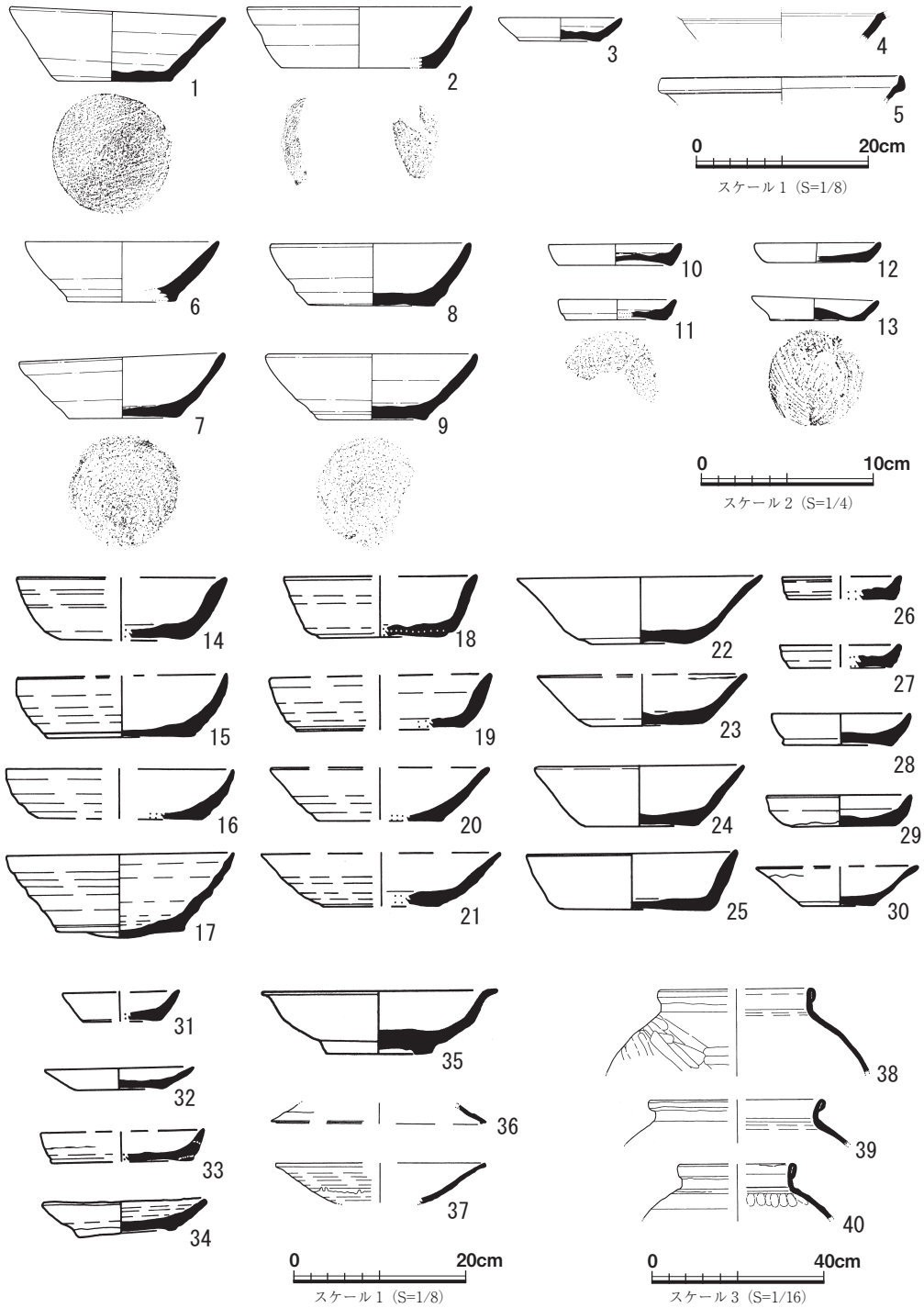
東広島市道建設に伴い 2002 年に発掘調査された（石井編著 2003）。弥生～近世の

遺構が検出された。中世では掘立柱建物 2、土坑などがあり、掘立柱建物 S B 3、土坑 P 19 で一括資料が得られている。S B 3 では P 24 ～ 26 から土師質土器坏・皿・鍋、古瀬戸折縁深皿が出土した（第 6 図 1 ～ 4）。土師質土器坏・皿はいずれも底部回転糸切りである。坏は口径 12.5cm 前後、器高 3.5 ～ 4.0cm で、底部はわずかに内彎し、体部～口縁部に向かって直線的に開く器形である。やや大きく開くもの（1）と直立気味のもの（2）が認められる。皿（3）は直線的に開く形態である。掘立柱建物 S B 2 は S B 3 の西に隣接して構築されている。規模・構造は S B 2 と全く同じであること、建物は平行して配置され、柱穴の位置も完全に対応していること、S B 2・3 の北側に両建物の規模に合わせて溝が掘られていることなどから、S B 2 と S B 3 は同時存在の建物と判断される。S B 2 では東播系須恵器捏鉢（第 6 図 5）が出土しており、瀬戸折縁皿と近接した時期と考えられる。P 19 では一括廃棄された状態で土師質土器坏・皿が出土した（第 6 図 6 ～ 13）。坏はおおむね口径 11.5cm 前後、器高 3.5cm 前後の法量であるが、口径 10.8cm の小型品（6）がある。体部～口縁部がわずかに内彎する器形を基本とし、口径に対して底径が約 1/2 と小さいものが主体であるが、底径がやや広く器壁が直立気味に開くもの（8）が認められる。S B 3 出土資料と比較すると一回り小ぶりである。皿は口径 7.0cm 前後である。直立気味のもの（10・11）、内彎するもの（12）、緩やかな S 字状を呈するもの（13）が認められる。坏・皿とも底部回転糸切りである。

⑦上条遺跡（東広島市高屋町小谷）

1985 年に団地造成に伴って東広島市教育委員会によって発掘調査された（石井編 1987）。居館遺跡で、第 1 ～ 5 郭の郭が検出されている。一括資料は検出されていないが、第 1 郭（第 6 図 14 ～ 30・35・36・38）、第 2 郭（第 6 図 31 ～ 34・37・39・40）を中心に土師質土器、古瀬戸、備前焼などが多数出土している。出土土師質土器坏・皿は底部回転糸切りである。第 1 郭・第 2 郭出土の坏は外面の回転ナデ調整が顕著で器面に明瞭な稜線を残すもの（14 ～ 21、以下坏 A 類）と表面が平滑なもの（22 ～ 25、以下坏 B 類）の 2 種類があり、前者はおおむね厚手、後者は薄手のものが多い。形態的にも異なっており、時期的に異なると想定される。皿は厚手のもの（26 ～ 29・31・33・34）と薄手のもの（30・32）があり、後者は体部が大きく開いている。前者は坏 A 類に、後者は坏 B 類に対応するものと想定される。

以下、第 1 郭を中心に坏・皿の形態をまとめてみる。坏は坏 A 類が主体を占める。法量は口径 11.0 ～ 12.0cm、器高 3.0 ～ 3.5cm が主体で、おおむね口縁部は先細りの



第6図 時宗遺跡、上条遺跡出土の土師質土器坏・皿類と共伴遺物

(1～13.時宗遺跡、14～40.上条遺跡)

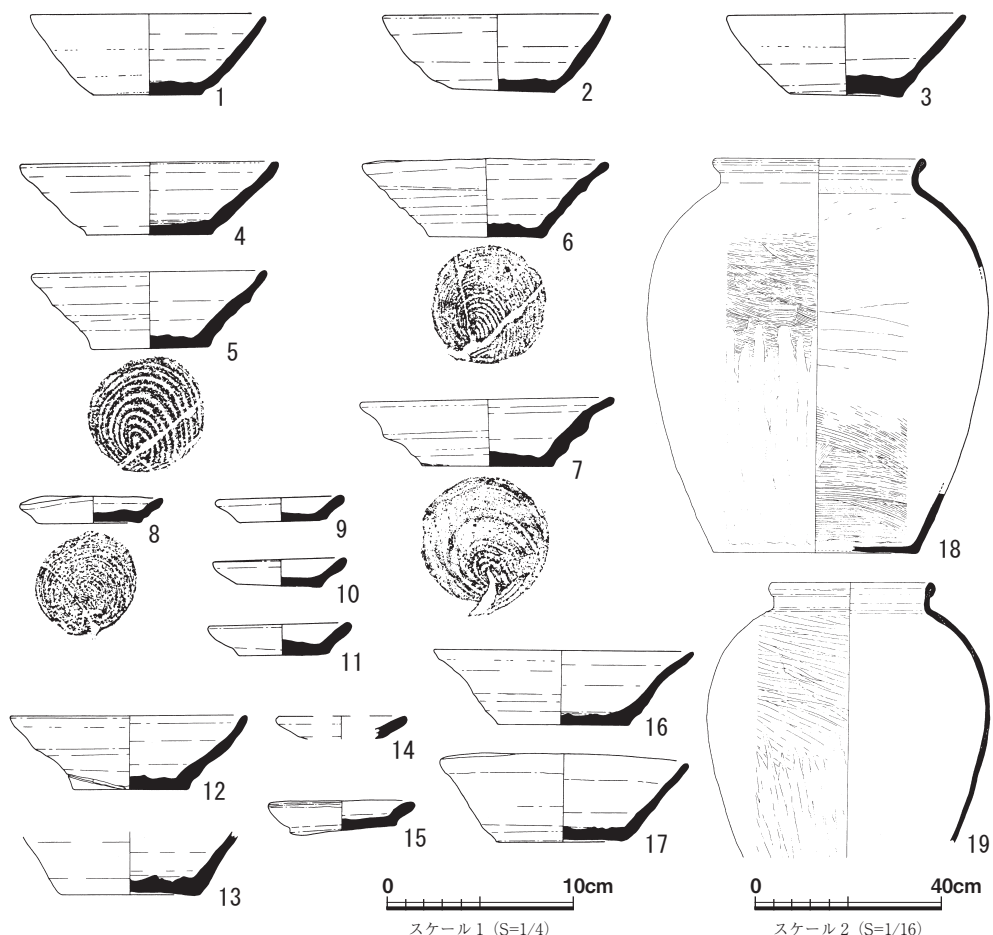
※縮尺は、4・5・36・37はスケール1、38～40はスケール3、その他はスケール2が対応する。

形態である。形態や法量などがよく類似しており、一定期間の中におさまる資料が主体となって出土しているものと思われる。詳細にみると、底部～口縁部が内彎するもの(14～16)と体部～口縁部が直線的に開くもの(18～21)に分けられる。前者は体部が直立気味の形態で、器高が高いもの(14・15)とやや低いもの(16)がある。いずれも顕著な回転ナデを施すものである。後者は体部が直立気味のもの(18・19)と開き気味のもの(20・21)がある。後者には少数ながら器高が約5.0cmの深い形態(17)が認められる。口縁部はわずかに内彎し、内外ともに強い回転ナデ調整により凹凸が顕著である。体部が直立気味のものは厚手で口縁部は先細りが顕著であり、開き気味のものは薄手である。坏B類は底部～口縁部が大きく開くもの(22～24)と体部が直立気味のもの(25)がある。前者が主体で、口径14.2cmのやや大型品(22)があり、体部～口縁部は外彎する形態がわずかに認められる。皿は厚手のものが多く、体部がほぼ直立あるいは直立気味のもの(26～29)を主体に直線的に開くもの(31)がわずかにある。薄手のものは体部が大きく開き、深いものと浅いものがある。第2郭の坏・皿は、細部で相違はあるものの、基本的には第1郭の組成と同じ様相である。

土師質土器以外では、第1郭で古瀬戸蓋(36)、備前焼大甕(38)、第2郭で白磁皿(35)、古瀬戸皿(37)、備前焼大甕(39・40)が出土している。

⑧中屋遺跡(東広島市豊栄町大字安宿)

基盤整備事業に伴って、1993～1996年に(財)広島県埋蔵文化財調査センターによって調査された(三枝編1998、三枝編著1999)。中世の遺構は、掘立柱建物1、溝1、埋甕2、土坑などが検出されている。埋甕はいずれも備前焼大甕を利用するもので、副葬品として土師質土器坏・皿の一括資料が得られている(第14図)。S K 31埋甕(18)では、別個体の備前焼大甕(19)とともに土師質土器坏・皿(4～11)がまとまって出土した。坏(4～7)は口径13.0cm前後、器高4.0cm前後の法量である。口径に比べて底径が小さく、体部～口縁部が大きく開く形態で、強い回転ナデ調整により外面は顕著な凹凸を示す。口縁部がわずかに内彎するもの(4・5)と外彎するもの(6・7)が認められる。口縁端部を丸くおさめるものが多い。皿(8～11)は口径7.0cm前後のものとは8.0cm前後のものがあるが、形態はほぼ同じで、体部がわずかに外彎し、口縁部がわずかに内彎している。S K 32埋甕でも土師質土器坏・皿の一括資料が得られている(12～15)が、出土点数は多くない。基本的にS K 31と同様の様相であるが、外面の回転ナデ調整は比較的平滑である。S K 4土坑では土師質土器坏の一括資料が出土した(1～3)。S K 31・32の坏に比べると口径に対する底径の比率がやや



第7図 中屋遺跡B地点出土の土師質土器坏・皿類と共伴遺物

(1～3. SK 4、4～11・18・19. SK 31、12～15. SK 32、16・17. SX 2)

※縮尺は1～17はスケール1 (S=1/4)、18・19はスケール2 (S=1/16) に対応する。

大きく、口径 12.5cm 程度を主体とし、やや小型である。底部～口縁部が緩やかに内彎するもの (1・2) と直線的に開くもの (3) がある。外面は回転ナデ調整が顕著だが、比較的平滑である。SX 2 は段状遺構で、P 1 は直径 1 m の大型柱穴である。土師質土器坏・皿が出土した。坏 (16・17) は体部～口縁部が外彎する形態であるが、大きく外彎するもの (16) と直線的なもの (17) がある。SK 4・31・32 出土の土師質土器はいずれも底部回転糸切りである。

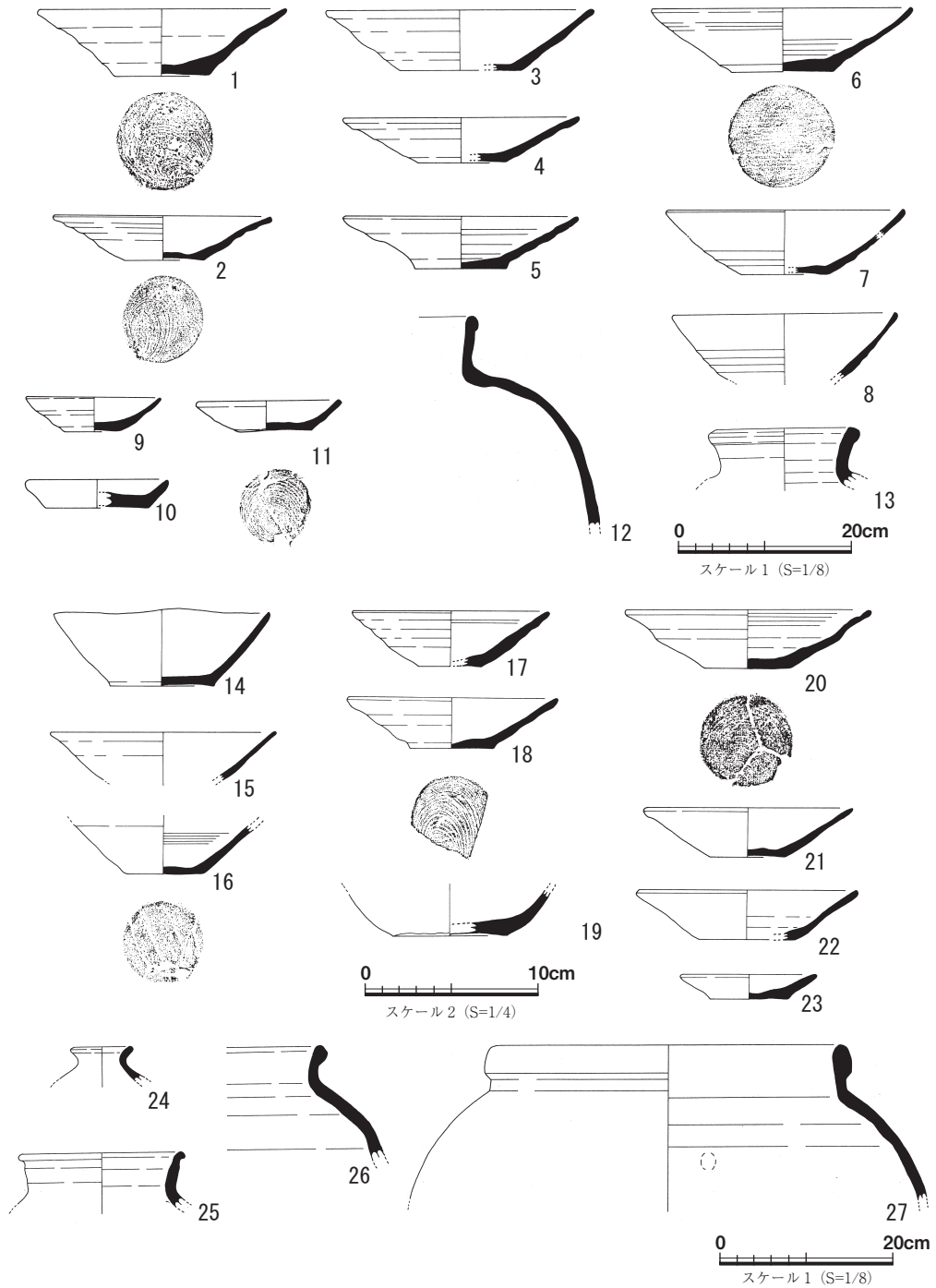
⑨城仏土居屋敷遺跡 (東広島市八本松飯田)

道路改修工事に伴って 2003・04 年に (財) 東広島市文化振興事業団文化財センターによって調査された (恵谷編 2005)。本遺跡は約 100 × 100 m の居館跡と推定されて

おり、調査は居館跡南端部を中心に実施されている。2枚の遺構面が確認され、下部遺構（Ⅰ期）として、掘立柱建物8、土坑1、溝5、堀など、上部遺構（Ⅱ期）として、掘立柱建物3、溝3、段状遺構2、土塁、堀などが検出された。

Ⅰ期の出土遺物の多くは遺構面上あるいは遺構面を覆う堆積層（埋土）から出土しており、土師質土器、備前焼、中国産青磁、中国産白磁などがある（第8図1～13）。特定の遺構に伴うものは少ないが、調査区西部（屋敷南西部）の焼土集中部からの出土遺物は一括性が高いものと思われる。出土遺物は、土師質土器（1・2・5・6・9）のほか、備前焼（12）などである。土師質土器は坏・皿のほかにも鍋、播鉢などが出土している。坏（1～7）は口径14.5cm前後、器高3.6cm前後のもの（1・6）と口径13.0cm前後、器高2.8cm前後のもの（2・5）の大きく2種類があり、焼土集中部以外の出土遺物（3・4・8）でも上述の2種類を認めることができる。Ⅰ期の坏は法量の違いに関係なく、口径に対する底径の比率が小さく、体部が大きく開く形態が主体であり、外面に回転ナデ調整による顕著な稜線が残されることが特徴である。底面端部は明瞭な稜線をなすものが多い。器壁が薄いものが主体であるが、やや厚手のもの（1）もある。底部回転糸切りを基本とするが、板目を施すもの（6）が認められる。詳細にみると、底部～口縁部が外反するもの（1・2・5）、直線的に開くもの（3・4）、口縁部がわずかに内彎するもの（6）が認められる。この他に、器高が高いものの中に底部～口縁部が内彎する形態（7・8）が少数認められる。Ⅰ期の皿（9～11）は出土量が少なく、体部がわずかに内彎するもの（9・10）、わずかに外彎するもの（11）がある。いずれもやや深めの皿である。

Ⅱ期の出土遺物も大半は遺構上面および遺構面を覆う堆積層（埋土）からの出土であり、土師質土器のほか、備前焼、中国産青磁などが出土している（第8図14～27）。土師質土器は、坏、皿のほかにも播鉢、鍋、火鉢などがあり、内耳鍋が認められる。坏（14～22）は、Ⅰ期同様、器高の高いもの（14～16・19）と低いもの（18・20～22）が認められるが、後者の割合が高く、中間的なもの（17）もある。口径に対して底径の比率が小さく、体部が大きく開く形態が主体であるが、器高が高いものには体部の開きがやや急なもの（14・19）もある。外面は顕著な回転ナデ調整が認められるものとともに平滑に仕上げるもの（14・21・22）も多い。器高が高いものは、底部～体部が内彎するもの（14・15・19）と直線的なもの（16）があり、口縁部は直線的に開くもの（14）とわずかに外彎するもの（15）が認められる。器高の低いものは個体ごとで体部や口縁部の細部がやや異なるものの、底部～口縁部はやや外彎気味



第8図 城仏土居屋敷遺跡出土の土師質土器坏・皿類と共伴遺物

(1～13. I期、14～27. II期)

※縮尺は1～11、14～23はスケール2 (S=1/4)、12・13、24～27はスケール1 (S=1/8) が対応する。

の形態を主体とする。また、体部と口縁部の境界で屈曲するもの(20)が見られるが、大きくは外彎する形態に含めることができる。皿(23)は1点のみである。

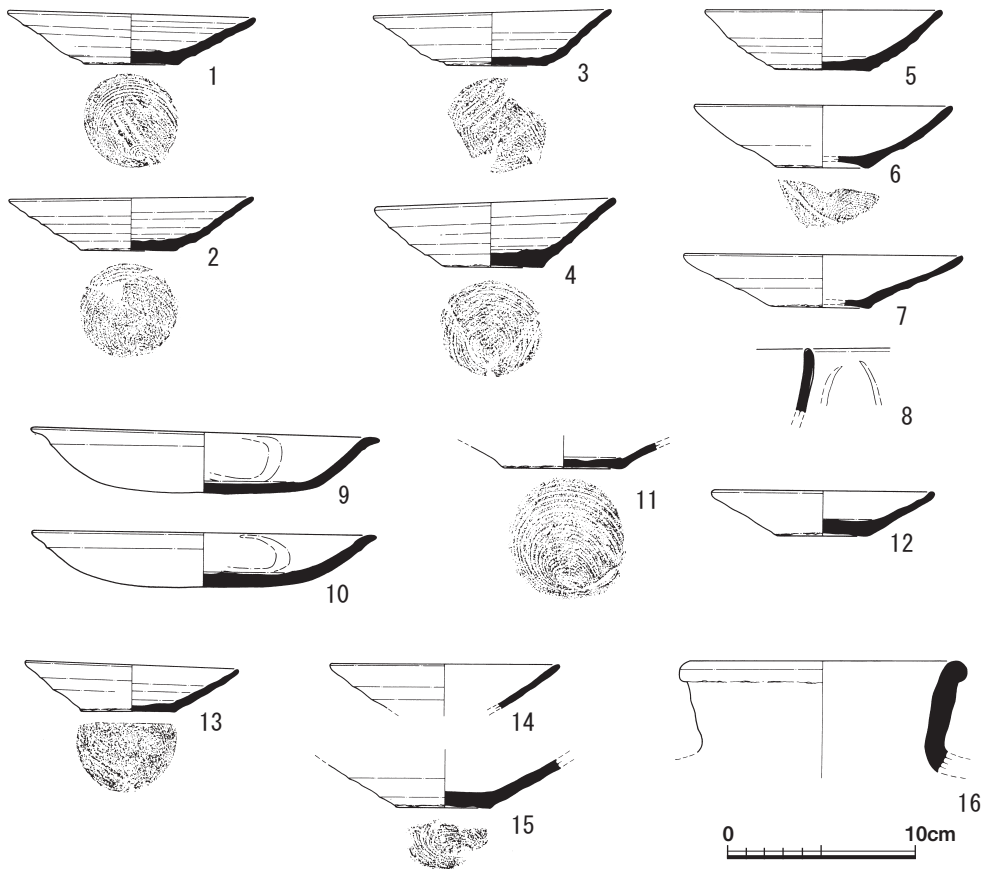
出土の陶磁器類は、I期では焼土集中部で備前焼壺(12)が出土したほか、備前焼壺(13)、中国産白磁・青磁が、II期では備前焼壺(24～26)・甕(27)、中国産青磁・白磁、青花などが出土した。中国産白磁、青磁はI・II期で顕著な時期差を認めることはできない。

⑩山崎1号遺跡(東広島市西条西本町)

道路改良工事に伴って、1994年に(財)東広島市教育文化振興事業団文化財センターによって調査され(妹尾編著1995)、平安時代の掘立柱建物2および中世の土坑3、溝・溝状遺構6などが検出された。

SK2土坑およびSK1土坑で土師質土器の一括資料が得られている。SK2はSD5溝に通じるトンネル状の遺構で、土師質土器のほか、瓦質土器、青磁碗が出土した(第9図1～8)。土師質土器はいずれも坏(1～7)で、口径13.0cm前後で、器高は全般的に浅いが、器高3.3cm前後のやや深いもの(4～6)と器高2.8cm前後の浅いもの(1・2・7)に分けられる。いずれも口径に対する底径の比率が半分以下で、大きく体部が開く形態である。内外ともに顕著な回転ナデ調整により稜線を残すものが多いが、平滑に仕上がっているもの(6)も認められる。口縁部は直線的に開く形態が基本であるが、わずかに内彎するもの(5・6)がある。底部～体部がわずかに内彎するもの(1～3・5)、直線的なもの(4)、わずかに外彎するもの(6・7)が認められる。底部回転糸切りであり、板目を施すもの(1・4)がある。青磁碗(8)が共伴した。SK1では土師質土器皿が出土した(第9図9～12)。出土点数は多くはないが、口径18.0cm程度の大型品(9・10)と口径12.0cm程度の小型品(12)が認められる。大型品は底面～底部が丸みをもち体部は直線的に大きく開いている。底部～体部は指頭ナデ調整であるが、口縁部は回転ナデ調整で、口縁端部を水平に引き伸ばしている。胎土は灰白色を呈し、いわゆる京都系土師器であるが、大内館で出土する京都系土師器とも調整法などが異なり、産地は不明である。小型品は底部がわずかに外彎し、口縁端部はわずかに内彎する。口縁部を欠くもの(11)もほぼ同形態と思われる。いずれも底部回転糸切りである。

このほか、SD3では土師質土器、備前焼壺が出土した(第9図13～16)。土師質土器は坏(13～15)で、量的にはわずかであるが、SK2出土資料と基本的には同じ形態で、いずれも底部～口縁部は直線的に開く形態である。



第9図 山崎1号遺跡出土の土師質土器杯・皿類と共伴遺物
(1～8. SK 2、9～12. SK 1、13～16. SD 3)

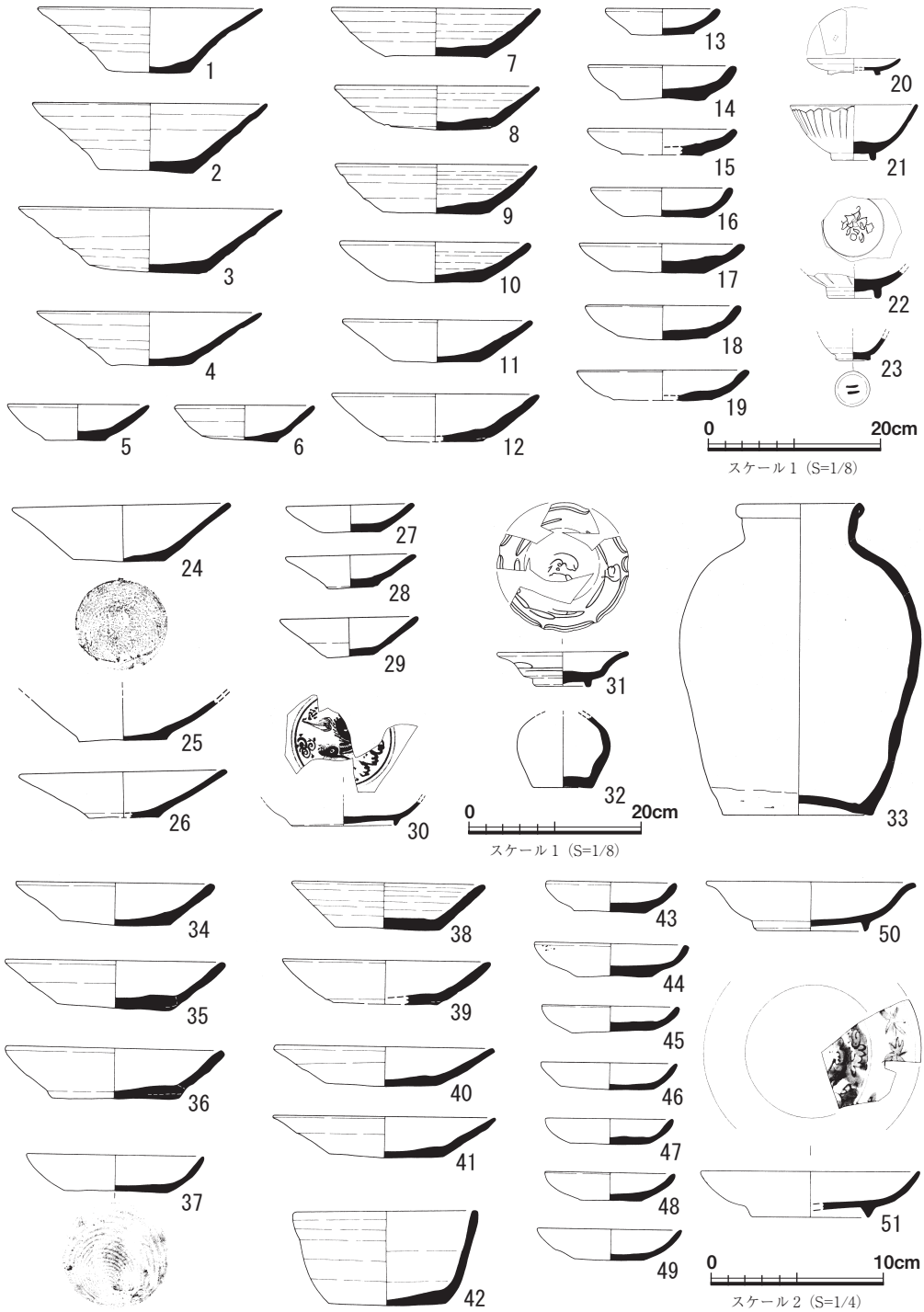
⑪薬師城跡（東広島市河内町入野）

圃場整備事業に伴い、1994年に（財）広島県埋蔵文化財調査センターによって調査され（渡邊編 1996）、礎石建物3、掘立柱建物9、土塁2など、中世後期の遺構が多数検出された。大規模な火災が確認され、火災直後を含む火災以前（Ⅰ期）と火災以後（Ⅱ期）の大きく2時期の遺構面が検出されている。

Ⅰ期は火災以前、火災時、火災直後の3小期の遺構が確認され、火災以前のSD 1溝、SX 3性格不明遺構、火災直後のSE 2井戸から良好な一括資料が得られている。SD 1溝では土師質土器が下層と上層でそれぞれまとまって出土した（第10図1～19）。下層は杯（1～4）を主体に皿（5・6）が出土した。杯は口径に対する底径が半分以下で、体部が直線的に大きく開く形態である。外面は強い回転ナデ調整によって稜線の顕著なものが基本で、底部回転糸切りである。口径13.0cm程度のもので多い

が、口径 14.0cm 前後および 15.0cm 前後のやや大型 (3) がある。底部～口縁部は直線的に開くものが多いが、外彎するもの (1) がある。皿 (5・6) はやや深めである。底部～体部はわずかに内彎する。上層は坏 (7～12)・皿 (13～19) とともに多数出土している。坏は底部～口縁部がわずかに内彎する形態を基本とするが、直線的に開くもの (11) も認められる。いずれも口径 11.8cm、器高 2.8cm 程度である。下層の坏に比べると厚手である。内外とも回転ナデ調整による稜線が顕著なもの (7～10) と平滑に仕上げるもの (11・12) がある。前者は内面の底面と体部の境界が明瞭なもの (7・8) と体部から底面に緩やかに変化するもの (9・10) があり、後者も同様である。皿 (13～19) は底部が外彎し、口縁部が内彎するもの (13～15)、底部～口縁部が緩やかに内彎するもの (16・17)、明瞭に内彎するもの (18・19) が認められる。口径は 8.0cm 以下、8.6～9.0cm、10.0cm の 3 種類の法量が認められるが、口径 8.6～9.0cm がもっとも多い。土師質土器はいずれも底部回転糸切りであるが、ナデ消す例 (17) がわずかに認められる。S D 1 からは陶磁器 (20～23) が出土しており、中国産白磁皿 (20)、青磁碗 (21・22)、天目茶碗 (23) および粉青沙器徳利がある。上下いずれの層から出土したのか記載がない。S D 1 と同時期の S X 3 からも多量の土師質土器坏・皿が出土しているが、S D 1 上層と基本的に同じ様相である。S E 2 井戸出土土器は火災直後に一括して廃棄されたものと考えられ、土師質土器坏・皿のほかに、中国産青磁、備前焼、黒・褐釉四耳壺が出土した (第 10 図 24～33)。青磁は碗・稜花皿 (31)、青花は皿 (30)、備前焼は小壺 (32)・壺 (33)・鉢などである。土師質土器はいずれも底部回転糸切りで、板目を施すもの (26)、ナデ消すもの (25) が認められる。坏は底径が小さく、体部が直線的に大きく開く形態で、内外とも平滑に仕上げられており、薄手である。底部が直線的なもの (24)、わずかに外彎するもの (25・26) がある。皿 (27～29) は浅いもの (27) と深いもの (28・29) があり、後者は坏を小型化した形態である。

Ⅱ期についても前期・中期・後期の 3 小期の遺構が確認されており、後期に属する S B 1 礎石建物で一括資料が得られている。出土遺物は S B 1 北部の強く火を受けた痕跡が認められる付近を中心に出土しており、土師質土器のほかに中国産白磁、青花などが出土した (第 10 図 34～51)。土師質土器は、坏、皿を中心に小鉢が出土している (34～49)。坏 (34～38) はいずれも器高 3.0cm 以下で、Ⅰ期に比較して一段と浅くなっている。回転ナデ調整により内外に顕著な稜線が認められるもの (38) もあるが、全般的に平滑に仕上げる傾向にある。いずれも体部が直線的に大きく開く形



第10図 薬師城跡出土の土師質土器・皿類と共伴遺物

(1～6. SD1下層、7～19. SD1上層、20～23. SD1、24～33. SE2、34～51. SB1)

※縮尺は20～23、30～33はスケール1 (S=1/8)、その他はすべてスケール2 (S=1/4) が対応する

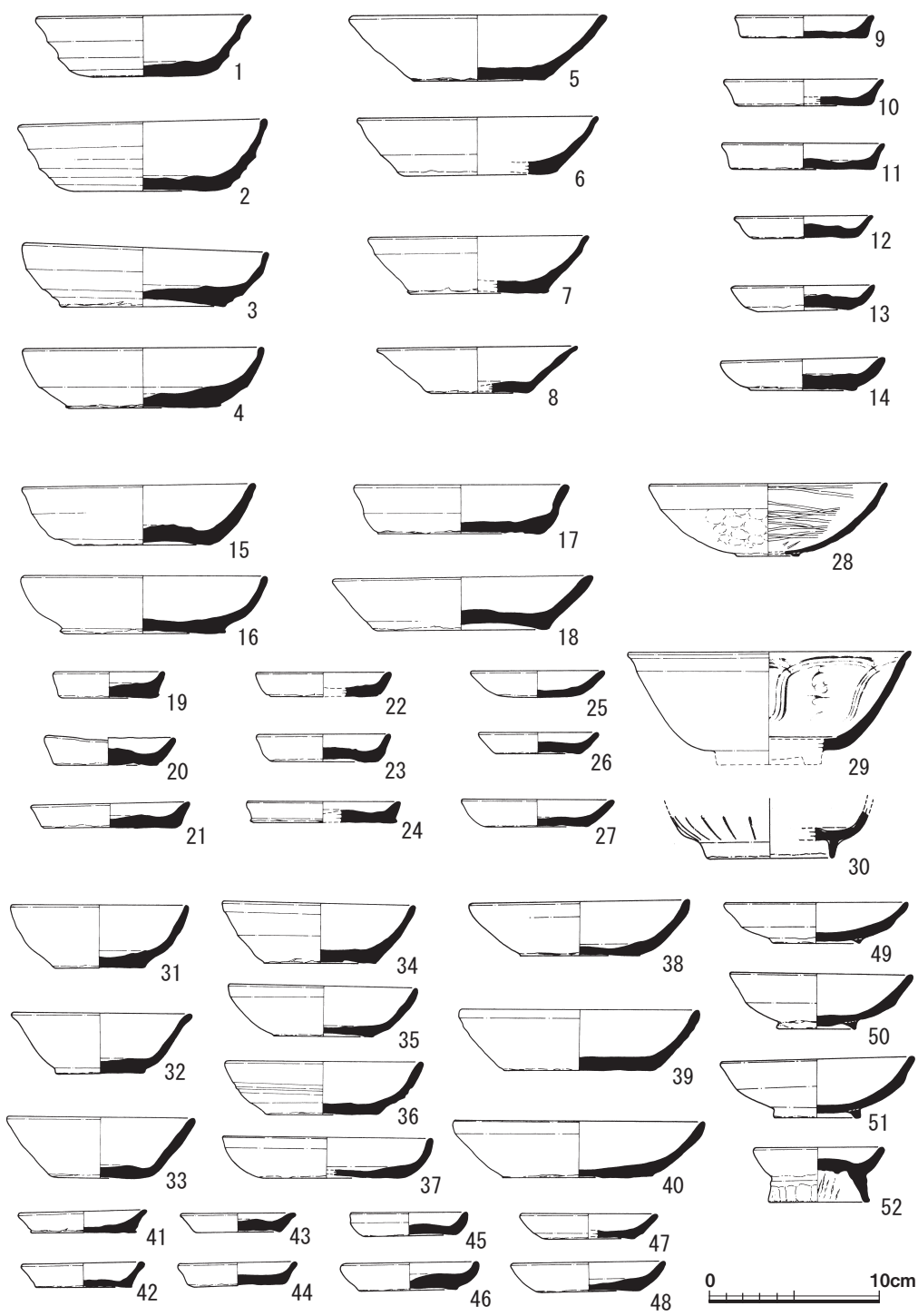
態であるが、I期に比較して、口径に対する底径の比率がやや大きくなり、安定感を増している。底面との境界が明瞭な稜をなして屈曲するものが多い。底部～体部が内彎する形態(37)が認められるが、口径10.1cmで、むしろ皿の範疇で捉えるほうがよいかもしい。皿(40・41・43～49)は口径12.5cm前後の中皿(40・41)と口径8.0cm前後の小皿(43～49)がある。中皿は体部が大きく直線的に開く形態で、小皿はI期の形態分類と基本的に同様であるが、全体的にやや浅い。鉢(42)は口径10.0cm前後の小型品で、体部～口縁部は直立気味である。出土の土師質土器はいずれも回転糸切り未調整である。共伴遺物は白磁皿(50)、青花皿(51)がある。

広島湾岸 瀬戸内に面する広島湾岸に沿った東西に広がる地域で、太田川下流域、八幡川下流域、瀬野川下流域などで調査が進展している。山陽道が東西に貫き、内陸部への結節点であり、重要な物流の集積・中継地であったと考えられる。中世前期においては、現在広島市中心部が広がる三角州は未発達で、広島湾に直接アクセス可能な地勢であった。しかし、太田川放水路遺跡(松崎・潮見1961)の存在や広島城跡の調査で瓦器塚(和泉型Ⅲ期)が出土していることなどから、中世前期には太田川河口部に流通拠点が形成されつつあったと想定される。

①菩提院遺跡(廿日市市宮島町中西町)

建物建設に伴って1991年に宮島町教育委員会によって調査された(是光・妹尾編2005)。中世を中心とする5枚の遺構面が確認され、第V遺構面(最下層)では、4号テラス状遺構(SX4)、第IV遺構面では、3号テラス状遺構(SX3)、土坑3、第Ⅲ遺構面では、2号テラス状遺構(SX2)、礎石建物跡1、土坑1、第Ⅱ遺構面では、1号テラス状遺構(SX1)、礎石建物1が検出された。第V・Ⅳ・Ⅲ遺構面において、土師質土器坏・皿類が良好な形で出土している。

第V遺構面では4号テラス状遺構の上面で土師質土器が出土した(第11図1～14)が、共伴遺物はない。土師質土器は皿・坏を中心に鍋が認められる。坏(1～8)は口径14.0cm前後、器高3.6cm前後のものが主体であるが、口径12.0cm前後のやや小ぶりのもの(1・7・8)がある。底部～口縁部が内彎するものが基本であるが、詳細にみると、底部～体部が内彎し、口縁部は直線的に広がるもの(1)、底部～口縁部が強く内彎するもの(2～4)、底部～口縁部は緩やかに内彎するもの(5・6)、体部は直線的に広がり口縁部がわずかに屈曲して外彎するもの(7)などがある。前二者は外面に回転ナデによる顕著な稜線を残すものが多い。また、8は小型薄手で、底面端が明瞭に屈曲し、底部～口縁部が直線的に開く形態であり、本形態は本例のみであ



第11図 菩提院遺跡出土の土師質土器坏・皿類と共伴遺物
 (1～14. 第V遺構面、15～28. 第IV遺構面、29～52. 第III遺構面)

る。皿（9～14）は、直立気味に外彎し口縁部は先細りとなる形態（9～11）が主体である。そのほかに、先に述べた皿に比べると体部の傾斜がやや緩やかで底部が丸味のあるもの（12）や内彎するもの（13・14）が認められる。第Ⅴ遺構面出土の土師質土器坏・皿は底部回転糸切りとともに回転ヘラ切り（7）が認められる。

第Ⅳ遺構面では、3号テラス状遺構の上面から土師質土器とともに、瓦器壙が多数出土した（第11図15～28）。坏（15～18）は口径の面では第Ⅴ遺構面の坏とほぼ同じ大きさであるが、器高が3.5cm以下で、浅くなっている。底部～口縁部が内彎するもの（15・16）、直立気味にわずかに外彎するもの（17）、直線的に開くもの（18）がある。外面は基本的に平滑に仕上げられている。底部回転糸切り（15）よりも回転ヘラ切り（16～18）が多く、板目調整を施すもの（17）がある。皿（19～27）は第Ⅴ遺構面と基本的には同様の状況であるが、第Ⅴ遺構面で出土している底部が厚く体部が内彎する形態（14）は認められない。共伴の瓦器（28）は和泉型である。

第Ⅲ遺構面では、2号テラス状遺構上の2号礎石建物を中心に広がる焼土層から、土師質土器、中国産青磁・白磁、中国産黄釉盤、褐釉六耳壺、古瀬戸、常滑などが出土した（第11図29～52）。土師質土器は坏、皿、壙、鍋が認められる。坏（31～40）は法量から見ると、大きく3種類に分類できる。第1形態は口径10.5cm前後、器高3.5cm前後の口径が小さく深いもの（31～33）、第2形態は口径11.5cm前後、器高2.8cm前後で、第1形態に比較してやや大型で浅いもの（34～36）、第3形態は口径14.0cm前後、器高3.5cm前後の大型（38～40）である。第1形態は底部～口縁部が明瞭に内彎するものも（31）あるが、わずかに内彎する程度で、体部が直線的に開くものもの（32・33）が多い。詳細に見ると口縁部が外彎するもの（32）と直線的なもの（33）がある。いずれも底部回転糸切りである。第2形態は底部～口縁部が内彎するものであり、底部は回転糸切りとともに回転ヘラ切りが見られる。第1・2形態では底部が強い回転ナデ調整で窪む（外彎する）もの（31・34）がある。第3形態は口径がもっとも大きい、器高は第1形態と大差なく、3形態の中ではもっとも浅い印象を与えている。底部～口縁部はわずかに内彎する。いずれも底部回転ヘラ切りである。皿は小皿（41～48）と大皿（37）がある。大皿の口径は坏の第2形態に属するが、器高が2.5cm以下で、非常に浅いものである。小皿は体部が直立気味のもの（41～46）とやや開くもの（47・48）がある。直立気味のものは外彎するもの（41～44）と内彎するもの（45・46）があり、前者は底部回転ヘラ切り、後者は回転糸切りが多い。体部がやや開くものは他の皿よりやや口径が大きい。底部回転ヘラ切り

を主体とする。全体としてみると、土師質土器坏・皿は底部回転ヘラ切りの割合が高い。土師質土器碗（49～51）は吉備系碗である。共伴土器は、東播系須恵器捏鉢、青磁などがある。

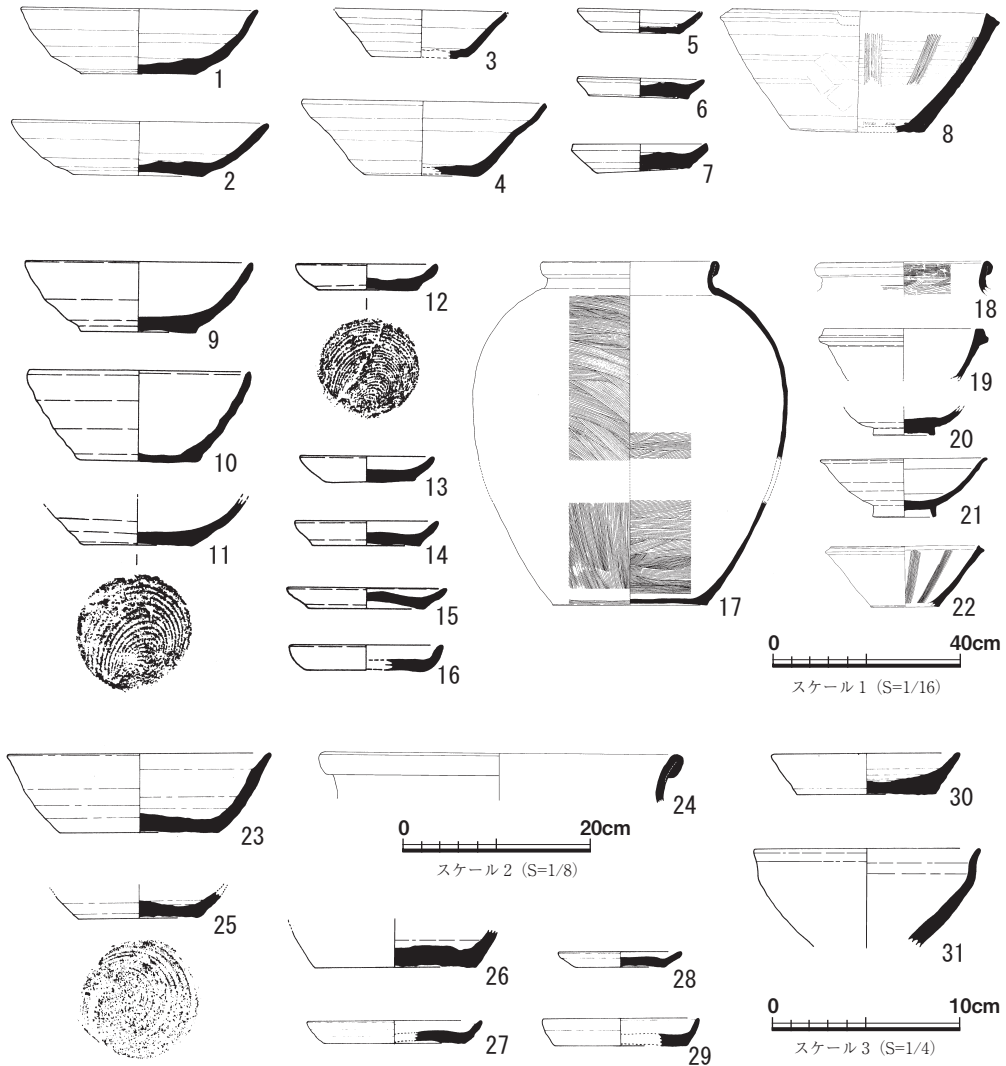
②恵下城跡（広島市安佐北区安佐町）

住宅団地造成に伴い、1977年に広島県教育委員会によって発掘調査された（桧垣編1978）。中世城館遺跡で、郭6、堀切2が検出された。遺物は第1郭を中心に第1、第2堀切などから出土している。一括資料は得られていないが、比較的単純な様相を示している。出土遺物は、土師質土器のほか、備前焼播鉢がある（第12図1～8）。土師質土器は、坏、皿、鍋がある。坏（1～4）は外面は回転ナデ調整が顕著で、底部回転糸切りである。底部～口縁部が内彎するもの（1・2）と直線的に開くもの（3・4）がある。前者は器高3.4cmのやや深いものと器高2.8cmの浅いものがある。後者は体部～口縁部がわずかに外反気味のものが多い。口径から見ると、口径10.0cm程度の小型品と口径14.0cm前後のやや大ぶりのものが認められる。皿（5～7）は直線的に開く形態で、薄手で口縁端部を丸くおさめるもの（5）、底部が厚く、口縁部を先細りに作り出すもの（6）、底部が厚く、口縁端部を面取り風に調整するもの（7）が認められる。

③三ツ城跡（広島市安芸区瀬野町～中野町）

区画整理事業に伴い、1986年に広島市教育委員会によって調査された（奥田・岡野編著1987）。中世山城跡で、郭5、堀切6、竪堀群2、建物跡3、土坑1などが検出された。出土遺物は第1郭を中心に、第2郭などで出土している。第1郭では1号建物跡および第1郭西側斜面を主体としている。後者は第1郭から廃棄されたものと思われる、出土の備前焼からも近接した年代が想定される。

第1郭1号建物および第1郭西側斜面では、土師質土器のほか、備前焼、古瀬戸などが出土した（第12図9～18）。土師質土器は坏、皿のほか、鍋が確認できる。坏（9～11）は口径12.0cm程度で、底部～口縁部が内彎する形態である。確認できるものはいずれも底部回転糸切りである。深さが深いもの（器高4.8cm）とやや浅いもの（器高3.7cm）がある。皿（12～16）は、体部が内彎するもの（12・13）、体部はわずかに外彎し口縁部は内彎するもの（14）、内彎し口縁部は直立気味のもの（16）、直線的に開くもの（15）がある。前二者は底部回転糸切り、後二者は底部回転ヘラ切りである。共伴遺物は備前焼大甕（17・18）、古瀬戸卸皿・底卸目皿などがある。このほかに第1郭、第2郭で、陶磁器類（第12図19～22）が出土しており、備前焼大甕・播鉢（22）、中国産白磁碗（21）、青磁碗（20）、石鍋（19）がある。



第12図 恵下城跡・三ツ城跡・横山城跡出土の土師質土器坏・皿類と共伴遺物
 (1～8. 恵下城跡、9～22. 三ツ城跡、23～31. 横山城跡)

※縮尺は8・19～21・24はスケール2 (S=1/8)、17・18・22はスケール1 (S=1/16)、その他はすべてスケール3 (S=1/4) が対応する。

④横山城跡 (広島市安佐北区高陽町)

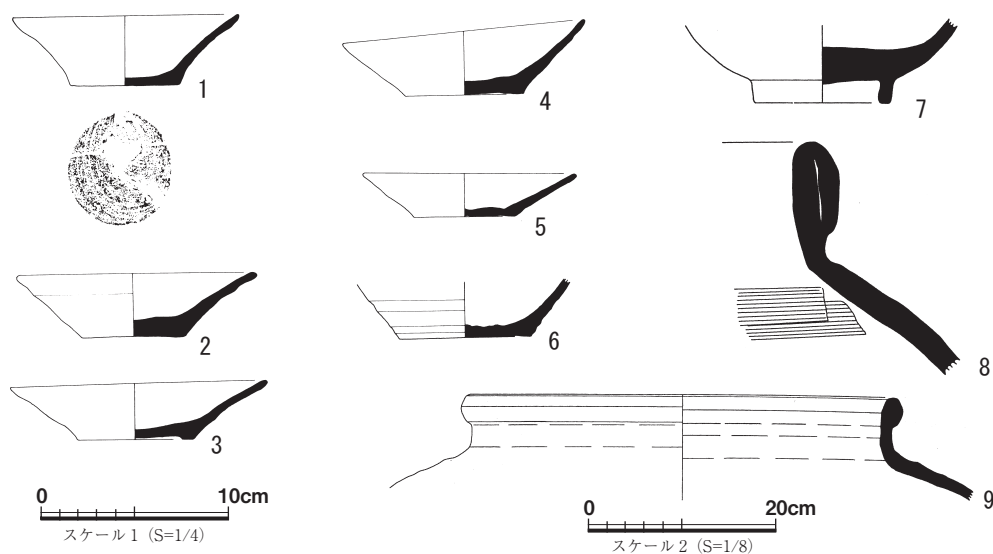
自動車学校造成に伴い、1983年に(財)広島県埋蔵文化財調査センターが発掘調査した(辻編著1984)。中世山城跡で、郭5、竪堀1、建物跡1などが検出された。第1郭では3回の改修が確認され、出土量は少ないが、各時期の遺物が確認されている。

第1期では土師質土器坏・鍋、備前焼が出土した(第12図23・24)。全体の形状が窺える坏(23)は口径13.8cm、器高4.0cmで、底部～体部がわずかに内彎し、口

縁部が直線的に開く形態である。備前焼甕（24）は口縁部のみの破片である。第Ⅱ期では、土師質土器坏・皿・鍋が出土した（第12図25～29）。坏（25・26）は底部のみで、全体の形状は不明であるが、底部の形状からすると急傾斜で直線的に開く形状の可能性がある。皿（27～29）は体部が内彎するもの（27）、直線的に大きく開くもの（28）、わずかに内彎し直立気味に開くもの（29）がある。第Ⅲ期では、土師質土器皿、天目茶碗が出土した（第12図30・31）。皿（30）は口径9.6cm、器高2.1cmで、やや大型で深い形態である。なお、本遺跡出土の坏・皿類はいずれも底部回転糸切りである。

⑤国重城跡（広島市安佐南区沼田町）

宅地造成に伴い、1981年に広島市教育委員会によって発掘調査された（中村・橋本・幸田編著1982）。中世山城跡であり、郭4、堀切1、豎堀3などが検出された。出土遺物は少量で、第1～3郭などで出土している。土師質土器は第1郭北側で坏7点が出土した（第13図1～6）。いずれも底部回転糸切りである。口径に対して底径の比率が小さく、体部から口縁部に向かって外彎するもの（1～3）を主体に、直線的に開くもの（4・5）が認められる。器高3.0cm程度のもの（2・4）と器高2.5cm前後のもの（3・5）があり、外彎する形態では器高3.5cm程度の深いものが認められる。また、底径がやや大きく体部が直線的に開く形態（6）がある。口縁部を欠いているが、



第13図 国重城跡出土の土師質土器坏・皿類とその他の出土遺物

※縮尺は9はスケール2 (S=1/8)、その他はすべてスケール1 (S=1/4) が対応する。

直線的に開く形態と思われ、外面は強い回転ナデ調整により稜線が顕著である。

土師質土器に伴う遺物はないが、第2・3郭で陶磁器(第13図7～9)が出土しており、備前大甕(8・9)、中国産青磁碗(7)である。

⑥有井城跡(広島市佐伯区五日市町)

道路改良工事に伴い、1991・92年に(財)広島市歴史科学教育事業団によって発掘調査された(稲葉編1993)。中世山城跡で、郭5、豎堀群1、堀切状遺構1、通路状遺構3、石垣4、井戸2などが検出された。

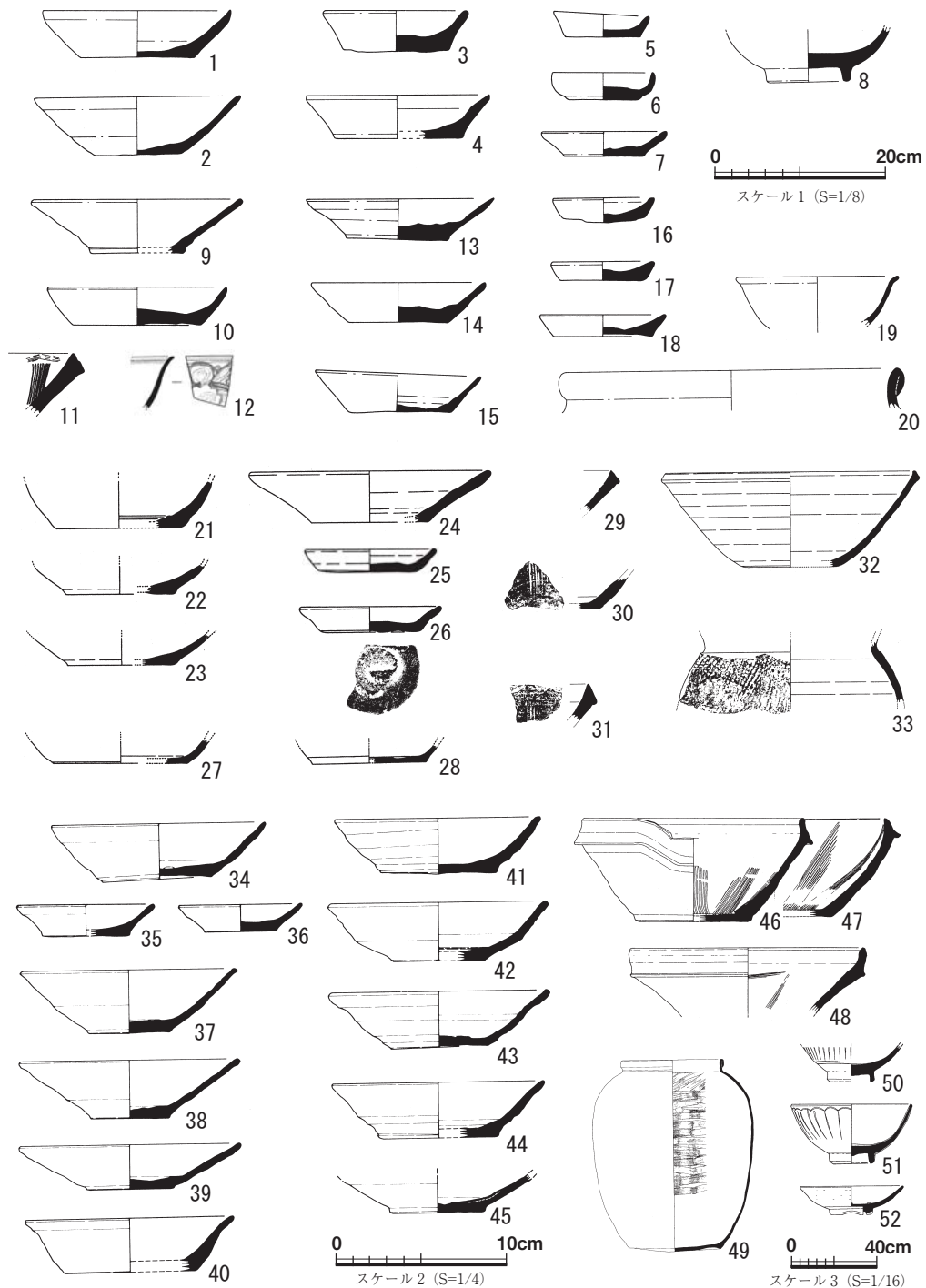
第1郭第1号土坑から土師質土器の一括資料が得られている。土坑は墓と捉えられており、埋土中央部の暗黄褐色土・黒色土中から土師質土器破片多数とともに、完形の土師質土器坏・皿および備前焼、中国産青磁が出土した(第14図1～8)。坏(1・2・4)は底部～口縁部が直線的に開く形態で、口径12.0cmのもの(2)と11.0cm弱のもの(1・4)がある。前者は器高がやや高い。後者はやや低く、口縁部が内彎するもの(1)と底部～口縁部がわずかに外彎するもの(4)がある。皿(3・5～7)は、体部が直立気味のもの(3・5・6)と大きく開くもの(7)がある。前者はわずかに外彎するもの(3・5)と内彎するもの(6)があり、外彎するものは大小の法量が認められる。共伴の青磁は碗(8)である。

このほかに一括資料は得られていないが、第2郭平坦面1～平坦面2にかけて焼土層が検出され、土師質土器、瓦質土器、備前焼、青花などが出土した(第14図9～12)。焼土層は平坦面1と同じレベルで広がっており、平坦面2を埋めて平坦面1を拡張した後の堆積と捉えられている。土師質土器は坏(9・10)で、底部～口縁部が直線的に大きく開くもの(9)とやや傾斜が急なもの(10)である。備前焼は擂鉢小破片(11)、青花は皿小破片(12)である。隣接の第2郭平坦面2南部(第2郭2区)でも土師質土器が一定量出土しており、坏、皿が認められる(第13図13～18)。坏(13～15)は器高2.2cm程度と低く、体部が大きく開くもので、体部がわずかに外彎するもの(13)と底部～口縁部が直線的に開くもの(14・15)がある。皿(16～18)は体部の傾斜が急なものが多い。備前焼大甕(20)、中国産青磁碗(19)が伴っている。

⑦幾志山城跡(広島市安佐北区田口)

宅地造成に伴い、2008・09年に(財)広島市文化財団、特定非営利活動法人ヒロシマ文化・健康サポートセンターによって発掘調査された(濱岡編著2009)。中世山城跡で、郭3、建物跡1、柵2、階段状遺構1、溝4、土坑5などが検出された。

第3郭S X 1階段状遺構からややまとまって土師質土器、備前焼、東播系須恵器、



第 14 図 有井城跡・幾志山城跡・北谷山城跡出土の土師質土器坏・皿類と共伴遺物

(1～20. 有井城跡、21～33. 幾志山城跡、34～52. 北谷山城)

※縮尺は 8・11・12・19・20・29～33・46～48・50～52 はスケール 1 (S=1/8)、49 はスケール 3 (S=1/16)、その他はすべてスケール 2 (S=1/4) が対応する。

亀山焼などが出土している（第14図21～25・29・30・32・33）。土師質土器は坏、皿が認められる。坏（21～24）は底部～体部が内彎し、体部の傾斜が急なもの（21）と底部～口縁部が外彎気味に大きく開くもの（24）がある。22・23は上記の形態とは異なると思われるが、底部のみの破片で、全体の形状は不明である。皿（25）は直線的に開く形態が認められる。出土の陶磁器は、備前焼播鉢（29・30）、東播系須恵器捏鉢、亀山焼甕で、備前焼と東播系須恵器、亀山焼の年代は大きく離れている。本遺構からは古墳時代の須恵器も出土しており、複数時期にわたる遺物が混在しており、土師質土器についても複数時期のものが存在する可能性が高い。このほかに、第2郭SK2土坑で土師質土器坏・皿（第14図26・27）、第2郭SX3落ち込み状遺構で土師質土器坏（28）、備前焼播鉢（31）が出土しているが、土師質土器坏・皿の1時期の様相を検討できる資料はない。

⑧北谷山城跡（広島市東区温品）

道路建設に伴い、1985年に広島市教育委員会によって発掘調査が行われた（阿部編1986）。中世山城跡で、郭5、建物跡5、柱穴群3、土坑4、武者走り1などが検出され、第1郭3号建物、第2郭3号柱穴群で遺構に伴って土師質土器が出土した。

出土の土師質土器坏・皿類はいずれも底部回転糸切りである。第1郭3号建物出土の土師質土器は坏、皿が確認できる（第14図34～36）。坏（34）は底部～口縁部がわずかに内彎しながら直線的に開く形態である。皿（35・36）はやや深い形態で、体部が外彎するもの（35）と体部が外彎し口縁部が内彎するもの（36）がある。3号建物跡では土師質土器しか出土していないが、第1郭西側で備前焼播鉢（第14図47・48）が出土している。第2郭3号柱穴群出土の土師質土器は形状が確認できるのは坏のみである（第13図41～45）。全体的に体部がわずかに丸みをもち、口縁部が直線的に開くもの（41・42）⁽²⁾とわずかに外彎するもの（43・44）がある。いずれも外面は回転ナデ調整が顕著で、明瞭な稜線が認められるものが多い。本遺構も土師質土器の出土のみであるが、第2郭では瓦質土器、備前焼、青磁などが出土している（第14図49・50）。備前焼は大甕（49）で、第3郭出土資料と同一個体である。青磁は碗（50）である。

この他に、第3郭西側でも土師質土器坏が一定量出土している（第14図37～40）。底部～口縁部が直線的に大きく開く形態（37～39）主体で、体部の傾斜が急で口縁部が外彎するもの（40）が認められる。第3郭中央では陶磁器類が比較的まとまって出土した（第14図46・49・51・52）。陶磁器類は、備前焼播鉢（46）・大甕（49）、

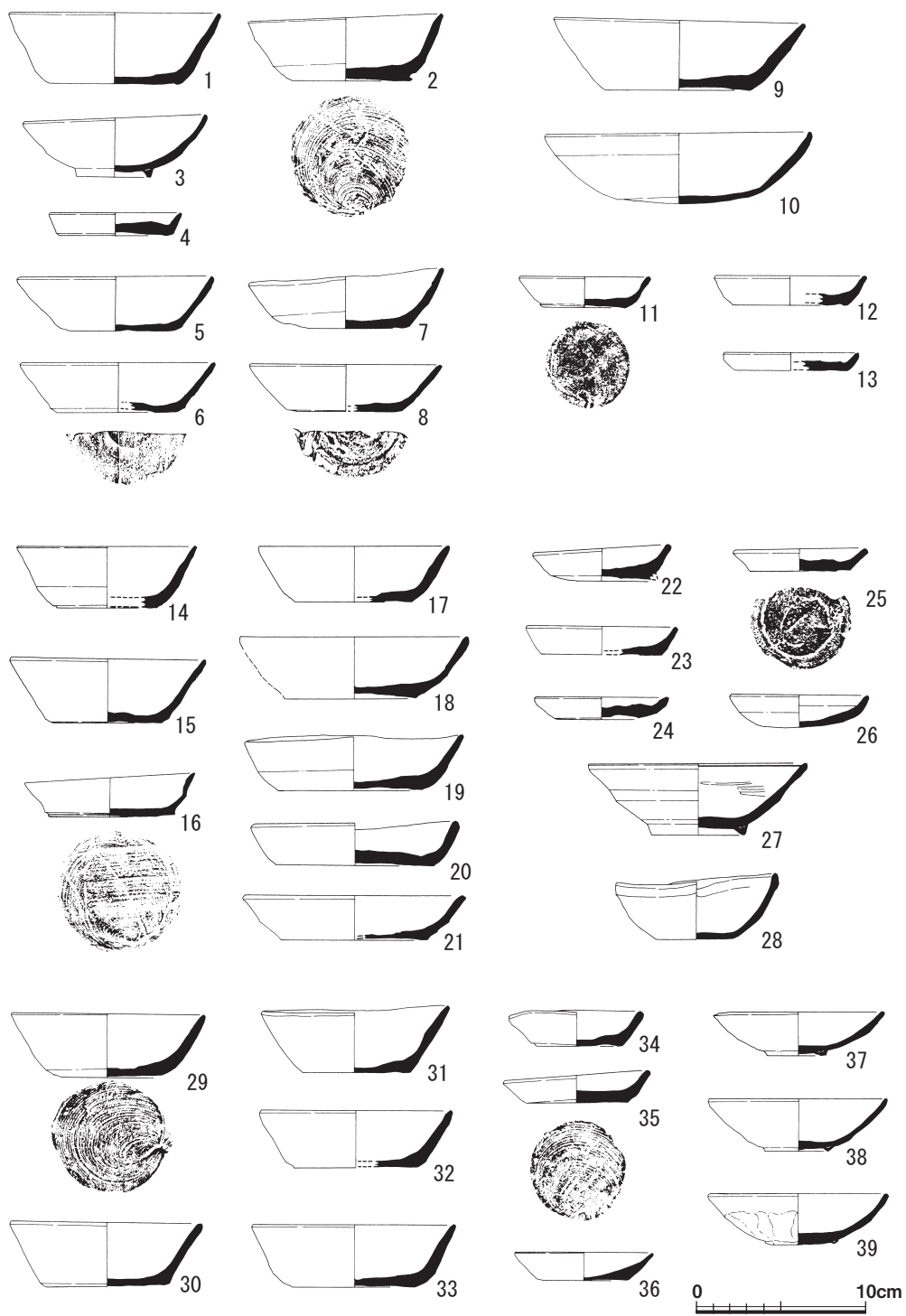
青磁碗（51）、白磁皿（52）である。

沼田川下流域 三原市本郷町および三原市西部で、中世には小早川氏が本拠地とした地域である。ここでは、三原市・尾道市の島嶼部や隣接する竹原市を対象とする。本地域は、高山城跡、新高山跡をはじめ多くの中世遺跡が知られているが、考古学的な調査が行われた遺跡は少ない。竹原市小梨城跡（植野・太田雅慶・太田裕子・山県編著 1978）、高崎城跡（太田・田邊・脇坂ほか 1986）、行武城跡（田邊編 1984）、三原市俵崎城跡（山田・出野上編 1998）など中世山城跡を主体に調査が実施されており、中世後期の資料が蓄積されている。小梨城跡では一括資料はないが、高崎城では井戸から一括資料が得られており、土師質土器皿・鍋とともに青磁碗、備前焼播鉢（間壁編年Ⅳ期後半～Ⅴ期）が出土した。行武城跡（田邊編 1984）では、S K 01・03 で一括資料が得られており、土師質土器皿とともに、S K 01 では青磁碗、白磁皿、S K 03 では青磁碗、白磁皿、青花皿・碗、備前焼小壺など 16 世紀代に位置づけられる資料が出土した。俵崎城跡では 15 世紀後半～16 世紀を中心とする多数の遺構が検出され、同時に多くの一括資料が得られている。また、城館遺跡である三原市三太刀遺跡全域の発掘調査によって中世の遺構・遺物が多数検出され、14 世紀前葉を前後する時期の様相が明らかとなっている。ここでは、三太刀遺跡、俵崎城跡の一括資料について検討し、14 世紀～16 世紀の本地域の土師質土器坏・皿類の様相を検討する材料としたい。

①三太刀遺跡（三原市本郷南 4 丁目）

土地区画整備事業に伴って 2000～2004 年に（財）広島県埋蔵文化財調査センターによって発掘調査が行われ、古代～近世の遺構・遺物が多数検出された（梅本編著 2003・梅本編 2004・2005）。さらに、2006 年からは三原市教育委員会によって発掘調査が継続され、中世前期の建物群、庭園遺構などが検出されている（三原市教育委員会 2010）。尾根に囲まれた平坦地は東西 160 m、南北 120 m の規模で、全域に中世の遺構が広がっている。

（財）広島県埋蔵文化財調査センター調査区における中世の遺構は A～D 区を中心に検出された。A～D 区では、掘立柱建物跡 13、柵列跡 9、溝 14、井戸 1、池状遺構 1、土坑 3、鍛冶遺構 1 などが検出され、遺跡中心部の一角を構成すると考えられる。出土遺物、遺構の切り合い、建物主軸方向などから少なくとも 3 時期が存在するものと推定されており、S B 5 掘立柱建物が最も古く、後続して大半の建物跡、井戸などが構築され、S B 13 掘立柱建物、S K 4 墳墓が最も新しく位置づけられている（梅本



第 15 図 三太刀遺跡出土の土師質土器坏・皿類
 (1 ~ 13. B区SE 1, 14 ~ 28. B区SX 1, 29 ~ 39. D区SD 11)

2003)。土師質土器は各遺構から出土しているが、B区SE1井戸、SX1池状遺構、D区SD11でまとまった資料が得られており、一括性も高い。

SE1はSX1の中央部に構築されている井戸で、井戸を廃絶して埋積した後にSX1（池状遺構）を構築したと考えられる。SE1では土師質土器が埋積土下層と上層から出土しており、下層では底面及び底面近くで完形、完形に近いものがまとめて出土した（第15図1～13）。下層の土師質土器（1～4）は坏・皿・埴である。坏（1・2）は底部～口縁部が直線的に開く形態で、傾斜が急である。皿（4）は直立気味に開く形態である。埴（3）は吉備系土師質土器で、高台断面は台形でしっかりしている。上層の土師質土器（5～13）は坏、皿である。坏（5～10）は口径11.0cm前後のもの（5～8）と14.2～15.3cmのやや大型品（9・10）がある。前者は下層の坏と同形態で、底部～口縁部が直線的に開くもの（5・6・8）が多いが、体部がわずかに内彎するもの（7）がある。下層の坏に比べて器高がやや低い。後者は口径11.0cm前後の坏をそのまま大型化した形態（9）と底面～口縁部が内彎するもの（10）がある。皿（11～13）はいずれも比較的急傾斜に開くもので、深いもの（11・12）と浅いもの（13）がある。底部は回転糸切りによる切り離しが多いが、上層の坏のうち白褐色を呈するもの（5～8・10）は回転ヘラ切り、もしくはその可能性があり、板目を施しているもの（5）も認められる。

SX1では土師質土器のほかに、瓦器埴、青磁碗・皿、白磁碗・皿などが出土した。土師質土器は坏・皿・埴がある（第15図14～28）。坏・皿は底部回転糸切りが主体であるが、回転ヘラ切りによるもの（16・25）がある。また、切り離し後、板目調整を施すものが散見される（16）。坏（14・15・17～19）は口径10.7cm前後のもの（14・15・17）と13.1cmのもの（18・19）がある。前者はSE1上層の坏とほぼ同形態で、若干口径の縮小傾向が認められる。このほかに、法量的には坏であるが、口径に対する器高がかなり小さくなり、皿との中間的な形態（16・20・21）がある。体部は内彎気味で、傾斜の急なもの（16・20）と比較的大きく開くもの（21）がある。皿（22～26）は比較的急傾斜で開くものが主体であるが、やや大きく開くもの（24・25）、底面との境界が曖昧で、全体が緩やかに内彎するもの（26）がある。26は外面を指頭ナデ調整するもので、地域外からの搬入品と思われる。埴（27・28）は高台をもつもの（27）と無高台のもの（28）がある。前者は体部～口縁部が直線的で、高台は断面三角形であるが、しっかりしている。後者は口縁端部が直立するが、広い底面を有している。いずれも吉備系土師質土器の範疇で捉えられるものであるが、典型的な形

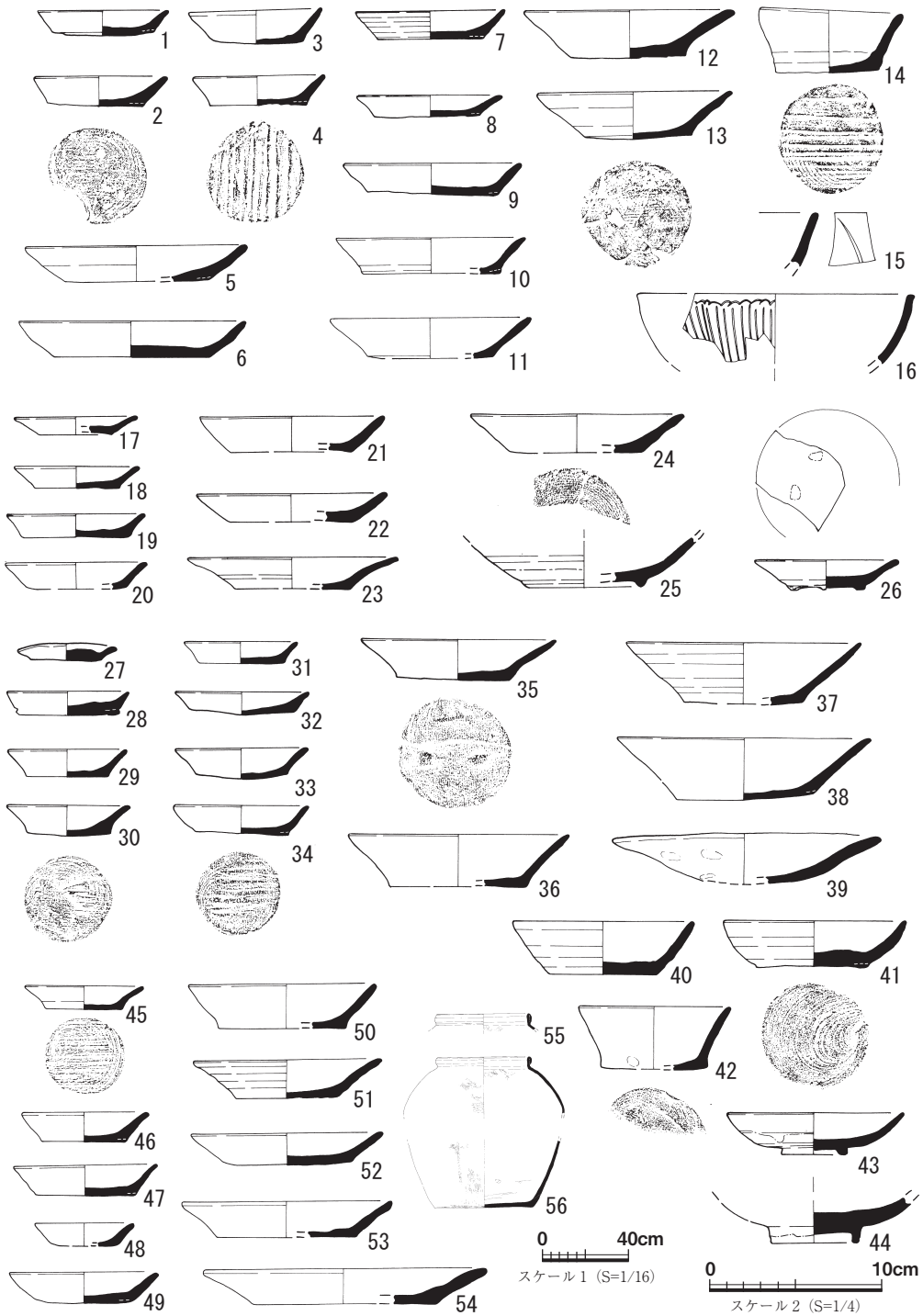
態ではなく、模倣品かもしれない。

D区SD11では北西隅を中心に土師質土器が集中的に出土し、一括遺棄の状況と捉えることができる。土師質土器は坏、皿、埴がある。坏・皿は底部回転糸切りを基本としている。坏(29～33)は基本的に体部～口縁部が直線的かつ急傾斜に開く形態である。口径10.8～11.6cm、器高3.4～4.1cmの間に大半の資料がおさまり、法量的にも安定している。詳細にみると、底部が直線的に開くもの(30・31)と内彎するもの(29・32・33)、また、体部～口縁部が直線的なもの(29・31)、わずかに外彎するもの(30・33)などがある。皿は深い形態(34)と浅い形態(35・36)があり、後者には内面の底部と体部の境界が不明瞭で、中央部が大きく窪むもの(36)が認められる。埴(37～39)は吉備系土師質土器で、一定量が出土している。高台は小型で低く、断面台形のもの(37)、三角形のもの(38・39)があり、後者が主体である。口径・器高ともB区SE1、SX1出土埴に比べ縮小傾向が認められる。

② 倭崎城跡(尾道市瀬戸田町鹿田原)

瀬戸内海を眺望することができる位置にある海城跡である。道路改良工事に伴って、1996年に(財)広島県埋蔵文化財調査センターによって発掘調査され、郭5、空堀2、堀切1などが確認された(山田・出野上編1998)。そのうち、第1郭の一部、第4郭、空堀などが調査され、第1郭で建物跡2、溝3、土塁2、土坑33ほか、第4郭で土塁1、溝1、集石遺構2などが検出された。多くの遺構から土師質土器が出土しているが、出土量や一括性の高いものとして、第1郭検出のSB1礎石建物、SD2溝、SK33土坑、SX7遺物集中部がある。

SB1は火災を受けて全面に焼土層が広がっており、焼土層中から土師質土器、中国産青磁、朝鮮製粉青沙器などが出土した(第16図1～16)。土師質土器は、坏、皿、鉢、鍋である。皿が主体の組成で、坏は少数である。坏(11～13)は口径に対して底径が小さく、体部が外彎気味に大きく開くもの(12・13)と底部がわずかに外彎し、体部～口縁部が直線的に開くもの(11)がある。皿は口径7.0～8.0cm程度の小型(1～4、7・8)、9.9～11.6cmの中型(9・10)、12.0cm以上の大型(5・6)の3種類がある。小型は深いもの(1～4)と浅いもの(7・8)がある。体部は直線的でやや急角度で開くものが主体であり、体部が直線的なもの(1・2・3・7)とわずかに外彎するもの(4・8)がある。中型は小型の口径を広げた形態である。大型も器高は小・中型とあまり変わらない。体部は直線的、あるいはわずかに内彎しながら大きく開いている。鉢(14)は小型品である。共伴の青磁は碗(15・16)である。



第 16 図 伊崎城跡出土の土師質土器坏・皿類と共伴遺物
 (1 ~ 16. S B 1, 17 ~ 26. S D 2, 27 ~ 44. S K 33, 45 ~ 56. S X 7)

※縮尺は 55・56 はスケール 1 (S=1/16)、その他はすべてスケール 2 (S=1/4) が対応する。

S D 2では、土師質土器、中国産白磁などが出土した（第16図17～26）。土師質土器は皿のみである（17～24）。口径は7.0cm前後の小型、10.3cm前後の中型、12.0cm程度の大型がある。体部が外彎する形態を主体とし、急傾斜をなすもの（19）、やや急なもの（18・20・21）、大きく開くもの（17・22・23・24）があるが、急傾斜をなすものは小型のみである。また、中型は外彎しながら大きく開く形態（23）が認められる。底部切り離しは不明なものが多いが、回転糸切り（21・24）と回転ヘラ切り（19）が確認できる。切り離し後にナデ調整（18・19・21）や板目（18）を施すものがある。共伴の白磁は碗・皿である。

S K 33は墳墓と考えられ、土師質土器、土師器、瓦質土器、中国産青磁、中国産白磁などが出土した（第16図27～44）。土師質土器は、坏、皿、鉢が認められる（27～38・40～42）。坏は口径10.5cm前後のもの（35・40・41）と12.4cm以上のもの（36～38）の大きく2種類があり、後者はさらに13.0cm前後（36）、14.5cm前後（37・38）の大きさに分かれる。口径10.5cm前後のものは底部～体部が外彎し大きく開くもの（35）と内彎するもの（40・41）がある。12.4cm以上のものはいずれも底部～口縁部が直線的に開き、わずかに外彎するものが多い。皿（27～34）は口径6.5cm前後のもの（27～31）と7.5cm前後（32～34）のものがある。口径の大きさとは関係なく、浅いもの（27～32）とやや深いもの（33・34）がある。体部が急傾斜のものを主体とし、わずかに外彎するもの（27・29～33）、直線的に開くもの（28・34）とがある。坏・皿の底部は確認できるものはすべて回転糸切りであるが、底部をナデ消して底部切り離し痕が不明なもの（31・32）や底部切り離し後ナデ消し調整（29・35）や板目調整（28～30）を施すものが多い。鉢（39）は、S B 1出土品と同様に、小型で、底部が直立気味である。共伴の土師器（39）は京都系皿である。青磁は碗（44）、白磁は皿（43）が出土した。

S X 7はS B 1の焼土層と関連を持つ可能性が指摘されており、土師質土器、備前焼などが出土した（第16図45～56）。土師質土器は皿を主体とし、坏がわずかに認められる（45～54）。坏（50）は体部が直線的に開くもので、比較的急傾斜である。皿（51～54）は6.0～8.0cmの小型（45～49）、11.0cm前後の中型（51～53）、16.0cm（54）の大型がある。小型はやや深い形態を主体とし、体部は比較的急傾斜である。底面との境界が明確に屈曲し、体部が外彎気味のもの（42～44）が主体であるが、丸みをもつもの（45・46）が認められる。中型、大型は底部～口縁部が大きく開き、体部が外彎するものを主体とする（51・53・54）。底部切り離しは小型皿は回

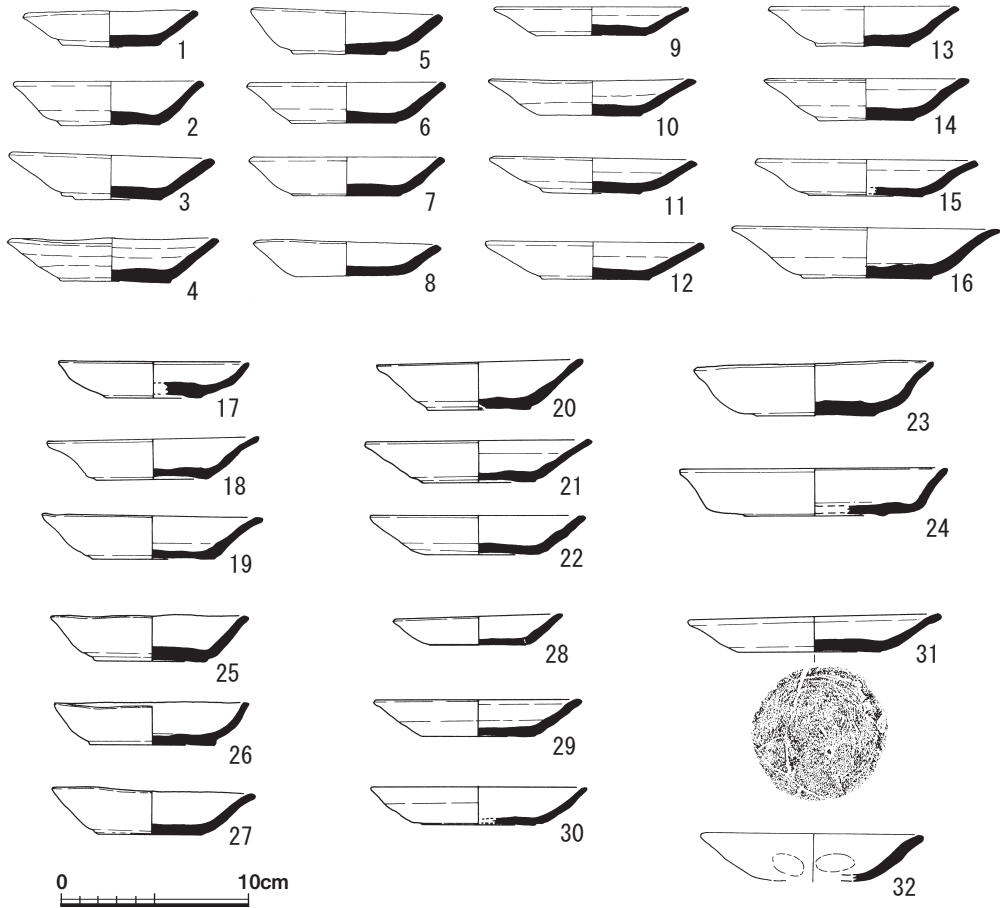
転糸切りを主体とするが、坏、中・大型皿は回転ヘラ切りを主体としている。小型皿は板目調整を施すもの（42～44・46）が多い。共伴の備前焼は大甕（55・56）である。

芸北地域 広島県北西部の広範な地域が含まれる。毛利氏、吉川氏の関連遺跡をはじめとする中世遺跡が多く存在する。しかし、発掘調査は広島県教育委員会中世遺跡調査研究室が実施した吉川氏関連の吉川元春館跡などでまとまった資料が蓄積されているほかは、毛利氏関連の安芸高田市郡山大通院谷遺跡などいくつかの遺跡を挙げる程度である。本地域では16世紀後半を除くと、それ以前の様相はほとんど明らかではない。

中世前期の土師質土器は上滝川遺跡に出土例がある。自然流露（SD1）を中心に、瓦器、瓦質土器、中国産青磁碗・皿、中国産白磁碗などとともに土師質土器が出土している（伊藤編著1993）。土師質土器は坏、皿、鍋で、坏は口径13.0～14.0cm前後、器高3.0cm前後の法量で、底部～口縁部が内彎する形態が主体である。内外ともに強い回転ナデ調整により顕著な稜線が認められる。底部は静止糸切りと回転糸切りが認められる。この他に、口径12.0cm、器高3.7cmの法量で、体部が内彎するやや深さのある形態が認められる。皿は口径7.4～8.0cmと9.0cmのものがあり、いずれも浅い。体部が内彎するもの、直立気味のもの、大きく開くものが認められる。瓦器は和泉型Ⅲ-2～3期である。瓦器、中国産磁器が伴うとすれば、13世紀代に位置づけられる可能性がある⁽³⁾。しかし、土師質土器坏も様相を異にする二者があり、今後一括資料に基づいた検討が必要である。

郡山大通院谷遺跡出土の土師質土器の中には、本稿で検討した資料をもとにすると少なくとも14世紀代まで遡る資料が散見される（新川・重森・沖田編2002・2003）。土師質土器以外に、瓦器や中国産磁器などの出土から見ると、13世紀代の土師質土器の存在も予想されるところであるが、組成や一括資料を欠いている。

15世紀代に位置づけられる遺跡としては、小倉山城跡（小都・平川編2002）、須倉城跡（梅本編1998）、小奴可城跡（木村編1988）、龍山城跡（是光1993）がある。小倉山城では、最大8面の遺構面が確認されており、多数の中国産陶磁器類とともに土師質土器が出土しているが、土師質土器の組成や年代を詳細に検討できる状況にはない。備前焼は間壁編年Ⅲ期後半～Ⅴ期に位置づけられるものが出土しており、出土土師質土器も少なくとも14世紀後半代まで遡る資料が含まれていると見ることができる。出土磁器類からみると、14世紀後半～15世紀前半と15世紀～16世紀前半の大きく2群に分けることができるが、後者が主体であろう（永田・藤野2009）。出土の



第 17 図 吉川元春館跡出土の土師質土器杯・皿類
 (1～16. S X 538, 17～24. S D 127 下層, 25～31. S D 127 上層, 32. E B 1619 区)

土師質土器もおおむね後者を主体とする様相と考えられる。須倉城跡などでも土師質土器が出土しているが、十分に組成や年代を検討できる状況にはない。

16 世紀の遺跡としては、吉川元春館跡（小都・尾崎編 1994・1995、小都・沢元編 1996、小都・岩本編 1997、小都・平川編 1998）、万徳院跡（田邊編 1991・1992・1993）、郡山大通院谷遺跡（新川・重森・沖田編 2002・2003）などがあり、いずれも 16 世紀後半を主体とする。とくに、吉川元春館跡、万徳院跡は短期間で廃絶され、編年、組成を検討する上できわめて良好な基準資料である。

このように、中世全体を対象とした土師質土器の編年については、今後の資料蓄積を俟つ状況にある。しかし、16 世紀後半については充実した資料が蓄積されており、ここでは吉川元春館跡の資料について、簡単にみておきたい。吉川元春館跡では遺構

に伴って多量の土師質土器が出土しているが、S X 538 出土資料は組成が検討できる良好な資料である（第 17 図 1～16）。一括廃棄された土器溜りであり、すべて皿で構成されている。法量的には口径 10.5cm 前後、器高 2.2cm 前後のもの（1～11・13・14）と口径 11.0～11.7cm、器高 1.9～2.5cm のもの（12・15）、口径 14.0cm、器高 2.6cm の大型品（16）の 3 種類が認められる。口径 10.5cm 前後のものがもっとも多く、やや深いもの（1～8・13・14）とやや浅いもの（9～11）がある。法量的には斉一性の高い組成である。形態もほぼ共通しており、体部～口縁部が大きく開く形態であるが、詳細に見ると、底面との境界が明瞭に屈曲し、体部が直線的に広がるもの（1～4・9・10）、底部が丸みを持つもの（5～8）、体部～口縁部が外彎するもの（13～16）がある。いずれも底部回転糸切りで、多くの個体で底部切り離し後ナデ調整を施している。

また、S D 127 では上下 2 層で一括資料が得られている（第 17 図 17～31）。溝埋土であるが、下層では並べたような状態で完形土器が出土しており、上層の土師質土器も完形度が高い。下層（17～24）と上層（25～31）で組成に基本的な違いはないが、詳細に見ると相違点も指摘できる。下層では大きく開く形態が主体であるが、上層では器体の傾斜がやや急なものが一定量含まれている。また、下層は器体が直線的、あるいは外彎するものが主体であるが、器体が直線的、あるいは内彎するものが主体である。大型品の形態も上下層で異なっている。本遺跡は 16 世紀後葉の時期に限定される資料であるが、さらに時期を細分できる可能性を示しているのかもしれない。

本遺跡では、この他に、京都系土師器を模した形態の皿（第 17 図 32）も出土している。

註

- (1) 皿は口縁部、体部、底部の区分が困難な場合が多い。側面観の形状については、特に断らない限り、口縁部～底部の形状である。
- (2) 第 14 図 42 の体部は実測図ほど稜線が明瞭でなく、体部は比較的緩やかに内彎する。
- (3) 瓦器の年代観は森島（1992）に拠る。

5. 安芸地方における土師質土器杯・皿類の年代的な位置づけと地域的特徴

1) 主要資料の一括性と年代

これまで、西条盆地及び広島湾岸を中心に土師質土器杯・皿の組成について検討可能な資料を概観してきた。検討した遺跡は西条盆地 11 遺跡、広島湾岸 8 遺跡、沼田川下流域 2 遺跡、芸北 1 遺跡の合計 22 遺跡である。いずれも広い意味で遺構に伴う

資料を対象としたが、資料の一括性という観点からは3類型に区分することができる。第1類型は、土器廃棄遺構（土坑、溝、井戸への一括廃棄、住居床面のへの廃棄・遺棄など）、墳墓（副葬品）からの出土で、一括性がきわめて高いものである。西条盆地では、石佛遺跡、道照遺跡（東広島市調査地区）S K 006、道照遺跡（広島県調査区）S X 23・24・25、溝口4号遺跡No.1127・1024、狐が城跡S K 12、時宗遺跡P 19、中屋遺跡B地点S K 31・32、山崎1号遺跡S K 1・2、薬師城跡S E 2、S B 1、広島湾沿岸では、有井城跡1号土坑、沼田川下流域では、三太刀遺跡S E 1下層、S D 11、俵崎城跡S B 1、S K 33、S X 7、芸北では吉川元春館跡S X 538、S D 127が該当する。広島大学東広島キャンパスでは、鏡谷遺跡C地区S B 01、同D地区S K 06・07、鏡千人塚遺跡S K 15がある。

西条盆地から概観すると、石佛遺跡では和泉型瓦器塚が出土しており、Ⅲ-2期に位置づけられ、出土土師質土器は12世紀末～13世紀初頭に位置づけられる。道照遺跡（東広島市地区；以下、道照遺跡（市）と略す）S K 006ではⅢ-2～3期和泉型瓦器塚が共伴し、12世紀末～13世紀前葉に位置づけられる。道照遺跡（広島県調査区；以下、道照遺跡（県）と略す）S X 24・25は土師質土器が出土したのみであるが、S X 23では中国産青磁碗が共伴しており、横田・森田分類（横田・森田1978）I-5類（鎬蓮弁文）に分類される。製作年代をそのまま廃棄年代とすることはできないが、安芸地方南部では14世紀（前半）の遺跡で出土するケースが多い。溝口4号遺跡No.1204・1127では土師質土器が出土したのみである。No.1204は大溝の内側に位置することから前半期（13世紀後半～14世紀前半）に属する可能性があるが、周辺の遺構からはほとんど出土遺物がない。No.1204は後半期（14世紀後半～15世紀半ば）の遺構が集中する地区から検出されており、大きくは後半期の時間幅の中で捉えることができる。狐が城跡第1郭S K 12、時宗遺跡P 19は土師質土器の出土のみである。狐が城跡では中国産青磁・白磁、常滑焼甕が第1郭（2の段ほか）で出土している。青磁は横田・森田分類I類（I-5類の可能性ある）、白磁は森田分類（森田1982）E群皿である。常滑焼甕は中野編年（中野1995）6b型式～7式と思われる。出土陶磁器は14世紀前半と16世紀の2時期が認められ、S K 12出土資料は前者に属する可能性が高い。時宗遺跡P 19出土資料はS B 2・3出土資料に比較して小型化した様相があり、新しく位置づけられる可能性がある。S B 2・3の年代を参考にすれば、14世紀代に位置づけられる可能性がある。中屋遺跡B地点S K 31・32は備前焼大甕を利用した埋甕で、いずれも間壁編年Ⅲ期後半に位置づけられるもので、14世紀後半の

資料である。山崎1号遺跡SK1は土師質土器のみの出土であるが、京都系土師器の模倣品が出土している。形態的な特徴からすると、大内ⅣA式(北島2010)に対比され、16世紀初頭～前半に位置づけられる。SK2では中国産青磁碗が共伴している。上田分類(上田1982)B-II-b類であり、土師質土器の年代観としては古すぎるようである。薬師城跡SE2では、土師質土器とともに青磁碗・稜花皿、青花皿、備前焼壺・小壺・鉢、褐釉四耳壺が出土した。青磁碗は上田分類B-Ⅲ・Ⅳ類、青花皿は小野分類(小野1982)皿B1群で、備前焼壺は間壁編年(間壁1991)Ⅳ期前半、褐釉四耳壺は杉山分類ⅠA式(杉山1987)である。出土陶磁器類は茶道具と思われ、土師質土器の年代より古いと考えるべきで、青花皿が15世紀後半～16世紀前半に、褐釉四耳壺は16世紀を前後するものが多いとされていることから、16世紀前半の年代を考慮しておきたい。SB1では、土師質土器、白磁碗、青花皿、瓦質土器播鉢などが出土している。共伴の白磁皿は森田分類(森田1982)E群、青花皿は小野分類皿B2群、E群で、磁器から見ると、16世紀後半～後葉に位置づけられる。

広島湾岸の有井城跡第1郭1号土坑では土師質土器とともに備前焼破片、中国産青磁碗が出土した。備前焼の時期は不明である。青磁碗は森田分類E類で、15世紀代に位置づけられるものと思われる。

沼田川下流域の三太刀遺跡SE1下層は土師質土器のみの出土だが、吉備系土師質土器壺が共伴した。口径は10.5cmで草戸Ⅱ期前半(鈴木1996、2006)の法量に一致するが、高台のつくりや形態は草戸Ⅰ期後半に共通し、13世紀後葉に遡る可能性もある。SD11も土師質土器のみの出土で、吉備系土師質土器壺が共伴した。草戸編年Ⅱ期後半古段階～新段階に位置づけられる。倭崎城跡第1郭SB1では中国産青磁碗・盤、朝鮮製粉青沙器瓶などが出土した。共伴の青磁碗は上田編年B-I'類・B-Ⅳ類であり、13世紀後半～16世紀前半でかなりの年代幅があるが、B-I'類は伝世品と考えられる。粉青沙器は16世紀前半と思われ、陶磁器から見れば、15世紀後葉～16世紀前半に位置づけられる。SK33では、土師器、瓦質土器、中国産青磁碗、中国産白磁皿などが共伴する。土師器は京都系土師器Ⅲで、小森・上村編年(小森・上村1996)Ⅸ期で15世紀後半に位置づけられる。青磁碗は上田編年B-Ⅲ類・B-Ⅳ類?、白磁皿は森田編年D群である。15世紀後半の組み合わせであろう。SX7では備前焼大甕などが共伴する。備前焼大甕は間壁編年Ⅳ期前半～後半で、15世紀～16世紀初頭の年代である。

芸北地域の吉川元春館跡SX538、SD127については土師質土器のみの出土である

が、館の年代が16世紀第4四半期に限定され、重要な基準資料である。

広島大学東広島キャンパスの鏡谷遺跡C地区S B 01では土師質土器とともに、瓦器塼・皿、東播系須恵器捏鉢・片口、亀山焼捏鉢・甕、中国産青磁碗・皿、石鍋が出土した。瓦器はいずれも和泉型で、Ⅲ-2期を主体としており、東播系須恵器は森田編年（森田1995）Ⅱ期第2段階、亀山焼は岡田編年（岡田1988）第1段階、石鍋は木戸編年（木戸1995）Ⅲ-a期である。総体としてみると、12世紀初頭を前後する時期に位置づけられる。鏡西谷遺跡D地区S K 06・07は墳墓で、S K 06は土師質土器坏が出土したのみであるが、S K 07では瓦器塼が共伴した。和泉型Ⅲ-3～Ⅳ-1期で、13世紀中葉に位置づけられるものであろう。鏡千人塚遺跡S K 15は多数の土師質土器を副葬していたが、ほかに共伴遺物がなく、年代推定は他遺跡との対比により検討するほかはない。

第2類型は、建物跡、溝など遺構に伴うもの、大規模な整地土等で覆われているものなどで、一括性はやや劣るものの、一定の時期幅の中で土師質土器の組成が検討可能である。建物跡や溝は存続試期間が長い場合、複数時期の遺物が混在している可能性がある。とくに、溝は周辺部からの遺物が流入し、生活に伴う廃棄行為のみにとどまらない。土師質土器の様相や共伴遺物相互の年代の検討が必須である。一方、大規模な造成土などによって先行する遺構が広範囲に覆われる場合、上下の遺構に伴う遺物の混在は可能性が非常に低いといえる。遺構の存続時期によってはかなりの時間幅を考慮せざるを得ないが、遺構面が3面以上ある遺跡では、時期幅をかなり限定することが可能な場合がある。西条盆地では、道照遺跡（市）S D 002・003、道照遺跡（県）S B 10・18、S E 4・35、浄福寺3号遺跡S B 3・6、溝口4号遺跡No.1001、時宗遺跡S B 2・3、城仏土居屋敷遺跡Ⅰ期・Ⅱ期、山崎1号遺跡S D 1、薬師城跡S D 1、広島湾岸では、菩提院遺跡第Ⅲ～Ⅴ遺構面、三ツ城跡1号建物、1号建物西側斜面、横山城跡Ⅰ～Ⅲ期、北谷山城跡第1郭3号建物、第2郭3号柱穴群、沼田川下流域では、俵崎城跡S D 2が該当する。いずれも同一遺構出土の土師質土器はおおむね型式学的に共通する一群を抽出することができる。

西条盆地の道照遺跡（市）S D 002では、瓦器塼、東播系須恵器甕、白磁碗、S D 003では、瓦器塼、白磁碗、石鍋が出土した。瓦器塼は和泉型Ⅲ-1・2期、東播系須恵器甕は水口分類（水口1983）甕A類、白磁碗は横田・森田分類Ⅳ・Ⅴ類、石鍋は木戸編年Ⅲ-a-1類であり、共伴の陶磁器・石鍋の年代観に大きな齟齬はなく、出土の土師質土器は12世紀後半～13世紀初頭の年代が与えられる。道照遺跡（県）S B 10では、瓦器塼、白磁碗、亀山焼甕が出土した。亀山焼は時期不明であるが、

瓦器は和泉型Ⅲ-2~3期、白磁碗は横田・森田分類Ⅴ-1類に比定され、12世紀末~13世紀前半に位置づけられる。S B 18では、中国産青磁碗が出土し、横田・森田分類龍泉窯系碗Ⅰ類であるが、土師質土器の年代を直接示すものではなからう。S E 4では、瓦器塚、中国産磁器、S E 38では、京都系土師器へそ皿、中国産青磁皿が出土した。古代須恵器や弥生土器などが混在しており、一括性はやや問題があるが、S E 4の瓦器塚は和泉型Ⅲ-2・3期、S E 38の京都系土師器へそ皿は小森・上村編年のⅦ期新~Ⅷ期古(14世紀後半)に位置づけられる。青磁碗は同安窯系である。S E 4出土の土師質土器坏は鏡西谷遺跡C地区S B 01のものと共通し、瓦器の年代である12世紀末~13世紀前半に位置づけられよう。S E 35は共伴の青磁は伝世品と思われ、土師器へそ皿の年代である14世紀後半に属すると思われる。浄福寺3号遺跡S B 3では、中国産青磁碗が出土した。青磁碗は横田・森田分類の龍泉窯系碗Ⅰ-4類である。安芸地方南部では14世紀前半を中心とする遺跡で出土する機会が多い。S B 6では、東播系須恵器捏鉢、中国産白磁壺が出土した。東播系須恵器は森田編年第Ⅱ期第2段階~Ⅲ期第1段階、白磁壺は13~14世紀で、共伴遺物は12世紀末~14世紀前半とかなりの幅がある。白磁壺は伝世品と考えれば、14世紀前半を中心とするものと見ることができる。溝口4号遺跡No.1001では、複数時期の遺物が混在しており、中世関係では、瓦器塚、東播系須恵器鉢、亀山焼甕、備前焼大甕、中国産青磁碗などが出土した。瓦器は和泉型Ⅲ-2期、東播系須恵器は森田編年第Ⅱ期第2段階、亀山焼は岡田編年第2~3段階である。青磁碗は横田・森田分類龍泉窯系碗Ⅰ-5類である。瓦器および陶磁器類から見ると、13世紀を中心とするといえるが、青磁碗龍泉窯系碗Ⅰ-5類は安芸地方南部では14世紀前半の遺跡を中心に出土することから、全体としては13世紀~14世紀前半を主体に大溝は機能したと想定でき、出土土師質土器もおおむねこの年代幅の中で考えておきたい。時宗遺跡S B 2では東播系須恵器捏鉢が出土しており、森田編年第Ⅲ期第1~2段階である。S B 3では古瀬戸折縁深皿が出土した。小破片で同定が困難であるが、藤澤編年(藤澤2005)中Ⅲ・Ⅳ期に比定されるものと思われる。S B 2・3は同時存在の建物と考えられることから、13世紀後半~14世紀前半を中心とする時期と想定される。城仏土居屋敷遺跡Ⅰ期(下層)では備前焼、中国産青磁、中国産白磁、東播系須恵器鉢など、Ⅱ期(上層)では備前焼、中国産青磁、青花などが出土している。Ⅰ期の備前焼は間壁編年Ⅳ期初頭を含むⅣ期前半、青磁碗は上田分類C類・D-Ⅱ類を主体とし、B-Ⅲ-a類が認められる。白磁稜花皿は森田分類D群である。東播系須恵器鉢は森田編年第Ⅱ期第2段

階に比定される。東播系須恵器は他の陶磁器類の年代観からするとかなり古く、主要な土師質土器の年代からは除外しておきたい。陶磁器類からはおおむね 15 世紀代の中で捉えることができ、備前焼を重視すれば、15 世紀前半代を中心とするといえる。Ⅱ期出土の備前焼は壺、甕があり、間壁編年Ⅳ期後半を主体とし、Ⅴ期に下るものは含まれていない。青磁碗はⅠ期の組成と大きく変わるところはない。青花皿は小野編年皿 B 1 群である。Ⅱ期は 15 世紀後半～16 世紀前葉の年代幅におさまるものと思われる。山崎 1 号遺跡 S D 3 では土師質土器、備前焼壺が出土している。間壁編年Ⅳ期前半で、15 世紀前半を中心とする。溝出土であり、遺物出土量があまり多くないことから、参考の年代としておく。薬師城跡 S D 1 では、中国産白磁皿、中国産青磁碗、天目茶碗、粉青沙器瓶が出土している。S D 1 では上層、下層の 2 枚の堆積層から土師質土器が出土しているが、陶磁器類は上下いずれの層から出土したのか記載がない。白磁皿は横田分類 D 群、青磁碗は上田分類 B - Ⅱ・Ⅳ類である。粉青沙器、天目茶碗は 15 世紀を中心とするものと思われる。陶磁器の様相は 15 世紀代の組み合わせで、下層の土師質土器に対応する可能性がある。

広島湾岸の菩提院遺跡では第Ⅲ～Ⅴ遺構面で良好な資料が得られており、第Ⅲ遺構面の出土状況は一括資料とみなしてもよい状況である。下層から順に見ると、第Ⅴ遺構面では土師質土器のみの出土であるが、第Ⅳ遺構面の年代から 12 世紀代に位置づけられる。第Ⅳ遺構面では、瓦器塚が共伴しており、和泉型Ⅲ - 2 期を主体に、Ⅲ - 3 期～Ⅳ - 1 期を少量含んでいる。12 世紀末～13 世紀初頭を中心に 12 世紀前葉～中葉の資料を一部に含んでいる可能性がある。第Ⅲ遺構面では、吉備系土師質土器塚、中国産青磁・白磁、中国産黄釉盤、褐釉六耳壺、古瀬戸瓶子、常滑壺などが共伴した。吉備系土師質土器塚は草戸編年Ⅱ期前半～後半新段階である。13 世紀末～14 世紀中葉の間に収まるもので、14 世紀前半を中心とする。東播系須恵器捏鉢が森田編年第Ⅲ期第 1 段階、青磁は横田・森田分類龍泉窯系碗 I - 4・5 類である。東播系須恵器、青磁の組み合わせは 13 世紀代を示し、吉備系土師質土器の年代よりやや古い、吉備系土師質土器は一定量出土しており、土師質土器坏の型式学的な特徴もおおむね均質であることから、13 世紀末～14 世紀前半に位置づけても大過ないであろう。三ツ城跡 1 号建物、1 号建物西側斜面では備前焼甕、古瀬戸卸皿・底卸目皿が出土した。備前焼大甕は多少の時期差が認められるが、間壁編年Ⅲ期におさまるものであろう。古瀬戸焼は藤澤編年中Ⅰ～Ⅲ期に位置づけられる可能性がある。このほか、第 1 郭で、備前焼甕、中国産白磁碗・青磁碗、石鍋、第 2 郭で備前焼甕・搦鉢が出土している。

備前焼甕は間壁編年Ⅲ期後半～Ⅳ期初頭、備前焼播鉢は間壁編年Ⅲ期後半、白磁碗は横田・森田分類Ⅴ類、青磁碗は横田・森田分類龍泉窯系碗Ⅰ類である。石鍋は木戸編年Ⅲ類－cである。中国産磁器が伝世品であることを前提とすれば、国産陶器・石鍋から見ると極端に時期差のある資料はみられず、14世紀～15世紀初頭の年代が考えられる。横山城跡では第1郭で3期の改修が行われており、第Ⅰ期では備前焼甕、第Ⅲ期では天目茶碗が出土した。備前焼甕は間壁編年Ⅲ期後半～Ⅳ期初頭（14世紀後半～15世紀初頭）、天目茶碗は灰被天目タイプと思われ、15世紀以降のものである（折尾・森本1987）。北谷山城跡第1郭3号建物、第2郭3号柱穴群では土師質土器が出土したのみである。遺構周辺からは備前焼播鉢・大甕、中国産青磁碗、中国産白磁皿が出土している。備前焼播鉢は間壁編年Ⅳ期後半～Ⅴ期、備前焼大甕は間壁編年Ⅳ期後半（中頃）、青磁碗は上田分類B－Ⅲ・Ⅳ類、白磁皿は森田分類D群である。出土の陶磁器は極端な年代差のあるものを含まず、15世紀～16世紀前半に位置づけられる。出土品に青花を含まないことからすると、16世紀前葉を下らないと考えられる（永田・藤野2009）。

沼田川下流域は倭崎城跡S D 2のみである。土師質土器は皿のみで構成され、中国産白磁碗・皿が共伴した。白磁碗は型式不明（森田編年E群か）、白磁皿は森田編年D群であり、時期からは15～16世紀の年代幅の中でしか捉えられない。

第3類型は一括資料ではないが、山城跡における同一郭出土の資料群、遺跡の継続年代が比較的短く遺跡内の一定の範囲内で出土した資料群などが該当する。同時に土師質土器において型式学的に共通する一群が抽出可能なものであり、前提として土師質土器と共伴、あるいは共に出土した遺物が同時期あるいは比較的時期的幅が狭い場合に限られる。型式学的特徴以外に同時性の保証はないが、編年を検討する上で俎上に載せることが可能な資料である。西条盆地では、狐が城跡、上条遺跡、広島湾岸では恵下城跡、国重城跡が該当する。

西条盆地の狐が城跡では第1郭S K 12で一括資料が得られているが、内容は土師質土器のみである。S K 12出土の土師質土器の型式学的特徴は、第1郭2の段、第2郭出土から出土した土師質土器の多くと共通する。既に検討したように、狐が城跡出土の土師質土器は大きく2群に分けることが可能で、S K 12をはじめとする坏・皿第1形態は、陶磁器の年代により14世紀前半を中心とする時期に、坏・皿第2形態は16世紀代に比定しておきたい。上条遺跡では土師質土器が第1郭、第2郭を中心に多数出土している。第1郭で古瀬戸蓋、備前焼大甕、第2郭で白磁皿、古瀬戸直

縁大皿、備前焼大甕が出土している。白磁皿は森田分類D群、古瀬戸は藤澤編年後Ⅱ～後Ⅲ期を中心としており、備前焼大甕は間壁編年Ⅲ期後半～Ⅳ期初頭、備前播鉢は間壁編年Ⅳ期前半である。そのほかの遺構出土の陶磁器類を含めると、全体としては14世紀～15世紀中葉の時期幅があり、14世紀後半～15世紀前半を中心とすると思われる。土師質土器は型式学的特徴から2群に分かれ、14世紀後半～15世紀初頭を中心とするものと15世紀前半を中心とするものの2時期が存在すると想定される。

広島湾岸の国重城跡では第1郭北側で土師質土器坏がまとまって出土した。第1郭では時期判定のできる遺物の出土はないが、第2・3郭で備前焼大甕、中国産青磁碗が出土している。備前大甕は間壁編年Ⅳ期で、青磁碗は底部のみで型式不明（上田分類E類かもしれない）であるが、15世紀以降に位置づけられる。土師質土器については備前焼を根拠に15世紀代の年代を考えておきたい。

以上、出土状態にもとづいて共伴遺物から土師質土器の年代について検討した。次節の分析に備えて、西条盆地および広島湾岸の年代ごとの資料についてまとめておきたい。西条盆地においてもっとも古い時期に位置づけられるのは、道照遺跡（市）S D 002・003、石佛遺跡窯跡、鏡西谷遺跡C地区S B 01で、12世紀末～13世紀前葉に位置づけられる。中でも鏡西谷遺跡C地区S B 01は基準となる一括資料で、13世紀初頭を前後する時期である。道照遺跡（市）S D 002・003では白磁碗を含み、土師質土器碗を伴うなどやや古い様相である。石佛遺跡もほぼ時期と考えられる。鏡西谷遺跡C地区S B 01に先行する12世紀後葉の様相と捉えておきたい。このほかに13世紀代に位置づけられる資料は鏡西谷遺跡D地区S K 07、道照遺跡（県）S B 10、同S E 4がある。共伴の瓦器からすると、鏡西谷遺跡C地区S B 01と同時期に位置づけられる可能性があるが、S B 10出土の土師質土器坏・皿の組成は鏡西谷遺跡C地区S B 01の組成とは異なり、後出的様相を示す。出土状況から一定の時期幅が想定され、13世紀の中で捉えておきたい。S E 4は一括性にやや問題があるが、瓦器は13世紀初頭を前後する時期であり、土師質土器坏も鏡西谷遺跡C地区S B 01と共通した形態であることから基本的に同時期とみなすことができる。

14世紀代に位置づけられる資料は、道照遺跡（県）S X 23、浄福寺3号遺跡S B 3、同S B 6、中屋遺跡B地点S K 04、同S K 31、同S K 34、時宗遺跡S B 2、同S B 3、同P 19、狐が城跡S K 12、鏡千人塚遺跡S K 15がある。道照遺跡（県）S X 23、中屋遺跡B地点S K 04、同S K 31、同S K 34、時宗遺跡P 19は一括性の高い資料で、土師質土器坏・皿の組成を考える際に基準となる。道照遺跡（県）S X 23はおおよ

そ 14 世紀前半に位置づけられる資料である。同遺跡の S X 24・25 も一括資料で、土師質土器坏・皿の組成は S X 23 とおおむね共通し、同時期に位置づけられよう。中屋遺跡 B 地点 S K 31・S K 32 は 14 世紀後半に位置づけられる。同遺跡 S K 04 の土師質土器坏の法量は S K 31・32 とほぼ共通するが、形態や調整が異なる。S K 04 は道照遺跡（県）S X 23 に共通した形態で、S K 31・32 に先行すると考えられる。時宗遺跡 P 19 に隣接する S B 2、同 S B 3 は 13 世紀末～14 世紀前半の幅の中で捉えられる資料である。P 19 出土の土師質土器坏は S B 2・3 に比べると法量がやや小型化しており、後出的である。14 世紀後半を前後する時期として捉えておきたい。狐が城跡 S K 12 は 14 世紀前半を中心とする時期の資料である。鏡千人塚遺跡 S K 15 は年代の推定できる共伴遺物はないが、道照遺跡（県）S X 23 と共通した様相を示しており、14 世紀前半を中心とする時期に位置づけたい。

上条遺跡では一括遺物は得られていないが、出土の陶磁器類から 14 世紀後半～15 世紀前半を中心とする遺跡と考えられる。土師質土器は外面を比較的平滑に仕上げる一群と顕著な回転ナデ調整を施す一群とが認められる。前者は道照遺跡（県）S X 23、狐が城跡 S K 12 などと共通した形態組成を認めることができ、後者に先行するものとみられる。しかし、道照遺跡（県）、狐が城跡に比べると器高が縮小化しており、おおむね器壁も薄く仕上げられ、道照遺跡（県）S E 35 と共通する要素がある。14 世紀後半～15 世紀初頭と捉えておきたい。後者は前者に後続することから 15 世紀前半を中心とする年代を考えておきたい。

15 世紀に位置づけられる資料は、城仏土居屋敷遺跡 I 期、同 II 期、山崎 1 号遺跡 S K 2、薬師城跡 S D 1 下層がある。山崎 1 号遺跡は一括資料であるが、共伴の中国産青磁は土師質土器の年代を示すものではない。土師質土器は大内式を模して製作された在産と考えられる。大内Ⅲ A 2～3 式に対比され、15 世紀後半に位置づけられるものと想定される。薬師城跡 S D 1 下層も良好な一括資料である。共伴遺物はないが、土師質土器の形態的特徴から城仏土居遺跡 I 期に対比され、15 世紀前半を中心とするものと想定される。城仏土居屋敷遺跡 I 期、同 II 期は、前者が 15 世紀前半を中心とする時期、後者が 15 世紀後半を中心とする時期に位置づけられ、土師質土器は比較的均質な様相を示している。

16 世紀に位置づけられる資料は、山崎 1 号遺跡 S K 1、同 S D 1、薬師城跡 S D 1 上層、同 S E 2、同 S B 1 がある。山崎 1 号遺跡 S K 1、薬師城跡 S E 1、同 S B 1 は良好な一括資料で、薬師城跡 S D 1 もまとまりのよい資料である。山崎 1 号遺跡 S K 1 は

共伴遺物はないが、京都系土師器模倣品があり、16世紀前半に位置づけられる。山崎遺跡SD1の土師質土器はSK2より小型化するなど後出的な様相を示していることからSK1と同じく16世紀前半に位置づけておきたい。薬師城SD1上層は下層の年代、後続遺構の年代などから15世紀末～16世紀前半と捉えておきたい。薬師城跡SE2はSD1に後続する遺構で、16世紀前半、SB1は16世紀後半～後葉に位置づけられる。

広島湾岸では、12世紀後葉～14世紀前葉は、菩提院遺跡が基準資料である。第V遺構面は12世紀後葉、第IV遺構面は12世紀末～13世紀前半、第III遺構面は14世紀前半で、土師質土器の組成、共伴遺物ともに良好である。

14世紀後半以降は良好な一括資料を欠いており、一部の一括資料による組成の復元と大まかな年代位置づけによって検討せざるを得ない状況である。14世紀後半は、三ツ城跡、恵下城跡、14世紀後半（後葉）～15世紀前葉に横山城跡第I期、国重城跡、15世紀代～16世紀前半（前葉）に北谷山城跡、有井城跡を位置づけておきたい。

2) 安芸地方における土師質土器皿・坏類の組成と変遷

本節では、西条盆地、広島湾岸を中心に、土師質土器坏・皿の組成とその変化について検討してみたい。検討に先立って、坏および皿の分類について触れておく。坏は口径を中心にI類とII類に大きく2種類に区分する。坏I類は口径10.1～13.0cmを主体とし、やや小型で、坏II類は口径13.0～14.0cmを主体し、15.0cm以上のものを含んでいる。坏II類は口径に対する器高の割合が小さい。器高比0.25以下に位置するものが多く、皿に近い形態である。坏I類は底部付近の形態が内彎あるいは内彎気味に体部に向かって開き、底面と底部側面の境界が不明瞭なもの（a類）と底部付近が直線的に開き、底面と底部側面の境界明瞭なもの（b類）に細分する。坏II類についても同様の基準でa類とb類に細分する。さらに、坏I a類は、口径に対して器高が高く、深い形態（1類）と器高が低く浅い形態（2類）に細分する。両者の区分は器高比（器高／口径）0.3を目安とする。坏I b類についても同様の基準で、1類と2類に細分する。

皿は、坏同様、口径を中心にI類とII類に大きく2種類に区分する。I類は口径7.0～8.0cmを主体とするもの、II類は口径10.1cmより大きいものである。皿I類は底部付近の形態をもとに2種類に細分する。皿I a類は底部付近が内彎あるいは内彎気味に体部に向かって開き、底面と底部側面の境界がやや不明瞭なもので、皿I b類は底部付近が直線的に開き、底面と底部側面の境界が明瞭なものである。

以下、5期に区分して、土師質土器坏、皿および埴の組成変化を中心に検討する。第Ⅰ期は土師質土器出現・確立期で、第Ⅱ期は埴の消滅と坏Ⅱ類、皿Ⅰ類を主体とする組成の成立期、第Ⅲ期は坏の組成主体が坏Ⅱ類へ移行する時期、第Ⅳ期は皿の出現期、第Ⅴ期は皿が組成の主体となる時期である。

まず、西条盆地の土師質土器坏・皿類の組成と変遷について検討する（第18図）。

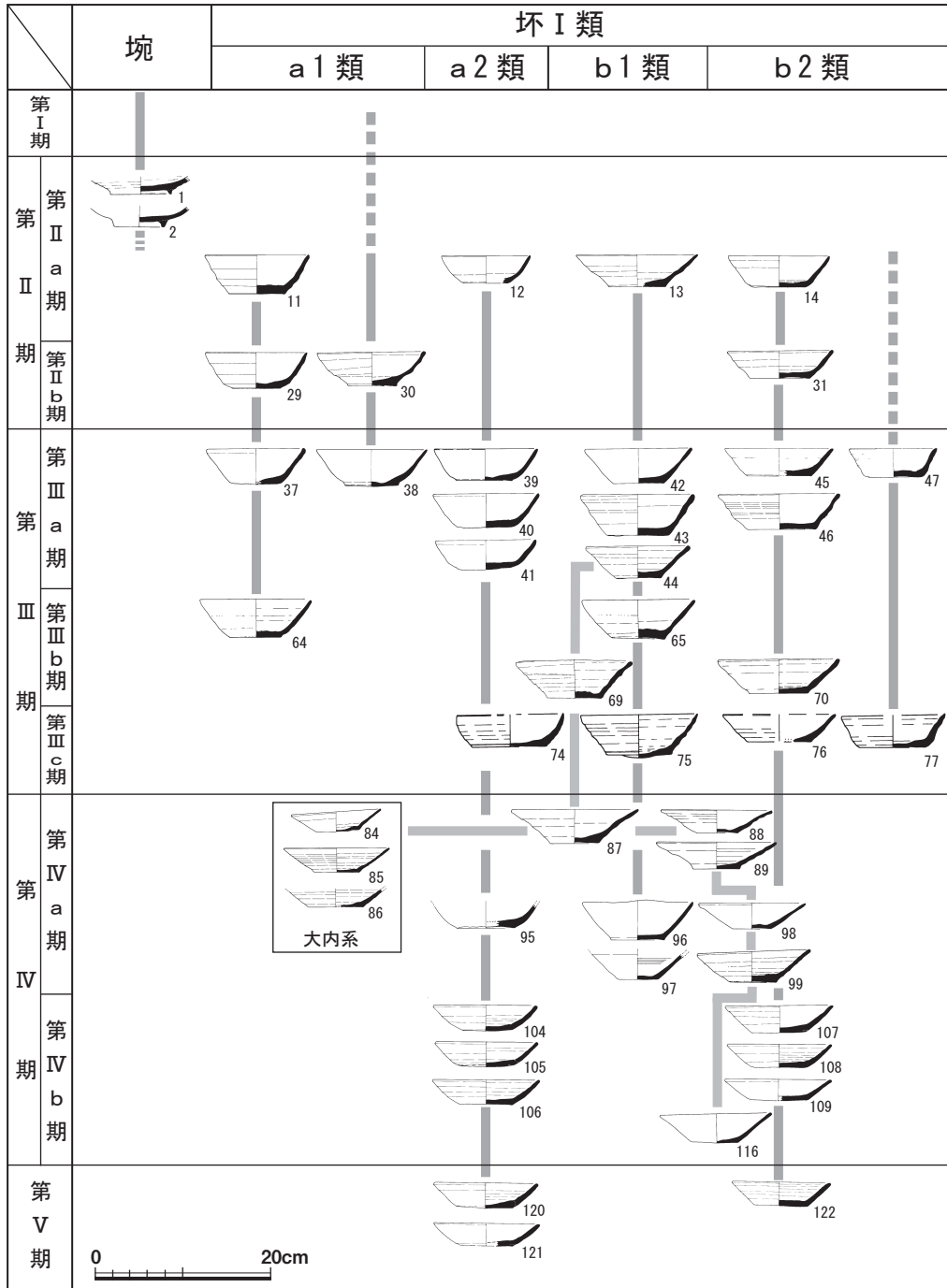
第Ⅰ期 12世紀中葉以前を包括した時期である。安芸地域の中世初期の様相はほとんど不明であるが、仮に11世紀中葉～12世紀中葉を第Ⅰ期として設定しておきたい。第Ⅱ期との年代区分は、第Ⅱ期初頭の資料が十分検討できる状況ではないので、一部年代的重複がある。中世初頭の遺跡としては、小越窯跡（青山1983）、旦原窯跡（伊藤1983）があり、須恵質の埴・皿が生産されている。埴は回転糸切り底に、貼り付け高台を持つものが大半を占め、無高台のものや皿は少量である。年代的には11～12世紀に位置づけられている（吉野2012a）。鏡西谷遺跡C地区SB01などで小越・旦ヶ原系須恵器の出土が確認できることから12世紀初頭までは生産が続けられたと考えられる。基本的に形態、製作技術などが共通する土師質土器埴が第Ⅱ期初頭の道照遺跡（市）SD002・003から出土していることから、第Ⅰ期では土師質土器は埴、坏、皿の組成であった可能性がある。

第Ⅱ期 年代は12世紀後葉～13世紀を想定している。底部切り離しは回転糸切りが基本で、第Ⅱ期を通じて変化はない。2小期に区分できる。第Ⅱa期は鏡西谷遺跡C地区SB01が基準資料であり、鏡西谷遺跡F地区SB01も同時期である。坏Ⅱ類、皿Ⅰ類を主要な組成とし、坏Ⅰ類が少量伴う。坏Ⅱ類はⅡa類を主体に、Ⅱb類が一定量組成している。坏Ⅰ類は一括資料としての検出例はないが、a1類、a2類、b1類、b2類が少数ながら存在するものと思われる。皿Ⅰ類はa類、b類ともに安定して存在し、多様な形態が認められるが、いずれも浅い。坏・皿ともに底部回転糸切りを基本とし、体部の外面を中心に強い回転ナデ調整により明瞭な稜線を残すものが多い。鏡西谷遺跡C地区SB01に先行する道照遺跡（市）SD002・003は埴、坏Ⅱa類、皿Ⅰ類を主体とする。出土点数が少ないので、本来の組成は不明であるが、埴が伴うことを除くと、組成、調整法ともに鏡西谷遺跡C地区SB01と共通する。埴は軟質の須恵器とは異なり、土師質土器として生産されたと考えられる。小越・旦ヶ原系須恵器との関係の解明は今後の課題であり、生産体制や生産量はまったく不明であるが、小越・旦ヶ原系須恵器は埴を中心に生産していることからすると、両者に何らかの関係があると見るべきであろう。いずれにせよ、従来から指摘されている（鈴木1995）

ように、第Ⅱ期初頭以降は埴は組成に含まれない。

第Ⅱb期は13世紀後半を主体とする時期であるが、まとまった資料は知られていない。鏡西谷遺跡D地区SK07がこの時期に位置づけられる。道照遺跡(県)SB10は共伴の瓦器からすると鏡西谷遺跡C地区SB01と同時期であるが、土師質土器は口径の縮小が認められ、編年的には後続するものと考えられる。鏡西谷遺跡D地区SK06は法量や一部の埴Ⅰ類の形態などが道照遺跡(県)SB10と共通し、第Ⅱ期後半に位置づけておきたい。第Ⅱb期の埴・皿の組成は、埴Ⅰ類、Ⅱ類、皿Ⅰ類が存在するが、組成比は不明である。埴Ⅰ類はa1類、b2類が認められる。a1類では底径比(底径/口径)が小さく、体部が強く内彎する形態(第18図30、以下第18図を省略)が特徴的に存在する。埴に系譜をもつものと思われるが、現状では第Ⅱa期以前で類例が確認できない。皿Ⅰ類a類、b類が認められる。

第Ⅲ期 14世紀を中心に、13世紀末～15世紀前半の年代を想定している。15世紀代は前葉に主体があると想定しているが、年代についてはさらに検討が必要である。埴Ⅰ類を主体とする組成に変化し、埴Ⅰ類のうち、深さの深いa1類やb1類が特徴的に存在する時期である。底部切り離しは第Ⅲ期を通じて回転糸切りを基本とする。第Ⅲ期は3小期に細分できる。第Ⅲa期は14世紀前半を中心とする時期で、道照遺跡(県)SX23、狐が城跡SK12、鏡千人塚遺跡SK15を基準資料とし、埴の形態や組成から浄福寺3号遺跡SB3もこの時期に位置づけられる。埴Ⅰ類、皿Ⅰ類を主体とする組成で、埴Ⅱ類が伴う。埴Ⅱ類は口径13cm代が中心で、14.0cmを超えるものは見られない。埴体部外面を中心に強い回転ナデ調整により明瞭な稜線を残すもの(鏡千人塚遺跡SK15)と比較的平滑に仕上げるもの(道照遺跡(県)SX23など)が認められる。埴は埴Ⅰ類を主体とし、埴Ⅰ類は、a1類、a2類、b1類、b2類の各形式が認められる。器高比0.3以上のものが主体を占め、全般的に深い形態が多い。第Ⅱ期に比べると、底径比が大きくなる傾向があるが、a1類の埴に系譜をもつ形態(38)やb1類は底径比が小さく、逆にb2類の中には底径比が極端に大きく、体部が直立気味の形態(47)がある。埴Ⅰ類の組成を詳細に見ると、遺跡や遺構単位で主体となる形式が異なっている。例えば、道照遺跡(県)SX23ではb1類が主体であるが、同SX25ではa1類、a2類、b1類の各形式が少量ずつ認められ、狐が城跡ではa1類を主体とするなどである。入手先や入手単位の相違に基づくものと理解しておきたい。埴Ⅱ類はa類、b類ともに認められ、口径が縮小しているが、器高は第Ⅱ期とほぼ同じであるため、やや深い印象を受ける。埴Ⅰ類同様の体部が直立気味の形態(54)が



第 18 図 西条盆地における土師

(1・9. 道照遺跡 (市) SD002、2～8・10. 道照遺跡 (市) SD003、11・12. 鏡西谷遺跡 F 地区 SB01、13～28. 鏡西谷遺跡 C 跡 (県) SX25、38・39. 狐が城跡 SK12、40・55～58. 道照遺跡 (県) SX24、42・63. 道照遺跡 (県) SX23、45・47・51・64・65. 中屋遺跡 B 地点 SK04、66～68. 道照遺跡 (県) SE35、69～73. 中屋遺跡 B 地点 SK31、74～83. 上条遺跡第 1 郭、遺跡 SK2、104～114. 薬師城跡 SD1 上層、115. 山崎遺跡 SK1、116～119. 薬師城跡 SE2、120～131. 薬師城跡 SB1)



質土器坏・皿類の組成変遷図

地区SB01、29.鏡西谷遺跡D地区SK07、30・31.鏡西谷遺跡D地区SK06、32～36.道照遺跡(県)SB10、37・41.道照遺跡53・54.浄福寺遺跡SB3、43・44・46・49・50.鏡千人塚遺跡SK15、48・59～62.狐が城跡第1郭2の段、52.狐が城跡第2郭、84～86.鏡山城跡がら地区、87～94.城仏土居屋敷遺跡I期、95～98・103.城仏土居屋敷遺跡II期、99～102.山崎1号

ある。皿Ⅰ類はa類、b類ともに安定して存在し、多様な形態が認められる。浅いものとやや深いものの2種類がある。

第Ⅲb期は14世紀後半を中心とする時期で、道照遺跡SE35、中屋遺跡B地点SK04、同SK31・32が基準資料である。坏体部外面を中心として強い回転ナデ調整により明瞭な稜線を残すもの（中屋遺跡B地点SK31・32など）と比較的平滑に仕上げるもの（道照遺跡（県）SE35）が認められる。組成全体を示す良好な資料を欠いており、出土資料は坏を主体としている。坏Ⅰ類、皿Ⅰ類を主体とする組成と想定される。坏Ⅰ類はb1類を主体に、b2類が伴う。a1類も認められるが、体部の内彎度が小さく、b1類と類似する形態である。皿はa類、b類が存在すると想定されるが、詳細は不明である。中屋遺跡B地点SK31・32は器高が縮小傾向にあり、時間的には同SK04に後続する可能性が高いが、近接した年代であろう。b1類を主体とし、底部～体部が大きく外反する形態である（69）。

第Ⅲc期は15世紀前葉を主体とする時期である。一括資料ではないが、上条遺跡第1郭出土の強い回転ナデ調整を施す一群（74～83）をあてることができる。坏Ⅰ類を主体とする組成で、坏Ⅱ類、皿Ⅰ類を伴う。坏Ⅰ類はa2類、b2類を主体とする。体部が直線的に開く形態も存在するが、直立気味の形態（74・77）が主体である。坏Ⅱ類はa類が少量伴う。皿はa類、b類ともに認められ、坏同様に体部が直立気味の形態が主体である。

第Ⅳ期 15世紀～16世紀前半を中心とする時期を想定している。坏・皿において器高が大きく縮小する時期で、組成に皿が加わる。また、大内式の影響を強く受ける時期である。底部回転糸切りを基本とするが、板目調整やナデ調整を施すものが散見される。第Ⅳ期は2時期に細分することができる。第Ⅳa期を中心に底径比0.4以下で、体部が大きく開く形態の坏が認められ、薄手で内外に強い回転ナデ調整による稜線を残している。大内式の影響下に成立したものと想定される。第Ⅳa期は15世紀～16世紀初頭を中心とする時期で、城仏土居屋敷遺跡Ⅰ期、同Ⅱ期、山崎1号遺跡SK2を基準資料とする。城仏土居屋敷遺跡Ⅰ期は、坏Ⅰ類を主体とする組成で、坏Ⅱ類、皿Ⅰ類が一定量伴う。坏Ⅰ類はb2類を主体とし、b1類が伴う。底径が小さく体部が開く形態で、体部～口縁部は直線的な形態が主体であるが、大きく外彎するもの（87～89）が特徴的に認められる。坏Ⅱ類は坏Ⅰ類と基本的には同様の形態であるが、底径比がやや大きい。坏は全体にやや薄手の作りで、外面を中心に回転ナデ調整による稜線が顕著で、間隔の狭いものが多い。大内式の影響の元に成立したものと

想定される。形態や調整に類似点があるが、胎土や焼成状況、個別資料に見られる製作技術の相違は明瞭である。皿はb類が認められる。後続する城仏土居屋敷遺跡Ⅱ期、山崎1号遺跡SK2も基本的な組成に変化はないが、器高の縮小化が進んでおり、坏の皿化が進行している。坏Ⅰ類を主体とするが、坏Ⅱ類の割合が再び増加傾向にあり、皿Ⅱ類が組成に加わる。山崎1号遺跡SK2出土資料は白色系の胎土で、薄手で焼成も良好なものが多い。大内式に近い形態および製作技術を有している。大内式を目にすることができた製作者によるものと思われる。城仏土居屋敷遺跡Ⅱ期では坏Ⅰ類にa2類、b1類が認められる。大内式の影響下に成立した坏・皿とは形態を異にしており、前代の在地土師質土器に系譜を持つものと考えられる。

第Ⅳb期は16世紀前半を中心とする時期で、薬師城跡SD1上層、同SE2、山崎1号SK1を基準資料とする。薬師城跡SD1では坏Ⅰ類、皿Ⅰ類を主体とする組成で、坏Ⅱ類を欠く。形式の組成は大きく異なることはないが、大内式の影響により成立した形態は認められない。坏Ⅰ類はa2類、b2類からなり、器高比0.25以下の皿に近い形態を主体としている。第Ⅳa期の坏に比べるとやや厚手である。皿Ⅰ類はa類である。口径7.0～8.0cmのものと口径9.0～10.0cmのやや大型品が組成している。坏・皿ともに第Ⅲ期の在地土師質土器に系譜をもつものと理解されるが、法量的には第Ⅳ期の中で理解できるものである。一方、山崎1号遺跡SK1では京都系土師器(115)の模倣品と大内式類似の皿(110)が出土している。薬師城跡SE2でも大内系類似の坏Ⅰb2類、皿Ⅰb類が出土しており、第Ⅳb期においても大内式の影響下で成立した坏・皿が利用されていることを確認することができる。

第Ⅴ期 16世紀後半を中心とする時期を想定している。皿Ⅱ類が組成の中に定着する時期である。薬師城跡SB1を基準資料とする。坏Ⅰ類、皿Ⅰ類、皿Ⅱ類を主体とする組成で、坏Ⅱ類がわずかに伴う。坏Ⅰ類はb1類を主体とする。第Ⅳb期の薬師城跡SD1の様相と共通する要素も多いが、皿Ⅱ類が組成の重要な要素となっている。16世紀後葉には皿Ⅰ類、皿Ⅱ類を主体とする組成へ移行する可能性が高いことから、第Ⅴ期前半の様相である可能性が高い。

次に広島湾岸の様相について検討する。広島湾岸についても土師質土器坏・皿の組成の変遷を大きく5期に区分することができる(第19図)。

第Ⅰ期 土師質土器の出現・確立期で、西条盆地同様に、11世紀中葉～12世紀中葉の年代を想定しておきたい。埴、坏Ⅱ類、皿Ⅰ類を主体すると推定されるが、該当する資料を指摘できない。

第Ⅱ期 12世紀後半～13世紀を中心とする時期で、第Ⅱa期は坏Ⅱ類、皿Ⅰ類を主体とする組成であるが、第Ⅱb期の様相は不明である。西条盆地と同様に、塚が欠落している。菩提院遺跡第Ⅴ遺構面、同第Ⅳ遺構面を基準資料とする。菩提院遺跡以外では、畝観音免第1号古墳（河瀬編著1979）などがある。第Ⅴ遺構面、第Ⅳ遺構面とも坏Ⅱ類、皿Ⅰ類を主要な組成とする点では共通するが、調整技術など、細部では様相が異なる。第Ⅴ遺構面では底部切り離しは回転糸切りを基本とするが、一部に回転ヘラ切りが認められる。坏は外面は強い回転ナデ調整により稜線を残すものが主体である。坏Ⅱ類、皿Ⅰ類のほか、坏Ⅰ類が少量伴う。坏Ⅰ類はa2類、b2類である。皿Ⅰ類はa類、b類があり、b類は体部が直立気味で、蓋状を呈する。第Ⅳ遺構面では底部切り離しが回転糸切りとともに回転ヘラ切りが多く認められる。坏では半数以上が回転ヘラ切りであるが、皿は回転糸切りの割合が高い。坏Ⅱ類、皿Ⅰ類の組成である。坏Ⅱ類はa類とb類が認められ、個体差が大きい。皿Ⅰ類はa類とb類があり、第Ⅴ遺構面と基本的に形態、組成ともほぼ同じである。

第Ⅲ期 14世紀～15世紀前葉を中心とする時期で、坏の組成の主体がⅡ類からⅠ類へ変化する。また、坏Ⅰ類は深さが深い形態が多い。3小期に区分される。第Ⅲa期は14世紀前半を中心とし、菩提院遺跡第Ⅲ遺構面を基準資料とする。恵下城跡もこの時期に位置づけられる。坏Ⅰ類、坏Ⅱ類、皿Ⅰ類の基本組成とする。底部切り離しは回転糸切りと回転ヘラ切りが認められ、ほぼ同等の割合である（ナデ消すものが一定量あり、切り離し不明である）。坏Ⅰ類はa2類を主体とし、a1類、b1類が一定量伴う。基本的には深さの深いa1類、b1類と浅いa2類の組み合わせである。a1類には底部が彎曲し、口縁部がわずかに外彎する形態があり、西条盆地の狐が城跡で指摘したように、塚に系譜が辿れる可能性があるが、現状では、第Ⅱ期に先行形態を見出すことができない。

第Ⅲb期は14世紀後半を中心とする時期で、三ツ城跡第1郭1号建物跡および第1号建物西側斜面を基準資料とする。坏Ⅰ類、皿Ⅱ類を主体とする組成で、坏Ⅱ類がわずかに伴う。坏Ⅰ類はa2類を主体とし、a1類、b1類、b2類が認められる。a2類、b類も器高がやや高いものが多いが、基本的には深さの深いa1類、b1類と浅いa2類、b2類の組み合わせである。皿Ⅰ類はb類のみである。底部切り離しは回転糸切りを基本とし、第Ⅲ期を通じて変化はない。

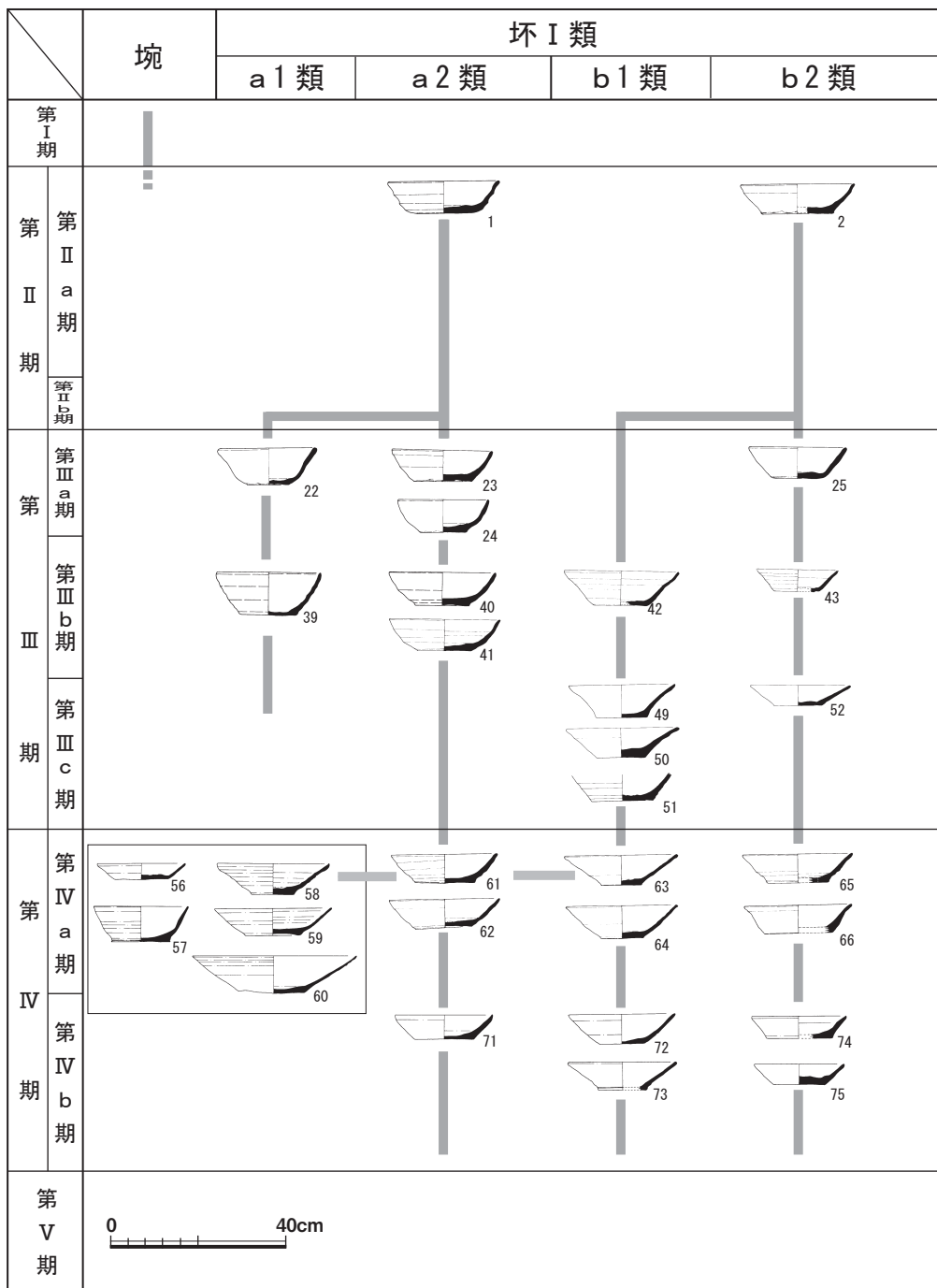
第Ⅲc期は14世紀後葉～15世紀前葉を中心とする時期で、国重城跡を基準資料とする。坏Ⅰ類を主体とし、皿Ⅰ類が伴う。皿Ⅰ類が組成すると想定されるが、詳細は

不明である。坏Ⅰ類はb1類で、体部が大きく外彎する形態が特徴である。

第Ⅳ期 15世紀～16世紀前半を中心とする時期で、坏の器高が大きく縮小し、坏の皿化が進行するとともに、組成に皿Ⅱ類が加わる時期である。底部回転糸切りを基本とする。有井城跡第1郭1号土坑で一括資料が得られているが、詳細な時期比定ができる状況ではない。この他に第Ⅳ期に位置づけられる資料は、北谷山城第1郭3号建物、同第2郭3号柱穴群、有井城跡第2郭2区などが比較的型式学的にまとまりのある資料だが、いずれも15世紀、あるいは15世紀～16世紀前半の幅の中でしか捉えることができない。北谷山城跡第1郭3号建物、同第2郭3号柱穴群は坏Ⅰ類を主体とするが、第Ⅲc期の国重城跡に比較すると、器高が縮小しており、後出的様相である。坏Ⅰa2類、Ⅰb2類を主体とする組成である。西条盆地では大内式類似品が主体的であり、底径比0.4前後で器高がやや高く体部が大きく開く形態は西条盆地第Ⅳa期の城仏土居屋敷Ⅱ期に対比でき、大内Ⅲ式の中にも類似品がある。15世紀後半を中心とする時期を想定しておきたい。有井城跡第1郭1号土坑、第2郭2区は北谷山城跡に比較してさらに器高が縮小していることから新しい時期に編年できるものと思われる。15世紀末～16世紀前半の年代を想定しておきたい。

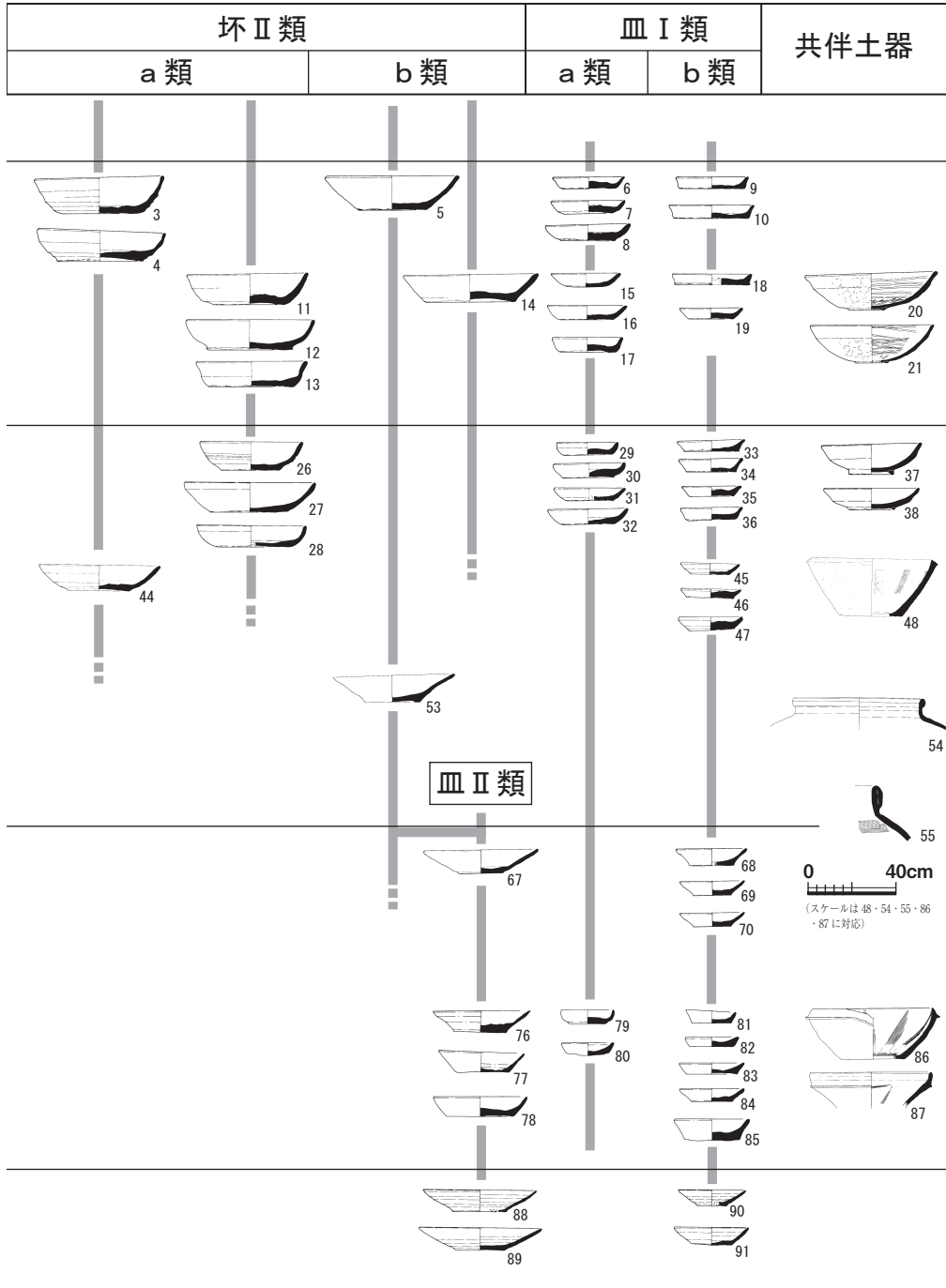
上記の北谷山城跡を第Ⅳa期、有井城跡を第Ⅳb期として様相をまとめておくと、第Ⅳa期は坏Ⅰ類、皿Ⅰ類を主体とする組成で、皿Ⅱ類が伴う。Ⅰ類はa2類、b2類が主体で、b1類が伴う。b1類は底径比が小さく、体部が直線的で大きく開く形態である。皿Ⅰ類はb類である。坏Ⅰb類および皿Ⅰb類は薄手のものを中心とする。第Ⅳb期は坏の皿化が進行しており、坏Ⅰ類、皿Ⅰ類を主体とした組成である。抽出した資料の中には皿Ⅱ類はないが、遺跡全体としては大型の皿Ⅱ類が出土しており、本来組成に含まれるものであろう。坏Ⅰ類はa2類、b1類、b2類があり、口径、器高ともに縮小している。皿Ⅰ類はa類、b類ともに認められるが、b類を主体とする。口径7.0～8.0cm程度の法量を主体とし、口径9.0～10.0cmのやや大型品が存在する。

第Ⅳ期の西条盆地では、大内式に影響を受けた坏、皿が主体となる時期であるが、広島湾岸ではまとまった資料はない。しかし、有井城跡では第2郭を中心に大内式類似の土師質土器(56～60)が出土している。このほかにも一括資料としては抽出できないが、池田城跡(奥田・中村編著1986)などいくつかの山城跡で散見する。西条盆地ほどではないにせよ、大内式の影響を受けた土器が一定量製作されているものと想定される。また、第Ⅳ期の坏、皿は前段階の形態から連続的な変化として系譜を追うことができると同時に、薄手で底径比が小さく、体部が直線的に開く形態の坏、



第 19 図 広島湾岸における土師

(1 ~ 10. 菩提院遺跡第 V 遺構面、11 ~ 21. 菩提院遺跡第 IV 遺構面、22 ~ 38. 菩提院遺跡第 III 遺構面、39・40. 三ツ見城跡)



質土器坏・皿類の組成変遷図

城跡、41～48. 恵下城跡、49～55. 国重城跡、56～60・71～87. 有井城跡、61～70. 北谷山城跡、88～91. 月

皿などがあり、一定の割合で大内式からの影響を受けていると想定される。

第Ⅴ期 16世紀後半を中心とする時期で、皿を主体とする組成に変わる時期である。皿Ⅰ類、皿Ⅱ類を主体とすると想定される。月見城跡（藤田編著1987）出土資料などにこの時期の土師質土器を見出すことができるものの、一括資料を得られておらず、詳細は不明である。西条盆地のように坏Ⅰ類と皿Ⅰ類、皿Ⅱ類を経て、皿を主体とする組成に変化するのかどうかは今後の資料蓄積を俟って検討したい。

沼田川下流域、芸北地域については、中世全体を対象とした坏、皿の組成変化を考察できる状況にはないが、沼田川下流域の様相について簡単に触れておきたい。沼田川下流域では、三太刀遺跡と俵崎城跡出土資料を取り上げて検討した。13世紀後葉～16世紀に位置づけられるもので、連続的ではないにせよ、中世前期後半以降の大まかな変遷を辿ることができる。三太刀遺跡S E 1（13世紀末～14世紀前葉）は上下層で時間差をもつが基本的に1時期の様相と捉えられる。坏Ⅰ類、皿Ⅰ類を主体とする組成で、坏Ⅱ類が伴う。坏Ⅰ類はb1類、b2類を主体とする。S X 1（14世紀前葉）はS E 1と基本的な組成は同じであるが、一般的に口径の縮小化が認められ、坏Ⅱ類では、器高の縮小化も観察でき、後出的様相である。遺構の切り合い関係、共伴の吉備系土師質土器の型式とも符号している。S D 11（14世紀前葉～中葉）は坏Ⅰ類、皿Ⅰ類を基本的な組成とし、坏Ⅱ類は組成に含まれていない。三太刀遺跡では和泉型瓦器塚の出土からS E 1に先行する13世紀代に広く遺構が形成されていたことは疑いないが、良好な一括資料は得られていない。断片的ではあるが、S B 3で坏Ⅰ類、皿Ⅰ類の組み合わせを確認することができる。坏Ⅰ類はいずれもb2類である。共伴の瓦器塚から13世紀中葉の年代が想定でき、13世紀中頃にはすでに坏Ⅱ類を主体とする組成から坏Ⅰ類を主体に移行しているのかもしれない。いずれにせよ、14世紀前半には坏Ⅰ類、皿Ⅰ類を主体とし、坏Ⅱ類が伴う組成が成立しており、14世紀中葉には坏Ⅱ類が欠落する可能性がある。13世紀後半を含む14世紀前半の組成は西条盆地や広島湾岸と同様の動きであり、14世紀中葉の坏Ⅱ類の欠落は備後南部の様相にも通じる。各時期を通じて、底部切り離しは回転糸切りが主体であるが、回転ヘラ切りによるものも一定量認められ、ナデ消しや板目調整を施すものも一般的に認められる。

俵崎城跡で取り上げた資料は15世紀～16世紀前半に位置づけられるものだが、現状では詳細な時期を確定できない。15世紀代のS K 33と15世紀後半～16世紀前半のS B 1、S X 7、S D 2の大きく2時期に区分される。S K 3では坏Ⅰ類、坏Ⅱ類、

皿Ⅰ類の組成である。大半は比較的薄手で、内外を平滑に仕上げるものであるが、坏Ⅰ類に安芸地方南部で一般的な形態（厚手で、外面は強い回転ナデ調整により稜線が明瞭に残るもの）が組成している。SB1、SX7、SD2は皿Ⅰ類、皿Ⅱ類を主体とする組成で、坏Ⅰ類が少量伴っている。各時期を通じて、底部切り離しは回転糸切りと回転ヘラ切りの両者が一定量認められ、ナデ消し調整のため切り離し痕が不明なものも多い。板目調整を施すものが一般的に認められる。依崎城跡の様相からすると、16世紀初頭には皿を主体とする組成に移行している可能性がある。瀬戸内海に位置し、交通の要衝であることから沼田川下流域の様相として一般化できるかどうかはさらに資料の増加を俟って検討する必要がある。

3) 土師質土器坏・皿類から見た安芸地方の地域性

これまで、安芸地方南部を中心に土師質土器坏・皿類の組成を中心に変遷を概観した。これまで指摘されているように、安芸地方では中世の早い段階（13世紀初頭）に碗が欠落し、坏、皿の組み合わせが成立している。中世後期後半まで基本的な組成であり、16世紀代に皿を主体とする組成に変化した。坏の組成はⅡ類を主体とするものからⅠ類を主体とするものへ変化しており、その時期は現状では十分明らかにできないが、13世紀中頃～13世紀後半が移行期と想定される。14世紀代は器高比0.3以上の深さの深い形態が特徴的に存在する。14世紀後半以降、器高の減少化傾向が始まり、15世紀には坏の皿化が急速に進行している。こうした組成および形態変化は、現状では詳細に跡づけることはできないが、基本的に芸北地域でも同様の変化をしているものと想定される。安芸地方同様に、碗が中世の早い段階に消滅する長門・周防地方もおおむね同様の傾向である（北島2010）。

このように安芸地方での土師質土器坏・皿の組成、形態変化は傾向としてはおおむね一致しているといえるが、変化の始まりについては小地域ごとで異なっている可能性がある。皿は第Ⅳ期（15世紀前半）には出現しているが、西条盆地では一定量を組成するのは第Ⅴ期（16世紀後半以降）であり、第Ⅳb期（16世紀前半）では皿に近い器高比0.21～0.25の坏Ⅰ類が主体である。広島湾岸では組成全体を見渡せる良好な一括資料を欠くため、坏、皿の量比は明らかにできないが、西条盆地に比べると、第Ⅳ期（15世紀～16世紀前半）における皿の割合がやや高いように思われる。西条盆地に比較すると、皿が一定量組成する時期は少し早く、第Ⅳb期には成立しているかもしれない。逆に西条盆地では第Ⅴ期でも坏が一定量利用されており、完全には皿主体の組成に移行していない。また、現状で組成を確認できる資料に限ると、広島湾

岸では第Ⅲb期以降、坏Ⅱ類の組成割合が極端に減少しており、第Ⅳ期では確認できない。広島湾岸では、第Ⅳb期以降の調査遺跡は基本的に中・小規模の山城跡を中心としていることとも関連している可能性があるが、すでに第Ⅳ期には皿が組成に一定量含まれる可能性があることに関連するのかもしれない。

大内式との関係も地域により様相が異なる。西条盆地では大内氏の安芸地方南部における拠点である鏡山城跡東ががら地区で大内式が出土している。第Ⅳa期の遺跡では大内式の影響を受けて製作されたと考えられる坏、皿が主体となっている。形態、胎土、調整を指標としてみると、大内式との類縁度は遺跡によって異なっており、遺跡の性格を反映しているものと思われる。これに対して、広島湾岸では大内式に一定の影響を受けていることが看取されるが、先行時期の土師質土器の系譜も辿ることができる。また、大内式類似土師質土器は山城跡全体からが出土するのではなく、特定の場所に集中する場合もあり、比較的まとまった資料がある有井城跡ではいずれも第2郭から出土している。そのほかの遺跡では出土量がきわめて少ない。対象とした資料は太田川下流域に居城を構える武田氏（分郡守護）関連の山城跡が多いことと関連しているものと推定される。

地域によっては特徴的な形態の坏や皿の形態も観察される。西条盆地の上条遺跡では坏Ⅰ類、皿Ⅰ類を主体とする組成に、坏Ⅱ類が伴うが、底径比0.6以上で底径が大きく、やや厚手で、体部が直立気味の形態が形式を越えて主体となっている。個別にみれば、類似形態が広島湾岸、沼田川下流域でも認められるが、安定した型式として認められるのは西条盆地のみである。

製作技術の特徴を見ると、底部切り離しの方法や調整に地域的な特徴を指摘できる。底部切り離しはいずれの地域でも、第Ⅱ期以降、回転糸切りを主体としているが、広島湾岸第Ⅱa期、第Ⅲa期では回転ヘラ切りによるものがかなりの割合で存在し、第Ⅲa期では約半数は回転ヘラ切りである。底部をナデ消し調整するものも多く、板目調整も一般的に行われている。池田城跡では一括資料は得られていないが、型式学的にみて、第Ⅲ期に位置づけられる坏Ⅰ類、皿Ⅰ類、第Ⅳ期に位置づけられる坏Ⅰ類、皿Ⅰ類がある。前者は大半が回転ヘラ切りで、一部に回転糸切りを認めることができる。後者は大内式類似品で、いずれも回転糸切りである。広島湾岸の瀬戸内海沿岸では第Ⅲ期までは回転ヘラ切りを主体とする製品がかなりの量流通していたものと想定される。沼田川下流域の三太刀遺跡、俵崎城跡でも回転ヘラ切りによる底部切り離しや底部ナデ消し調整、板目調整が広く認められ、小梨城跡、高崎城跡などの竹原市域

の山城出土の土師質土器でも確認することができる。地域的な様相と理解できる。備後南部では回転ヘラ切りが基本であり、沼田川下流域が隣接地域であることと関連しているであろう。一方、西条盆地では一貫して底部切り離しは回転糸切りが基本である。

共伴遺物からみると、広島湾岸、沼田川下流域では、吉備系土師質土器が出土しているが、内陸部の西条盆地では出土例がない。広島湾岸で出土したのは菩提院遺跡、畝観音面遺跡などであり、沿岸部に立地している。三太刀遺跡も沿岸から程遠くない立地である。地域的な特徴でもあるが、物資の流通拠点に関連した位置にあり、遺跡の性格によるものと思われる（永田・藤野・八幡 2011）。

6. おわりに

本稿では、広島大学東広島キャンパス出土の土師質土器坏・皿類について未報告資料を加えて資料化し、型式学的な分析を行った。さらに、西条盆地、広島湾岸、沼田川下流域、芸北地域について時期同定が可能で、坏、皿の組成が検討できる遺跡を取り上げて分析を行った。芸北地域については現状では通時的に検討できる資料がないため、安芸地方南部を中心に検討し、埴、坏、皿の組成の画期をもとに、5期に区分した。各時期の開始時期については今後さらに検討する必要があるが、おおむね同様な変化を辿ることが明らかとなった。組成や形態の変化は漸移的であるが、かなり明瞭な変化を窺うことができ、その背景について今後検討していく必要がある。そうした中で、第Ⅳ期は大内氏が安芸国に対して本格的に領国支配に乗り出した時期であり、大内式との関連と先行する在地土器の系譜を考慮しつつ、さらに検討する必要がある。本稿では上条遺跡（第Ⅲ c 期）と城仏土居遺跡（第Ⅳ a 期）を編年的前後関係に置いたが、年代的には一部重複すると考えられる。前者は在地系の土師質土器群、後者は大内式の影響下に成立した土師質土器群で、両者は同時期の二つの様相と見ることも可能である。今後の資料蓄積を俟ってさらに検討したい。

最後にいくつかの課題をあげて、まとめとしたい。第Ⅱ期は坏Ⅱ類から坏Ⅰ類へ主体が変化するが、西条盆地、広島湾岸ともに13世紀前葉～後半の良好な資料を欠いており、変化の様相を跡づけることが十分にできない。第Ⅱ b 期において漸移的に変化するのか、急速に変化するのか、第Ⅱ期と第Ⅲ期の時期区分の問題も含めて今後の資料で跡づける必要がある。

安芸地方全体を見渡すと、地域的に資料の粗密があり、本稿で中心的に分析した西

条盆地以外では十分な資料的蓄積が進んでいない。広島湾岸では第Ⅱ期以降の資料は存在するが、調査資料が山城跡に偏っており、一括資料がきわめて少ない。また、中小の山城跡を主体としており、本来の土師質土器坏・皿類の組成をどの程度反映しているのか検証する必要がある。沼田川流域では三太刀遺跡のほぼ全域が調査されており、今後13～14世紀の様相が解明されることが期待されるが、さらに15世紀代の良好な資料が蓄積されることによって地域の様相が一層明確になるものと思われる。

土師質土器の産地解明も積極的に取り組むべき課題である。一遺跡内でも製作技術や胎土などからいくつかの産地のものが搬入されていることが想定される。分析法の確立を含めて今後取り組みたい課題である。

資料実見に際して、東広島市教育委員会、三原市教育委員会、広島県教育財団、広島市未来創造財団（現広島市文化財団）、東広島市教育文化振興財団（現東広島市教育委員会出土文化財管理センター）の各機関、荒川美緒、石井隆博、伊藤実、妹尾周三、高下洋一、時元省二、中山学、向田裕始、吉野健志の各氏にお世話になった。また、文献収集について、石井隆博、中山学、吉野健志の各氏にお世話になった。記して感謝したい。

付 記

本稿は、『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』第5号に掲載した「安芸地方における土師質土器坏・皿類の研究」の後半部分として作成したものである。当初、永田千織と二人で論文作成の準備を進めていたが、永田が2014年3月末で退職し、その後諸般の事情から本稿の作成に直接携わることができなかった。本稿を作成するにあたり、永田が作成した分析用の一覧表、編年図素案（12世紀末～14世紀を中心とする）、遺跡ごと、遺構ごとの土師質土器集成図、研究抄史の下書、遺跡説明の下書（石佛遺跡、道照遺跡、浄福寺3号遺跡、溝口4号遺跡）を利用した。本稿の基本的な考え方は永田が在職中に藤野と議論し、合意した内容に基づいている。しかし、本稿の下書全般について永田が十分に検討できる状況にはなかったため、本稿における事実誤認等はすべて藤野に責任があることを明記しておく。

なお、本稿の図面作成は藤野が行い、永田、山手貴生、西口祐子が補助した。

引用・参考文献

- 青山透 1983 「小越窯跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）』広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財調査センター、40～59頁。
- 青山透編 1990 『浄福寺遺跡発掘調査報告書 浄福寺3号遺跡・浄福寺古墳群』浄福寺遺跡群発掘調査団。
- 阿部滋編 1986 『広島市東区温品所在北谷山城発掘調査報告書』広島市の文化財第34集、広島市教育委員会。
- 荒木清二編 1993 『郡山城下町遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第108集、（財）広島県埋蔵文化財調査センター。
- 石井隆博編 1987 『上条遺跡発掘調査報告書』東広島市教育委員会調査報告第11集、東広島市教育委員会。
- 石井隆博編著 2003 『志和町志和東時宗遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第38冊、（財）東広島市教育文化振興事業団。
- 伊藤健司 1983 「旦那窯跡発掘調査報告」『埋蔵文化財調査報告書』東広島市教育委員会、1～28頁。
- 伊藤公一編著 1993 『上滝川1号遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第112集、（財）広島県

埋蔵文化財調査センター。

- 稲葉瑞穂編 1993 『広島市佐伯区五日市町所在有井城跡発掘調査報告』(財)広島市歴史科学教育事業団報告書第8集、(財)広島市歴史科学教育事業団。
- 植田千佳穂 1983 「狐が城跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ)』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター、9～64頁。
- 植田千佳穂・伊藤実・佐々木直彦 1982 「千人塚遺跡」『広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告 清水奥山遺跡 東ガガラ窯跡 鏡千人塚遺跡』広島教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター・広島大学、21～57頁。
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2、日本貿易陶磁研究会、55～70頁。
- 植野浩三・太田雅慶・太田裕子・山県元編著 1978 『小梨城跡発掘調査報告書－広島県竹原市小梨町北谷平所在遺跡－』小梨城跡発掘調査団。
- 梅本健治編 1998 『千代田流通団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅲ)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第161集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 梅本健治 2003 「まとめ」『三太刀遺跡(Ⅰ) 東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第206集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、127～142頁。
- 梅本健治編著 2003 『三太刀遺跡(Ⅰ) 東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第206集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 梅本健治編 2004 『三太刀遺跡(Ⅱ) 東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』(財)広島県教育事業団発掘調査報告書第3集、(財)広島県教育事業団。
- 梅本健治編 2005 『三太刀遺跡(Ⅲ) 東本通土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(4)』(財)広島県教育事業団発掘調査報告書第10集、(財)広島県教育事業団。
- 恵谷泰典編 2005 『八本松飯田8丁目城仏土居屋敷遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第45冊、(財)東広島市教育文化振興財団。
- 太田雅慶・田邊英男・脇坂光彦ほか 1986 『高崎城跡発掘調査報告』竹原市教育委員会。
- 岡田博 1988 「総括」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査報告3 亀山遺跡・西光坊遺跡・寺沢遺跡・道口遺跡・唐津池北遺跡・上竹西の坊遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69、岡山県教育委員会、229～240頁。
- 奥田泰将 1986 「Ⅳ 遺物」『広島市佐伯区五日市町所在池田城跡発掘調査報告書』広島市の文化財第35集、広島市教育委員会、27～50頁。
- 奥田社紀・岡野幸夫編著 1987 『広島市安芸区瀬野町・中野町所在三ツ城跡発掘調査報告書』広島市の文化財第37集、広島市教育委員会。
- 奥田泰将・中村眞哉編著 1986 『広島市佐伯区五日市町所在池田城跡発掘調査報告書』広島市の文化財第35集、広島市教育委員会。
- 尾崎光伸編 1993 『史跡吉川氏城館跡小倉山城跡－御座所跡試掘調査概要－』中世城館跡保存整備事業発掘調査報告5、広島県教育委員会。
- 小都隆・岩本芳幸編 1997 『史跡吉川氏城館跡 吉川元春館跡－第4次発掘調査概要－』中世城館跡保存整備事業発掘調査報告9、広島県教育委員会。
- 小都隆・尾崎光伸編 1994 『史跡吉川氏城館跡 吉川元春館跡－第1次発掘調査概要－』中世城館跡保存整備事業発掘調査報告6、広島県教育委員会。
- 小都隆・尾崎光伸編 1995 『史跡吉川氏城館跡 吉川元春館跡－第2次発掘調査概要－』中世城館跡保存整備事業 発掘調査報告7 広島県教育委員会。
- 小都隆・沢元保夫編 1996 『史跡吉川氏城館跡 吉川元春館跡－第3次発掘調査概要－』中世城館跡保存整備事業発掘調査報告8、広島県教育委員会。
- 小都隆・平川孝志編 1998 『史跡吉川氏城館跡 吉川元春館跡－第5次発掘調査概要－』中世城館跡保存整備事業発掘調査報告10、広島県教育委員会。
- 小都隆・平川孝志編 2002 『小倉山城跡発掘調査報告書 史跡吉川氏城館跡小倉山城跡－第2次発掘調査概要－ 小倉山城跡の研究』中世遺跡調査研究報告第3集、広島県教育委員会。
- 小都隆 2006 『城館遺跡の考古学的研究』溪水社。

- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付埴、皿の分類と年代について」『貿易陶磁研究』第2号、71～87頁。
- 折尾学・森本朝子 1987 「天目茶碗再考」『岡崎敬先生退官記念論文集 東アジアの考古と歴史(下)』573～601頁。
- 鍛冶益生編 1982 『道照遺跡 西条バイパス建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 河瀬正利編著 1979 『畝観音免古墳群－広島県安芸郡海田町所在－』広島県安芸郡海田町教育委員会。
- 北島大輔 2010 「大内式の設定－中世山口における遺物編年の細分と再編－」『大内氏館跡 XI』山口市文化財報告第101集、山口市教育委員会、175～258頁。
- 木戸雅寿 1995 「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、511～521頁。
- 木村信幸編 1988 『小奴可城跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第73集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 小森俊寛・上村憲章 1996 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、(財)京都市埋蔵文化財研究所、187～271頁。
- 是光吉基 1993 「龍山城跡」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第116集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター、16～30頁。
- 是光吉基・妹尾周三編 2005 『特別史跡及び特別名勝 厳島 菩提院遺跡発掘調査報告－宮島町立歴史民俗博物館収蔵庫建設に伴う発掘調査の記録－』宮島町教育委員会。
- 佐伯博司 1990 「石佛遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(V) 本文編』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第84集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、9～206頁。
- 三枝健二編 1998 『中屋遺跡B地点発掘調査報告Ⅰ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第162集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 三枝健二編著 1999 『中屋遺跡B地点発掘調査報告Ⅱ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第181集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 志道和道 1977 「草戸千軒町出土の土師質土器編年試案」『草戸千軒』No.48、広島県草戸千軒町調査研究所、1～6頁。
- 新川隆・重森正樹・沖田健太郎編 2002 『郡山大通院谷遺跡(中世編 本文)』吉田町地域振興事業団調査報告書第7集 (財)吉田町地域振興事業団
- 新川隆・重森正樹・沖田健太郎編 2003 『郡山大通院谷遺跡(西地点編)』吉田町地域振興事業団調査報告書第9集 (財)吉田町地域振興事業団
- 杉山洋 1987 「褐釉系陶器の受容と展開」『岡崎敬先生退官記念論文集 東アジアの考古と歴史(下)』407～572頁。
- 鈴木康之 1995 「各地の土器様相 山陽西部」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社、151～158頁。
- 鈴木康之 1996 「第三章 遺物 土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ 中世瀬戸内の集落遺跡』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、156～226頁。
- 鈴木康之 2006 『中世集落における消費活動の研究』真陽社。
- 妹尾周三編著 1995 『西条西本町山崎1号遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第6冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 田邊英男編 1984 『行武城跡発掘調査報告』行武城跡発掘調査団。
- 田邊英男編 1991 『史跡吉川氏城館跡万徳院跡－第1次発掘調査概要－』中世城館跡保存整備事業発掘調査報告1、広島県教育委員会。
- 田邊英男編 1992 『史跡吉川氏城館跡万徳院跡－第2次発掘調査概要－』中世城館跡保存整備事業発掘調査報告2、広島県教育委員会。
- 田邊英男編 1993 『史跡吉川氏城館跡万徳院跡－第3次発掘調査概要－』中世城館跡保存整備事業発掘調査報告4、広島県教育委員会。
- 辻満久編著 1984 『横山城跡発掘調査報告書』(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 出野上靖 1998 「まとめ」『伎崎城跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第163集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター、63～68頁。
- 永田千織・藤野次史 2009 「安芸地方における中世陶磁器の研究－広島大学東広島キャンパス鏡地区出土資料を中心として－」『広島大学埋蔵文化財調査室研究紀要』第1号、広島大学埋蔵文化財調査室、1～86頁。
- 永田千織・藤野次史・八幡浩二 2011 「安芸地方における瓦器の研究」『広島大学埋蔵文化財調査室研究紀要』

- 第2号、広島大学埋蔵文化財調査室、1～108頁。
- 中野晴久 1995 「常滑・渥美」『概説中世土器・陶磁器』真陽社、383～400頁。
- 中村眞哉・橋本義和・幸田淳編著 1982 『広島市安佐南区沼田町所在国重城跡発掘調査報告』広島市の文化財第19集、広島市教育委員会。
- 濱岡大輔編著 2009 『幾志山城跡発掘調査報告書－広島市安佐北区口田南二丁目所在－』特定非営利活動法人 ヒロシマ文化・健康サポートセンター／(財)広島市文化財団。
- 桧垣栄次編 1978 『恵下城跡発掘調査概報』広島県教育委員会。
- 藤岡孝司 1993 「道照遺跡」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』東広島市教育委員会文化財調査報告第26集、東広島市教育委員会、93～112頁。
- 藤澤良祐 2005 『日本の遺跡5 瀬戸窯跡群 歴史を刻む日本の代表的な窯跡群』同成社。
- 藤田広幸編著 1987 『月見城遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第54集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 藤野次史 1985 「山中地区(山中池北側一帯)の予備調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅳ』広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、10～16頁。
- 藤野次史 1986 「山中地区(山中池北地区)の予備調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅴ』広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、43～46頁。
- 藤野次史 1992 「山中池南地区の予備調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報Ⅹ』広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、39～66頁。
- 藤野次史 1997 「山中池南地区の予備調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報ⅩⅢ』広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、59～88頁。
- 藤野次史編 2005 『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－山中地区の調査－』広島大学埋蔵文化財調査室。
- 藤野次史・永田千織・石井隆博・吉野健志 2013 『鏡山城跡発掘調査報告書－重要遺跡(鏡山城跡ががら地区)範囲確認事業に係る発掘調査－』東広島市教育委員会文化財調査報告書第43集、東広島市教育委員会。
- 藤野次史・榎林啓介 2005a 「山中池南遺跡第1地点の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－山中地区の調査－』広島大学埋蔵文化財調査室、41～90頁。
- 藤野次史・榎林啓介 2005b 「山中池南遺跡第2地点の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－山中地区の調査－』広島大学埋蔵文化財調査室、91～256頁。
- 藤野次史・榎林啓介 2005c 「山中池南遺跡第6地点の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－山中地区の調査－』広島大学埋蔵文化財調査室、257～302頁。
- 藤野次史・増田直人 2003a 「鏡西谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－農場地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室、25～176頁。
- 藤野次史・増田直人 2003b 「鏡千人塚の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－農場地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室、177～189頁。
- 藤野次史・増田直人 2003c 「鏡東谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－農場地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室、190～226頁。
- 松崎寿和・潮見浩 1961 「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第1巻、広島市、114～224頁。
- 間壁忠彦 1991 『備前焼』考古学ライブラリー60、ニュー・サイエンス社。
- 増田直人 2003 「鏡西谷遺跡出土の土師質土器について」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－農場地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室、239～247頁。
- 水口富夫 1983 「第3章遺構と遺物 第2節遺物」『魚住古窯跡群』兵庫県文化財調査報告書第19冊、兵庫県教育委員会、39～65頁。
- 三原市教育委員会 2010 『三太刀遺跡(J－東地区)発掘調査現地説明会資料』。
- 森島康雄 1992 「畿内産瓦器碗の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』113～127頁。
- 森田勉 1982 「14～16世紀の貿易陶磁の研究」『貿易陶磁研究』No.2、47～54頁。
- 森田稔 1995 「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社、356～366頁。
- 山田繁樹・出野上靖編 1998 『倭崎城跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第163集 (財)広島

県埋蔵文化財調査センター。

横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4、九州歴史資料館、1～26頁。

吉野健志 1998 「安芸国中世の土師質土器」『文化財論究』第1集、(財)東広島市教育文化振興事業団、53～76頁。

吉野健志編 2010 『溝口4号遺跡発掘調査報告書－東広島県自動車道建設事業に係る発掘調査－』文化財センター調査報告書第70－1冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。

吉野健志 2012a 「西条盆地の中世遺跡」『シンポジウム安芸地方の中世を探る～中世前期を中心として～』広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門・東広島市教育委員会、13～22頁。

吉野健志 2012b 「土器から見た安芸地方の様相」『シンポジウム安芸地方の中世を探る～中世前期を中心として～』広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門・東広島市教育委員会、37～44頁。

渡邊昭人編 1996 『薬師城跡』(財)広島県埋蔵文化財調査センター。

挿図引用文献

第2図：1～5.石佛遺跡は佐伯1990、2～28.道照遺跡は藤岡1993より引用、一部改変。第3図：道照遺跡は鍛冶編1982より引用、一部改変。第4図：1～8.浄福寺3号遺跡は青山編1990、9～28.溝口4号遺跡は吉野編2010より引用、一部改変。第5図：狐が城跡は植田1983より引用、一部改変。第6図：1～13.時宗遺跡は石井編著2003、14～40.上条遺跡は石井編1987より引用、一部改変。第7図：中屋遺跡B地点は三枝編著1999より引用、一部改変。第8図：城仏土居屋敷遺跡は恵谷編2005より引用、一部改変。第9図：山崎1号遺跡は妹尾編著1995より引用、一部改変。第10図：薬師城跡は渡邊編1996より引用、一部改変。第11図：菩提院遺跡は是光・妹尾編2005より引用、一部改変。第12図：1～8.恵下城跡は桧垣編1978、9～22.三ツ城跡は奥田・岡野編著1987、23～31.横山城跡は辻編著1984より引用、一部改変。第13図：国重城跡は中村・橋本・幸田編著1982より引用、一部改変。第14図：1～20.有井城跡は稲葉編1993、21～33.幾志山城跡は濱岡編著2009、34～52.北谷山城は阿部編1983より引用、一部改変。第15図：三太刀遺跡は梅本編著2003より引用、一部改変。第16図：俵崎城跡は山田・出野上編1998より引用、一部改変。第17図：吉川元春館遺跡は小都・尾崎1994、小都・平川1998より引用、一部改変。第18図：第2～10図利用遺跡の報告書より引用、一部改変。第19図：第11～14図利用遺跡(月見城跡を除く)の報告書より引用、一部改変。88～91.月見城跡は藤田編著1987より引用、一部改変。

Study of Haji Ware Shaped *Tsuki* (坏) and Dishes in the Aki Area (2)

Chiori Nagata, Tsugifumi Fujino

In my “Study of Haji Ware Shaped *Tsuki* and Dishes in the Aki Area (1),” I examined the excavated condition, form, and manufacturing technology of the Haji ware shaped *tsuki* and dishes from the Middle Ages that were excavated on the Hiroshima University Higashi-Hiroshima Campus. For this paper, I excavated Haji ware in the Aki area (western Hiroshima Prefecture) on the basis of the above analysis. I targeted four regions in the Aki area— Saijo Basin, Hiroshima Gulf, Nutagawa, northern Aki region —for analysis. I discuss the chronology and regionality of Haji ware in the Aki area, and I produce a chronology for Haji ware shaped *tsuki* and dishes in the Saijo Basin and Hiroshima Gulf from the 12th to the 16th century, divided into five periods. It is clear that there are two great epochs for assemblages of *tsuki* and dishes in the Aki area: from the late-12th century to the end of the 12th century, and during the late 16th century. It is also clear that the assemblage, typology, and manufacturing technology in each region differ according to the context of Ouchi-type Haji ware and sub-regionality.